

犯罪者になったらコナンに遭遇してしまったのだが

だら子

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

転生者が復讐のために犯罪を犯したら、その場にコナン御一行様がいた話。「完全なる逮捕フラグ。ありがとうございました」という、どうにでもなれ状態で色々と勘違いされるお話。

最終的にはコナンのライバルポジになり、平成のジェームズ・モリアーティと呼ばれるようになる。そんなストーリー。

※何でも許せる方向け。

※犯罪を推奨しているわけではありません。

※pixivでも投稿済み。

※番外編は短編へ移動しました

## 目次

其の一：	「転生した復讐者の目覚め」	1
其の二：	「真実はいつだって残酷」	13
其の三：	「平成のモリアーティ教授」	19
其の四：	「死神は勘付く（上篇）」	30
其の五：	「死神は勘付く（下篇）」	39
其の六：	「会いたくない人物ほど遭遇してしまう」	46
其の七：	「紫の銃剣」	55
其の八：	「ミステリートレインには乗るな（上編）」	65
其の九：	「ミステリートレインには乗るな（下編）」	74
其の十：	「ベルモット（上篇）」	84
其の十一：	「ベルモット（下篇）」	93
其の十二：	「怪盗は微笑む」	103
其の十三：	「切り裂きジャックとホームズ」	117
其の十四：	「森谷帝二はシンメトリーがお好き」	132
其の十五：	「炎上」	142
其の十六：	「幻想は現実のものとなる」	154

## 其の一： 「転生した復讐者の目覚め」

——森の奥深くにある旅館に泊まったら、コナン御一行様がいた件について。

もしも私の手元に携帯かパソコンがあるなら、そんなスレッドを某大型掲示板で投稿していたはずだ。残念ながらネットに接続できる機器類は全て部屋の中だが。

震える手を口元へ持つていく。嘔吐しそうなくらい気持ちが悪い。グツと眉間に力を入れた。

地面に座り込みながら、前に視線を向ける。

そこには首吊り自殺をした男の死体があった。

死体の周りには毛利小五郎、江戸川コナンといった面々が険しい顔をして死体を検証している。彼らの横には鈴木園子や毛利蘭が怯えた表情で死体を見ていた。

私はそれを尻目に内心で全力で叫ぶ。

(まさかのコナン世界に転生してた!!)

ふざけないで欲しい。コナン世界に転生していたと知っていたならば、絶対に旅館などに泊まりにこなかった。森の中にある旅館なんてフラグ立ちまくりじゃねーか。

用事があったから仕方がないんだけど。でも、コナンがいると分かったのなら、即帰ったのに！

更に救えないことに自分が「コナン世界に転生している」と気がついたのは、つい先程。

死体の周りにコナン御一行様が集まってきた瞬間、唐突に思い出したのだ。所謂、フラッシュバックというやつだったのだろう。

死体とコナン御一行様との遭遇がキーとなり、脳内に眠っていた前世の記憶が解禁されたらしい。バババーンツと脳内に突然膨大な情報を叩きつけられたのだ。

痛みで悶え死ぬかと思った…。そのせいで私は今、立ち上がれないぐらい気分が悪い。頭がぐるぐると回る。吐きそうだ…。

全く、運がない。前世も、今世も。

一緒に旅館に泊まりにきていた友人が、そんな私の背中を心配そうにさすつてくれている。

それを有り難く思いながら、目を閉じた。

(ああ、本当に運がない。こんな時にコナン達がいるなんて)

(本当に、本当に、運がない)

(――復讐の最中に遭遇してしまうなんて)

コナン御一行様が検証している首吊り自殺の男――あれは私が殺した。

あははは。私がコナン御一行様に遭遇したことに嘆いているのは、殺される恐怖からだと思った？

違うね。真実を暴かれるかもしれない恐怖に怯えているんだ。

強めに唇を噛む。ぷつりと唇の皮が切れて、血が滲んだ。口の中に血特有の気持ちの悪い味が広がる。

今世では色々あり、殺したいくらいに憎んでいる人間が何人かいる。拷問に拷問を重ねて、死の絶望を味わって欲しいくらいの人間がいるのだ。

今、私の目の前にいる死体も私が憎んだ相手。自殺に見せかけるため、首吊りに態々してやった。女の私が男を殺すのは苦勞したものだ。

私は復讐のために人生の全てを賭ける勢いで臨んでいる。警察ですら、あの男の死を自殺と判定するだろう。それくらい綿密な計画を練り、実行。上手くやれると思ったのだが――。

(無理だよなああああああああ!! だってコナン様だよ? 迷宮入りの難事件を解決しまくってる主人公様だよ? 無理ゲーじゃねーか!)

くっそー! ふざけんなよ! コナン様の目を欺ける自信がねえ!! 逮捕フラグしか見えない!!

例え、もしも、本当にもしも、コナン様を騙せたとしても、捕まる未来以外想像できないんだけど…。

この世界には警察よりも賢い探偵達がわんさかいる。服部平次、降谷零、白馬探、赤井秀一。今、考えられるだけでも4名くらいはいる

のだ。この内2名は警察官も兼業しているが。

何故私は探偵が蔓延る世界で犯罪を犯しちやつたの…。辛すぎる…。

(でも、復讐しなかったんだもん…！ くっそ、確実に捕まる…！ 私もここで終わりか…)

一人殺せただけでも良しとするか…？ いや、でも、一番殺したいやつを殺せていない。まだ捕まるわけにはいかない…！

モラルに反するような考えを巡らせる。人を殺した時点で道徳的にアウトだけどな！

少しの不安と社会に対する罪悪感が湧いた。

グツと手に力を入れる。

(私も堕ちたものだ…)

私が憎つくき男を殺した時、胸に込み上げてきた感情は『歓喜』だった。

ようやく、ようやく、無念が晴らせるのだ、そう思ったのだ。スツと心の枷が一つ外れた気分だった。

だが、人を殺して心が軽くなるなんて笑い事ではない。例え、それがどんなに憎い相手だとしても。

私があの時抱くべき感情は、罪悪感と怒りのはずだった。殺しによつて喜びを抱くなど快樂殺人鬼と同じだ。

一般人の方にとっては人を殺したのだからどちらも一緒と思うかもしれない。けれど、ここは変えてはいけない領分だ。あくまで私は復讐者なのだから。

(復讐者が快樂殺人鬼になつては本末転倒。私はここで裁かれるべきか。だからこそコナン御一行と今、ここで遭遇したのかもしれない)

自首、しよう。

それがいい。そもそも私には人殺しなんて向いていなかったのかもしれない。最後の最後まで私は迷っていたのだから。

吐き気を根性で抑え、立ち上がる。手が微かに震えた。

ずっと私の側にいてくれていた友人にお礼を言った後、歩き出す。

毛利小五郎や江戸川コナンに、「私が犯人だ」とこっさり言うために。彼らの背後に立ち、声をかけようとした瞬間だった。

「もっ、毛利さん！ 毛利さん……！」

「女将さん?! どうしましたか?!」

「ひっ、」

「ひ?」

「人がまた死んでるんです……！」

旅館の女将の言葉に空気が凍った。

ついでに私の表情も凍った。

女将の顔は真っ青で今にも倒れそうだ。自分の旅館で二件も殺人事件が起きている挙句、死体を見たのだから当たり前だ。

そんな女将を毛利小五郎が慌てた様子で抱きしめ、詳細を聞く。

女将曰く、「ここで見つかった男性死体と一緒に旅行に来ていた女性、部屋で首吊り自殺をしていた」と言うのだ。

(えっ……?? 自殺……?!)

私が殺した男と一緒に来ていた女は既にリサーチ済み。確か男の愛人だったはずだ。

もしかして男が死んだショックで自殺したのか……? いや、あの愛人はかなり性格が悪く、男を利用するために近づいた女だ。まずそれはない。他殺の方が可能性の方が高いように思えた。

(いや、それよりも自首しなくては……！)

予測不可能なことが起きて、テンパりながらもコナンを捕まえる。先程の女将からの報告を聞いて、必死に推理していたのだろう。それを邪魔されたからか、一瞬だけ鬱陶しそうな顔をした。直ぐに可愛いコナン君に戻ったが。

ご……ごめんって。捜査の邪魔をして……。

「あの……コナン君」

「どうしたの?」

不思議そうな顔をするコナン。それを見て、ちよつと待てよ? という気持ちになった。

私はコナンが工藤新一だと知っている。だからこそ、私は有能な探

偵たる彼に自首しようと考えた。

だが、本来ならそれは知るはずのない情報だ。ただの子供のコナンに唐突に自首する犯人がいるだろうか？ ……いるわけねーよ！ いたら逆に怖いわ！

あつぶねー…自ら違うフラグを立たせるところだった。流石に黒の組織フラグはいらない。

私はなんとか誤魔化そうと咄嗟に口を開いた。

「私が犯——いや、何でもない。子供がこんなところにいるべきじゃないよ。部屋に戻ろう？」

「あ、あははー！ 大丈夫だよ！ 直ぐに戻るから」

コナンの顔が、「やっべー痛いところ突っ込まれた。でも、俺は子供じゃねえんだよな」みたいになつてた。

「ごめん！ 捜査の邪魔をするつもりはなかったんだけど！ 咄嗟にそんな言葉しか出なかった。

申し訳ない気持ちで一杯になっていると、またもやドタドタと激しい足音が聞こえて来る。ガラツと障子を開けたのは大学生くらいの若い青年だった。

「毛利さん…!!」

「今度はなんだ?!」

「人が！ 人が…！ 風呂で首を吊って死んでいるんです…！」

「はあ?!」

怒涛の首吊り死体ラッシュである。

どうなつてんだ。一日に三人も人が死ぬって…。しかも、同じ場所です。打ち合わせでもしてんのか?! コナン世界怖すぎだろ…!

あまりの恐怖に震える。

そんな中、毛利小五郎は一先ず女将の方の死体を見に行くことにしたらしい。彼は女将の後をついていった。

余談だが、警察がこの場にいないのは、旅館に唯一通じている道で土砂崩れが起きてしまったからだ。コナン世界のテンプレ乙。

(やばいやばいやばい。自首できる雰囲気じゃなくなってきた！ よく分からない事件が起こって来やがってる！)

このままじゃあ解決編でコナンにトリック全てを暴かれ、懺悔モードに入ってしまう…!

こんな大勢のところでは懺悔はするつもりはない。私の復讐のきっかけは誰にも話すつもりはないのだから。

又、もしも私がこの場で自首すれば、三件同時首吊り事件が私に全てやったことになるかもしれない。それにより、肝心の殺人犯を逃がす可能性がある。そんな輩を逃すわけにはいかないのだ。

自分が人を殺しておいて何をほざくかと思うかもしれない。だが、その犯人が私と違って快樂殺人鬼だったとしたらどうする？ 罪のないものまで死ぬかもしれない。それは絶対に嫌だ。

(そっ…そうだ！ コナン君にそれとなく、「私が犯人ですよ。でも、他にも犯人がいるかもしれないよ」的な雰囲気流して、秘密裏に私と他の犯人を捕まえて貰おう)

じっと考え込むコナンの隣にいた私は、更に少しだけ彼に近づく。雰囲気を出す為に目を伏せる。自分に言い聞かせるように独り言を呟いた。

「アザミの花は一体誰が持つんだろう。白いアネモネを見失わず、静かにしろ」

「へ？」

「ああ、ごめん、何でもないよ。少し気分が悪いから部屋に戻るね。コナン君も早く戻りなよ？」

私が小さく呟いた言葉が聞こえたのだろう。コナンはきよとんとした顔になった。

私はそれに対して、「あつ、いつけな〜い☆」みたいな表情を一瞬だけ見せる。直ぐに取り繕い、優しく微笑んだ。

非常事態のみ無駄に演技が上手くなる…。火事場の馬鹿力というやつなんだろうか…。

(一応、遠回しに私が犯人であることと、他にも犯罪者がいることを伝えてみたが…分かるだろうか)

アザミの花言葉は「復讐」。

白いアネモネの花言葉は「真実」。

私が言いたいのは、「復讐心を持つのは一体誰なんだろうか。真実を見失つてはいけないな…」ということである。

復讐心を持つのは私。つまり、犯人は私ということを示唆。

しかし、私だけが犯人と思われないように、「真実を見失わず」と呟いたのだ。私を捕まえて全てが終了となつては困る。何の為に無駄な暗号を考えたと思つているんだ。

ついでに、最後、「静かにしろ」を付け加えたのは、「頼むから誰もいないところで裁いてくれよ?!」という懇願である。これが一番大切だ。

簡易の暗号としては上々ではないだろうか。この場で花言葉が咄嗟に分かる奴はコナンくらいである。もしくはコナンへの情報提供役とか。たとえ今の時点で分からなくても、きつとコナンなら推理してくれるだろう。我らがヒーロー、天下無敵のコナン様なのだから。

満足げに内心で頷く。しかし、外面は弱々しく微笑んでみせた。

何か言いたげなコナンをガン無視して歩き出す。

死体を見ながら立ち竦む友人を連れて直ぐに部屋へ帰宅した。さっさと部屋の敷布団に倒れこむ。

(あー…疲れた…)

今後、もつと辛い事案に巻き込まれるとはいざ知らず、私は呑気に背伸びをしていた。

・  
・  
・  
(この事件はどっかおかしい…)

三件同時に起きた首吊り自殺事件。

最初は金持ち男の首吊り死体の発見から始まった。次に女将さんがその男の愛人の首吊り死体を部屋で発見。最後にスタッフの青年が風呂場で若い男の首吊り死体を見つけたのだ。

まるで打ち合わせしたかのように起こる怒涛の事件。

いや、恐らく本当に打ち合わせをしたのかもしれない。三件同時に首吊り死体が発見されるなんて、滅多に起こらないだろう。

小五郎のおっちゃんは、「偶然にも首吊り自殺が同じ時に起こった」と嘯いてはいるが…。

俺はこの事件は自殺などではなく、他殺であると睨んでいた。

確かにどの死体も自殺に見える。特に一番初めに発見された死体なんて、最初は自殺だと思っってしまった程だ。

だが、こんなにも連続して死体が見つかるのは明らかにおかしい。

それに——俺の探偵の勘が「自殺ではない」といつていた。

(それと、幾世さんが言ったあの言葉が気になるな…)

——幾世あやめ。

この旅館に友人と共に泊まりに来ている二十代後半の女性だ。大人しい風貌で、控えめな笑顔が印象的な女性である。

そんな彼女の友人が、一番初めの首吊り死体の第1発見者だ。

幾世さんと話している時に、彼女の友人が大きな悲鳴を上げた時は驚いた。幾世さんと共に慌てながら彼女の友人の元へ向かうと、人が死んでいたのだ。

その時の幾世さんの動揺っぷりは見ていられなかった。

顔を真っ青にさせて、全身を震わせながら床に崩れ落ちたのだ。恐らく、初めて死体を見たのだろう。

そんな風に怯える幾世さんを見て、彼女の友人は硬直させていた身体をすぐに動かした。幾世さんがあまりに動揺していた為、自分がないとかしなくてはと思ったのだろう。床に座り込む幾世さんの背中をひたすら撫でていた。

(そんな幾世さんの言葉——「アザミの花は一体誰が持つんだろう。白いアネモネを見失わず、静かにしろ」)

一体どういう意味だ？ 幾世さんはこの事件に参与しているのか…？

暗号のような幾世さんの言葉に頭を回転させる。

アザミの花言葉は「復讐、独立、厳格、満足、触れないで、安心」。

白いアネモネの花言葉は、「真実、希望、期待」。

幾世さんの話した文章に合う花言葉を当てはめてみると、一つの文が出来上がる。「復讐心を持つのは一体誰なんだろうか。真実を見失ってはいけないな…」と。もしかしたら他の可能性もあるが、一番しっくりくるのはこれだった。

(幾世さんは何を知っている？ この事件に彼女は関係があるのか？)

幾世さんがこの言葉を呟いているとき、瞳が曇った。闇を詰め込んだような、ゾツとする瞳になったのだ。

人を人だと思っていない表情をしていた。まるで熱をもたない人形みたいな顔。

それを見て俺は一瞬だけ幾世あやめという人物に恐怖を抱いた。この人にはどんな常識も通用しない化け物だと思ってしまったのだ。直ぐに幾世さんは優しげな雰囲気に戻ったが…。何かあるようにしか見えない。

黒ずくめの男達と出会ったときのような、でも、種類の違う恐怖を幾世さんから感じたのだから。

(暴いてやるぜ、真実を！)

そう意気込みながら俺は情報収集をしていく。

——最終的には犯人が分かり、捕まえることが出来た。

犯人は実は二人いたのだ。一人は幾世さんの友人。もう一人が旅館の女将さん。

幾世さんの友人が一番初めに発見された男を殺し、次に男の愛人を同じ方法で殺害したらしい。理由は復讐。

二人に騙され、莫大な借金を作る羽目になったからだとか。そこまですら警察に通報すればいい。

だが、男は議員で、警察や他方面にも沢山賄賂を握らせており、訴えることが出来なかった。それが理由で男と愛人を殺害。

女将さんの殺害理由は同じく、復讐。

復讐しようと思っていた時、先に二人の首吊り死体を偶然発見したらしい。「この二人を殺した誰かの犯行に見せかけて、その誰かに罪をなすりつけよう」と思い、同じ首吊り死体を作ったとか。

(幾世さんの「復讐心を持つのは一体誰なんだろうか。真実を見失ってはいけないな…」はこれだったのか)

俺は初め、犯人はつきり一人だと思っていた。だが、色々と検証して、幾世さんの助言を思い出した結果、犯人が二人だと見抜けた。最初から幾世さんはこれに気がついていたのであるか？ それとも自分の友人にどこか疑問を抱いていたのか？ 分からない。

(それに——この事件、解決したといっても…なんだかモヤモヤする) そう、何か見落としているような。誘導されているような。真実を覆い隠されているような。——そんな気がするのだ。

思考の海に沈む。そんな時に幾世さんが廊下の角から歩いてきた。つい先程まで考えていた人物に偶然会ったことに驚く。幾世さんは俺を見て、笑顔を浮かべていた。

(そうだ。この機会に聞いてみるか)

コナンらしい可愛い子供の声を意識して、「ねえ、幾世さん。聞いたことがあるんだけど」と話しかける。幾世さんは首を傾げながら俺に視線を合わせるために身を低くした。

「どうしたの？」

「幾世さんは死体が見つかった時にどうして『アザミがアネモネが』とか言ってたの？」

「やだ。聞こえちゃってた？」

「なんで？ 僕、蘭姉ちゃんからアザミの花言葉は『復讐』だって聞いたんだ！ 幾世さんは犯人が分かったの？ ほら、幾世さんのお友達や女将さん動機が復讐だったからさ」

はぐらかされるのは嫌なので直球で聞いてみた。すると幾世さんはキョトンとした顔になる。

「お、これは何かあるか？」と目を鋭くさせると、幾世さんは小さく笑った。いつものような優しい笑顔で。

「実はね、私の友人が犯人じゃないかと思ってたんだ。あの子、ある日突然変わっちゃったから…。友人が犯人だと考えると、動揺しちゃうて変なことを呟いてしまったや。ごめんね。」

「そうなんだ…。じゃあ、犯人が複数いることは？ 何で分かったの

？」

「友人があんな沢山の人数を殺すとは流石に思わなかったし…。勘だけど、他にも犯人がいるのかと思ったんだ」

普通の反応だ。普通で、凡人で、可愛らしい女の人の反応だ。

幾世さんは死体を見た時にかなり動揺していた。アレは演技で到底できるようなものではないだろう。本当に顔が真っ青になっていたしなあ。

やはり俺の思い違いだったか…?? 彼女に恐怖を一瞬でも抱いたこと全て。

復讐や真実を咄嗟に花言葉に例えた幾世さん。恐らくは友人の為にボカして発言したのではないだろうか。

又、あの時幾世さんはかなり動揺していた。人によつては動揺を抑えるため、自分に言い聞かせるように独り言を呟く者もいる。

俺は笑顔を浮かべて、「そうなんだ。変なこと聞いちやってゴメンね」と言った。幾世さんは「大丈夫だよ」と笑いながら俺の頭を撫でる。

その時、自分の後ろ側から「コナンくん！ 何処にいるの?!」という蘭の声が聞こえた。慌てて振り向き、蘭に返事をしようと思った刹那。

——ゾクツツツ

身の毛がよだつ。全身の汗腺から汗がブワツと出てくる。ツウと背筋に冷や汗が流れた。思わず凄まじい勢いで振り返る。

だが、そこにいるのは穏やかな顔をした幾世さんだけ。急に振り返った俺を見て、幾世さんは不思議そうな顔をしていた。

(なん…だったんだ?)

気のせいで済ませないぐらいの恐怖を感じた。何だったんだ。でも、恐怖を感じた方面にいるのは幾世さんだけ。やはり…気のせいなのか…??

俺はそんな気持ち振り切るように蘭の元へ走り出す。微かに手

を震わせながら。

この時、俺は気がついていなかった。

俺が生涯を賭けてでも捕まえてやりたいと思う犯罪者と遭遇したことなど。

俺は見逃してしまっていた。数多の偶然か、それとも策略のせいかわからないが、真の犯人を見逃していたのだ。

江戸川コナンの物語は終わらない。

其の二： 「真実はいつだって残酷」

(なんで私、捕まってないんだろう…)

旅館のソファーに座り、足を組む。目の前には私の友人が座っていた。手錠を掛けられた腕が痛々しい。私はどう言葉をかけていいかわからず、口を噤んだ。

私が殺した男を何故か友人が殺害したことになっていた件について。

訳がわからないよ。完全に逮捕フラグだと思っていたのに。

毛利小五郎が友人を犯人だと伝えてきた時は驚いたものだ。「貴方のご友人は復讐のために男と彼の愛人を殺したんです」と言ってきたのだから。

おい、ちよつと待てよコナン…?! いつもの鋭い推理はどうした…?! それとも毛利小五郎が今回は推理したの…?! と思った。

推理ショーは私が寝込んでいる間に終わったらしい。起こしてよ?! とも思ったものだ。

まさかのハブられていた。私だけ遅れて報告である。ちよつと目から涙が出た。さみしい。

(そんなテンパってる時にコナンが「アザミの花がくとか言ってたのはなんで?」とか聞いてきやがったしな!)

『アザミの花は一体誰が持つんだろう。白いアネモネを見失わず、静かにしろ』という適当な暗号文のことである。

まさかの蒸し返しにドツと冷や汗が流れたものだ。「やばい。真犯人だと疑われている?!」と思い、焦った。なんとか誤魔化せたが。コナンが本当に怖い。

(馬鹿か私は! 「自首しよう!」という血迷ったことを考えやがって…!)

あの時の私はどこか変だった。

コナン世界に来たという事実。人殺しをしたという背徳心。前世の記憶の混入による吐き気や頭痛。全てが混ざり合い、思考力を低下させていた。

——私が憎つくき男を殺した時、胸に込み上げてきた感情は『歓喜』だったのは確かだ。

だが、それがどうしたというのだ。人殺しは人殺し。

復讐だろうが、快樂殺人だろうが、同じ人殺しだ。例えどんな崇高な理由があろうとも、人殺しに変わりない。

——本懐を遂げる。それこそが私の使命。

どんなに罵られようともやり遂げる。どんなに人道から外れようともやり遂げる。憎き奴らを殺すのだ。

(だから今の状況は幸運だ。「男と愛人を殺した」と友人までもが認めているんだから。訳がわからないけどな！)

何故、友人が「男を殺した」と言うのか分からなかった。だって私がそいつを殺したのだから。

友人が私の計画を何らかの方法で知り、庇ってくれたのかとも思った。

だが、今、私の目の前にいる友人は非常に申し訳なきような顔をしている。普通、庇った相手にする表情ではないだろう。

友人は目を伏せて、謝ってきた。「楽しい旅行を台無しにしてごめんね」と震える声で言う。

流石にどう返答したらいいか分からない。困った表情を浮かべた。そして、今、素直に疑問に思っていることを口にする。

「復讐のために殺したんだね…。確かに最近ピリピリしていたけど…。私と旅行に来たのはその人を殺す計画があったからなの？」

「ごめん……」

やっぱりな。随分と用意周到なことだ。私が言えた義理ではないが。

因みにこの旅行に誘ったのは私だ。

だが、彼女も私をこの旅館への宿泊に誘おうとしていたのではないだろうか。声をかけた時、随分と驚いていたようだったから。

てつきり、「仲良くなって間もない同期に突然誘われて驚愕した」だと思っていたのだが……。

(彼女が私を誘おうとした理由……。恐らく、私が彼女を選んだ理由と

同じだろうな)

私が友人を選んだ一番の理由——それは、「彼女の変化に気がつく人間があまりいない」からだ。

友人と私は同じ会社の人間だ。

その会社の中で、彼女は途中入社1年目の人間である。

そんな友人がもしも殺人事件に遭遇したと想像してくれ。彼女は多少気落ちするに違いない。

だが、友人は無理をして、職場では明るく振る舞い続けるだろう。周りに心配かけないようにと考えて。

しかし、そんな友人の不安を見抜ける人は少ないだろう。友人がどういった人間かまだ社員達は理解しきれていないから。

それを見越して、私は同行者にこの友人を選んだ。

(都合がいいことに友人は天涯孤独の身でもあったし)

天涯孤独だと何でも相談できる相手がいらないか、少ない可能性が他よりも高い。

そうだとすれば人伝に殺人事件の内容が漏れにくくなるからね。犯罪を犯す際の隠れ蓑としてこれ以上の人材はいない。

余談だが、私も途中入社1年目の人間だ。復讐のため、態々転職した。『私』という人間を理解されなかったための対策だ。

更には天涯孤独という点も同じ。

やっべー完全に被ってるじゃねーか。

(まさか私と同じ人物を憎んでいたなんて思いもしなかった。人生、何があるか分からないな)

やっぱりあの男は殺して正解だった。

そんなモラルに反する考えを抱く。

私の時も警察などに訴えても聞いてもらえず、泣き寝入りすることになったのだから。私以外にも被害が及んでいるとは思わなかった。許すまじ。

(どうしてあんな奴らがのうのうと生きていている？ 何故真面目な友人が苦しまないといけないんだ?)

悪い事をしている人間が堂々と暮らしている。それはおかしくは

ないか。

真面目な者ほど痛い目をみて、悪人ほど幸せに暮らしているのだ。変ではないだろうか。

詐欺に遭わなければ、友人だって幸せに暮らしていたはずだ。真面目な良い子だったから。

人を殺した人間に、良いも悪いもないかもしれないけれど。

でも、それでも、おかしくはないか。

復讐は駄目なことなのか。目には目を歯には歯を。痛みには痛みを。苦しみにはそれ相応の苦しみを。

法が奴らを裁いてくれるならそれでいい。

だが、法が裁いてくれない者もいる。あの男のように。

だから、殺す。

私が憎むべき相手を、自分自身の手で、殺す。必ず殺す。刺し違えてでも殺す。

憎しみのあまりに手が微かに震えた。明確な殺意がどろどろと胸の中から湧き出る。怨恨の炎がジリツと目の奥で弾けた。憎き復讐相手達の笑い声が脳内で響き渡る。

(駄目だ。抑えろ自分。友人以外にも今ここには人がいる。おかしくなれば今までの努力は水の泡だ)

そう考えて、唇をギョツと噛んだ。じわりと血が滲む。口の中に独特の味が広がった。

自分の殺意が表に出ない様に必死に押さえ込む。憎しみの感情に蓋を一時的に被せた。

ハアとため息を吐く。すると気分が少し回復した。

(今は復讐相手達を考えるよりも大事なことがあるんだった)  
『何故私が殺した男を友人が殺したことになるのか』。これを知らなくては。

私は泣きそうな表情になってみせた。動揺した雰囲気を出す。そのまま友人の顔を見据えた。

「もしかしたら犯人じゃないかと思ってたよ…。でも、成人男性を持ち上げるなんて、女は無理。だから、ずっと否定してたのに…！嘘だと言つて。ねえ、嘘でしょう?! あんな殺し方できないよね…?!」  
「嘘じゃないよ、幾世さん」

「コナンくん…?!」

お前はでてくんや!!

そんなことは言えないので、口を噤んだ。

コナンは私の前に立つ。彼はポケットに手をつ込みながら私を見た。キラリと眼鏡が光る。

「コナンくん!」という毛利蘭の声が向こうから聞こえた。

ちよつと保護者ア! ちゃんと止めておいて!!

そんな周りをガン無視なコナンくん。彼は私に視線を向けながら口を開いた。

「最初に発見された男——彼は自分で首を吊ったんだ」

「は?」

「けど、死の恐怖でしつかりと首を吊りきれいでいなかった。まだ息があったその時に犯人がそのまま首を締めて殺害したんだ」

何でそんなことになってんだ…?!びっくりしすぎて思わず素が出る。

私が男を自力で吊り上げたトリックは何故バレていない? コナンなら確実に暴くだろうと思っていた。

それとも私が完璧だったのか? 男の遺書も態々やつの自筆のものを用意した程だ。首を吊らせるときも細心の注意を払った。だからコナンは見抜けなかったのか?

いや、それだけでは足りない。だって天下無敵のコナン様だぞ? その程度で敗北なんてあり得ない。

私は微妙な顔になった。それを「友人が犯人だったことにまだ困惑している」と思われたらしい。

コナンくん「幾世さんは休んだ方がいいよ」と言われた。

いや、違うんだよ。確かに困惑している。けど、それは違う困惑なんだよ!

(どうなってんの?!)

——その時はそれで終わってしまった。だが、後から友人の犯行の仕方を聞くことができた。

なんと友人は私に自分の罪を擦り付けようとしていたらしい。

結果、わざと部屋に傷を付けたり、犯行用の道具に私の指紋をつけたりしていたとか。そのお陰で私の犯行が友人に上書きされたのだ。

更にミラクルが起きていた。

私が犯行に使った道具類がある。自分の部屋に放置したものや、旅館内に隠したもの。外に捨てたものまで色々だ。

その道具を友人や犯人の一人の女将さんが使ったらしい。偶然にも全て。

しかも、外に捨てたものは嵐で全部流されているときだ。

余談だが、これは後日私が自分自身で調べたものになる。

しかし、コナンと話している時の私はそれを知る由も無い。

私は眉をハの字にしながら、悲しそうな顔をした。「そっか…」と友人の言葉に頷く。その後、口を開く。

「そっか。本当に犯人なんだね。でも、それでも。また一緒に旅行に行けたら、行こうね」

「…ッ！ ごめん、本当にごめんねえ…！」

私の言葉を聞いて、涙を流す友人。

少しの罪悪感が胸に込み上げてくる。一瞬、彼女の罪を軽減するために自首すべきかと考えた。

だが、その考えをすぐに打ち消す。

彼女の背中を撫でながら、目を閉じた。

——私の復讐はまだ始まったばかり。こんなところで捕まるわけにはいかないのだから。

### 其三：「平成のモリアーティ教授」

あの事件から、私の生活は一変した。  
もちろん悪い意味で。

私はまだ殺したい相手が何人もいる。復讐をしようと綿密に計画を練り、実行するのが当然だろう。

だが、全てその計画が丸つぶれになるのだ。例えば計画通りの場所に向かったとする。そこには何故かコナン御一行様が必ずいるのだ。

仕方がなく、復讐は中断になる。あの事件のようなヒヤヒヤ感ももう二度と味わいたくないからな。

（ふざけんなよマジで。お陰様で少年探偵団やら鈴木園子やらと仲良くなつてしまったんだけど！）

私が復讐を中断しても、何故だか起こる事件。巻き込まれる私。早く解決してほしいので、ついつい手を貸す私。

気がついたら仲良くなつていた。どうなっているんだ。レギュラー張れそうなくらいの遭遇率だぞ。

このままでは復讐が遂行できない。  
どこか…どこかないのか?! コナンに邪魔されない場所はないのか?!

復讐相手が行く場所を必死にリサーチ。この時の私は死に物狂いで探していたと思う。寝る暇も惜しんで調査をした。コナンに遭遇しないために。

いや、だつて、笑えないくらい遭遇率だつたからね?!

更にはコナンにこの前、「幾世さんはどう思う?」と助言を求められたのだ。これはいいよアウトである。本当に復讐が出来なくなつてしまう。

その結果、私はイギリスに行くことに決めた。復讐相手が次に向かう場所をリサーチしたらイギリスだと判明したのだ。

私は歓喜した。嬉しさのあまりにガッツポーズをした程である。

「イギリスならまだマシ! コナンや服部や安室は日本! 赤井はアメリカか日本! イギリスには白馬やその他諸々はあるけど…。コ

ナンは来ないだろ！ パスポートないし！」

直ぐに計画を立て、渡英。今で一週間が経過している。

事件が一つも勝手に起きていないのだ！　なんて幸せなんだろうか！　ようやく私が起こす側になれる！　万歳！

今は協力者との最終確認の為、カフェに来ている。比較的人の多い店のテラスだ。変装のために被っているウィッグが揺れた。

そんな中、協力者が店に入って来る。私の目の前に彼は座った。

「やあ、モリアーティ教授。待たせた」

「それ、やめてくれる？　好きじゃない」

目の下にクマがある、白髪の男がうつそりと笑った。私はそれに不機嫌そうに返す。この協力者は嫌いなんだよなあ。

——この男の名を、ハーデスという。

彼の経歴を掻い摘んで話そう。

難病の母親の手術費を作るため、彼は多方面から金を借りていた。

そこまでならいい。しかし、彼はその金を株やブックメーカーに突っ込んだ。結果は惨敗。

そのせいで彼の母親は手術が受けることができず、他界したのだ。自業自得である。

だが、残念なことにこいつはそうと思わなかったらしい。

母の死でハーデスは人が変わった。借金返済を迫った知人や友人を惨殺。更には手術を断った病院を次々に爆破したのだ。

そんな男が私の協力者である。全力でチェンジしたい。精神異常者は出来れば相手にしたくないものだ。

更にム力つくことに、彼は殺人を復讐と称している。

それが復讐なわけがないだろ!!　逆恨みやめろ!!　と怒鳴りたい気分だ。復讐者の私からすれば容認できない範囲である。だから正直、こんなやつとは組みたくない。

でも、使い勝手がいいので手が切れないんだよね。

(この男は存外賢いからなあ。私の言うこともウキウキと聞いてくれるし。情報収集も上手いし。はあ)

ため息を吐く。そんな私をハーデスは嬉しそうに見ていた。新し

い本を読み進めているガキのようにキラキラとした目をしている。

いや、良い方向に誇張しすぎた。ギラギラとした目だ。貪欲に本を読んでいる可愛くない野郎の目である。

恐らくは「モリアーティ教授」呼びを私が嫌がっていることに楽しんでいるのだろう。私の反応を面白おかしく見物していると見た。次はどんな反応をしてくれるんだろう！ 的な感じで。性格の悪い奴め。

私は嫌そうな顔をしながら肘をつく。ハーデスはそんな私に視線を向けてきた。彼はそのまま役者のように話し出す。

「何故だい？ 貴方に敬意を払ってこう呼んでいる。あのホームズに自分の命を賭けてでも捕まえたいと言わしめた男だぞ？ 嬉しくないかい？」

「私はお前みたいにシャーロックじゃない。こう言つてはホームズファンに怒られるが――。モリアーティ教授は所詮、ホームズに倒されるために生み出されたキャラクターだ」

「そんなキャラクターにはなりたくない？」

「そういうこと」

ズズツと紅茶を啜る。

倒されるキャラクターになりたくない以外にも理由はある。モリアーティ教授と呼ばれたくない最大の理由。それは――。

コナンが平成のホームズと呼ばれているからだよ!!

私がモリアーティ教授?! フラグが立つだろうが!!

ただでさえレギュラーメンバー入りしそうなぐらいの遭遇率を誇っているんだ。モリアーティ教授呼びわりされた暁には死ぬ。復讐を遂げる前か後に死ぬ!! モリアーティ教授は最終的には死ぬかな!! やめろ!!

ハーデスはそれを聞いて再び笑う。薄気味悪い笑みだ。

「なら貴方がモリアーティ教授を越えればいい。ホームズと共にライヘンバッツハの滝へ落ちるのではなく、ホームズだけを落とせばいいんだ」

「ホームズはそれでも死なないだろうさ。物語でも最終的には生き

残っていただろ」

「なら、確実に息の根を止めればいいのでは？」

「できるかー」

ハーデスの言葉に吐き捨てるようにいう。それでも彼はニタニタと笑っていた。楽しくて仕方がないといったように。

だから嫌いなんだよ、こいつ。グツと眉を潜めた。

ハーデスの言う『ホームズ』は恐らく警察やその他の敵のことだろう。コナンのこととは間違っても思っていないはずだ。

だが、コナンのことを言われている気がしてイラついた。

今はコナンアレルギーなんだよ！あいつのせいでどれだけ苦労したと思っただ！

その話を一旦終わらせる。次の計画について話し始めた。もちろん周りに分からないようにしながら。

今回の計画は『ウインブルドン選手権が行われる会場の爆破』だ。爆破を予告する暗号文の製作や仕込みの完了の報告をハーデスから聞く。

ウキウキと話す彼を見て、再び内心でため息を吐いた。

(無差別殺人なんてしたくはないが……。これも復讐のため)

今回のターゲットは相当の地位の人間だ。何か大きな混乱でもない限り、近づくことすら出来ない。

それ故に無差別爆破事件を起こす。混乱に乗じて復讐相手を殺す為と、同時に、『自分を誇示したいから犯罪を犯している』と警察に錯覚させるために。

その計画を実行するべく、ハーデスを連れてきた。こいつの犯行目的は自己主張が大半を占めるからなあ。本人は復讐らしいけど。丁度いい人材だ。

(ハーデスの存在を明るみにする為に別の無差別爆破事件も起こしたんだ。絶対に成功させる)

そう心に決める。ギユと拳を握りしめた。

どれだけ犠牲を出そうとも止まらない。止まれない。どれだけ罪を犯そうともやり遂げる。

エゴだ。これは私のエゴだと分かっていた。自分勝手な理由で無関係な人を殺す。一番やってはいけない領域である。最後の最後までやるかどうか悩みに悩んだ。

だが、私は実行することに決めた。例え地獄に落ちようとも、誰かから怨まれようとも構わない。復讐を遂げてみせる。

少しの罪悪感が胸に込み上げてきた。それを根性で押さえ込み、入念にハーデスと再確認を行う。数十分話した後、彼と別れた。

——ウインブルドンは土曜日。その日が決戦の日だ。

ようやく復讐を再開できる。その事実には私は喜んだ。復讐を考慮だけで胸が踊った。ドロリとした真つ暗なものが心の中で疼く。それと同時に歓喜で体が満たされる。

ふう、と熱を体から出すように息を吐く。そつと紅茶を飲んで——

「早く行こうよ蘭姉ちゃん！」

「コナン君待つて！」

「ホームズ博物館は焦らなくても逃げんぞ」

「これだからガキは」

——全力で嘔き出した。

ブシャアッ！ とティーカップの中に紅茶が戻る。なんとかテーブルには溢れなかった。だが、顔は紅茶まみれである。汚ねえ。

(そうじゃない！ 聞き覚えのある声が聞こえたぞ：?!)

ゴシゴシと顔をハンカチで拭く。私の手は震えていた。

いや、そんなまさか。コナン御一行様がイギリスまで来れるわけがないじゃないか。H A H A H A H A！ ちよつと神経質になりすぎじゃないか。

確かに夢にまでコナンは出てきている。だが、まさか現実世界まで居るわけないだろう！ ここはイギリスだぞ？ パスポートないだらアイツ！

そう信じる。私は声のした方向へ顔を向けた。

ほら、やつぱりいない。ロンドンの美しい街並みしかない。私の気のせいだ「蘭姉ちゃん達早く早く！」……うん。うん。うん。

速攻で顔の位置を元に戻す。全力で後悔した。

(神は私を見捨てた!!)

なんでコナンいるの?! おかしくない?! パスポートはどうした?! 偽装したのか?!

混乱に混乱を重ねる。動揺で手が震えた。

まさかコナンがいるとは思わなかったのだ。イギリスまで来て遭遇するとはまず考えないだろう!

(イギリスに来る話なんてあったか? …あったな!)

薬で一時的に新一に戻る回があった。金持ちのおばさんの猫を見つけてイギリスに行けるようになったんだけ? イギリスに行くためコナンは新一になる薬を飲んだ。そのまま新一のパスポートを使い、渡英。

なんやかんやあって事件発生。ロンドンの時計塔の前で元の体に戻った新一が蘭に告白をする話じゃなかったか…?!

確か——『ホームズ黙示録』という題名だったはずだ。

ロンドンのお話なんて一回くらいしかなかったと思う。

その回がある時に態々被るのか! 私がイギリスにいない時期に来いよ! なんて確率だ! ふぎけるな! 呪われているんじゃないか私!

それと、色々覚えていて内容が曖昧だ。マズイぞ!

そんなことを思いながら、必死に頭を回転させる。今回の私の復讐の邪魔をされないか。その一点のみが重要だ。

思い出せ。コナンがいるだけで復讐の成功率が下がるのだから!

思い出せ。何があったのかを!

(この話の犯人はハーデス。ハーデスだ)

あの話の犯行現場は『ウィンブルドン選手権会場』。今回の私の復讐を行う犯行現場も同じです。どうもありがとうございました!

カーーーッ!! また邪魔をされるのか! ふぎけるなよ、あの死神! どうして私が行く先々に出没するんだ! まさかイギリス

で被るとは思わなかったぞ！ 怖すぎるわ！

コナンとの遭遇率のあまりの高さに本気で震えた。このままではやられる。本当にあの死神に狩られる。

ガチガチと歯が音を立てた。動揺を隠すようにケーキを食べ始める。

この事件もどうせコナン様が解決してしまうだろう。そんな中、私が糸を引いていると知られてしまったらどうする？ 私終了のお知らせが来てしまう。

どうする？ どうする？ この機会を逃せば、次にあいつを殺せるのはいつになる？ いつまでもコナンに怯えていいのか？

今、私という異分子がいる。勝てるのではないか。前回もなんとか逃げ切った。ならば――

（――なんて思うかばあああか!!）

サツサと逃げるぞ私は！ あの死神の怖さは誰よりもよく知っている。身を以て体験したからな。誰があんな奴と戦うか。

それに今回は確か工藤夫婦も参戦するはず。まず勝ち目がない。工藤父はコナンすらも越える推理力の持ち主だぞ。即死だ！

私はバツバツと荷物をまとめた。慌ててホテルへ向かう。

もちろんハーデスに連絡は取るつもりはない。作戦中止の理由がコナンだと伝えたところで納得するはずがないからな。私の頭がおかしいと思われるのが関の山。ハーデスには悪いが生贄になってもらう。

数時間程度でハーデスとの連絡手段や痕跡を全て消す。私はキャリーケースを片手に持ち、ふんすと鼻息を鳴らした。

「目指すはエディンバラ！ さらばだ死神よ！」

（なんとか今回の事件も終わったが……。うーん、あの事件が終わってから違和感があるんだよなあ）

ウィンブルドン選手権の大会終了後。俺はうんうんと悩んでいた。

ドカツとホテルのベッドの上に座る。小学生の体にはあまりにも大きすぎるベッドだ。

今回、犯人であるハーデスを捕まえることが出来た。

彼の目的はアポロとミネルバ・グラスの母親の殺害だ。ハーデスがアポロとミネルバの母親を殺そうとした理由は賭けによる失敗。

ハーデスは昔、テニス選手のミネルバ・グラスの勝利に大金を賭けた。

だが、結果は惨敗。ハーデスはミネルバの敗北理由を母親の所為だと思い込んだ。

それによりミネルバとアポロの母を爆破することに決定。その序でに世間を巻き込もうとしたハーデス。

(なんとかそれは阻止できた。最初にハーデスから暗号文を貰ったアポロの依頼も完遂。全て終わったじゃねーか。何で腑に落ちねーんだ?)

苛立ちを隠すようにベッドに倒れこむ。小さな体は簡単にベッドに沈んだ。

——疑問があるとすれば一つ。

ハーデスは活動資金をどこから入手していたのだろうか。

整形やウインブルドン選手権のチケットの購入などに相当な金がかかっただろう。だが、奴にはそんな資金などないはず。

最近の事件もそんな違和感が多かった。

資金に限らず、他にも色々と。三人首吊り事件が起こってからずっとそれが続いていた。

ホームズ風に言うならば、「千本もの糸を張り出した蜘蛛の巣の真ん中に動かないで坐っている」——そんな人物がいるような気がするのだ。

(考えすぎか？ イギリスで事件もあつたし、蘭とのハプニングも起きたし、疲れてんのかなあ)

そう思っていた時だった。バタバタという足音が扉の向こうから聞こえてきたのだ。

「何だ？」と思ってベッドから起き上がる。博士が扉を物凄い勢いで

開けて、入ってきた。右手に新聞紙を握りしめながら。

「新一、大変じゃ！ 犯人のハーデスが死んだ！」

「な?! どういうことだよ！」

「自身に小型爆弾を仕込んでいたらしい。それを爆破させて死んだみたいじゃ」

「なんだって?!」

流星に爆弾をハーデスが自分の中にも所持しているとは思わなかった。

だが、何故やつは捕まった瞬間に爆破しなかった？ 会場諸共消すことだって可能だったはず。

博士から奪い取るように新聞紙を掴む。ハーデスの記事に視線を向けた。デカデカと書かれた『犯人死亡!』という文字に顔をしかめる。

ハーデスはどうかやらパトカーに乗った瞬間に爆破したらしい。ハーデスが身体検査を拒んだ結果がこれだ。

恐らくは自身に仕込んだ爆弾がばれると思ったのだろう。それならばこの場で爆破してしまえと思ったのか…?

(いや、理由としては弱いな)

そのまま新聞を眺める。警官3名のうち2名が死亡。残り1名が軽傷と書かれていた。

その軽傷者の警官はこう述べている。ハーデスは捕まった後、絶望的な顔をしていたと。

だが、それは捕まったことによる絶望ではなかった。何かに見捨てられた所為でハーデスは動揺していたというのだ。

ハーデスは死に際にこう言ったらしい。

「何故だ。モリアーティ教授よ。何故、私を見捨てた。」

ああ、私は貴方の駒に過ぎなかったのか。やはり貴方はモリアーティ教授に似ている。私の目に狂いはなかった」

ハーデスは笑みを浮かべながら自爆。

スコットランドヤードはその発言を聞き、他に協力者がいるとみて調査を進めている。そう新聞には締めくくられていた。

俺は息をするのも忘れてその文章を眺める。博士が「新一？ 大丈夫か？」と心配してくれている声が聞こえた。

だが、それに応えることが出来なかった。らしくもなく手がガタガタと震える。手以外も震え始めた。体の震えが抑えきれない。

（やはりいたんだ！ 協力者が！ 俺の勘は間違っつてはいなかった！）

ギリツと歯を噛み締める。犯人をむぎむぎと殺してしまった事実  
に眉を顰めた。

そして、『モリアーティ教授』という一文を舐めるように眺めた。

（モリアーティ教授、か。ホームズのライバル…）

——俺は何故かこの時、ワクワクしていた。

この俺を出し抜いた程の実力者。その事実  
に胸が踊って仕方がなかった。悔しいという気持ちよりも強い感情。本来ならば探偵である俺が抱いてはいけない感情だ。

だが、この瞬間ばかりは俺はそのことすら忘れていた。

手が震え続ける。震えは驚愕からでも恐怖からでもなかった。歓喜から俺は震えていたのだ。

——確かにこの事件には違和感がある。入念に張り巡らされていた蜘蛛の糸。それに気がつくまで時間がかかった。

（もしかしたら今まで違和感を覚えていた事件にも関連があるのかもしれないな）

今回の事件と今までの事件は少し似ていた。このなんとも言えない綿密に考えられた計画。それを考えられる人間が何人もいるとは思えない。

蜘蛛の糸をようやく実態として掴めた気分だった。

「捕まえてやるぜ。モリアーティ教授さんよオ…！」

『21世紀のモリアーティ教授、出現か』という新聞の文字が目に入る。俺はそれを見て、口角を上げた。

必ず俺はモリアーティ教授を捕まえてやる。幾重にも張り巡らされた蜘蛛の糸の先にいる犯人。それを想像して笑みを深めた。

平成において、ホームズとモリアーティの戦いが再び始まる。

## 其の四：「死神は勘付く（上篇）」

「ハーデスが死んだ…？」

とあるホテルの一室で、私は呆然としながら呟いた。現在、私はルームサービスで頼んだ朝食を食べている途中だ。

右手に持っていたサンドイッチがぼとりと皿の上に落ちる。ぐしやりと左手の新聞を掴む。原因は記事の内容だ。

——ハーデスが自爆したらしい。

警官に連行され、パトカーに乗った瞬間、ハーデスは自爆。理由は身体検査を強要されたからだとか。そこまでなら、ハーデスは犯行失敗にシヨックを受けて、警察と共に自殺したと考えられるだろう。

だが、ハーデスはこう言った。「何故だ。モリアーティ教授よ。何故、私を見捨てた。ああ、私は貴方の駒に過ぎなかったのか。やはり貴方はモリアーティ教授に似ている。私の目に狂いはなかった」と。完全に私に対して言っていたのだ。思わず顔が引きつる。

ハーデス、お前…！まるでバツクに真犯人がいるような言い方をしやがって。別に私は真犯人じゃない。ハーデスの協力者兼共犯者である。利害が一致しただけ！

こんな記事をコナンに見られでもしてみろ。確かに「真犯人を見つけややる！」みたいな展開になるから。私は真犯人じゃないのに！くっそ、余計なことをしやがって。モリアーティ教授とか本当にやめろ！

しかも、あの馬鹿野郎は警官達が多数いる場所で死んだ。ウィンブルドン選手権の会場ではなく。

恐らくは私への当てつけだろう。私はウィンブルドン選手権の会場が爆発することを望んでいた。混乱に乗じて、復讐相手を殺害したかったからだ。

ハーデスは私に裏切られたことが相当シヨックだったに違いない。だからこそ、彼は自爆場所をウィンブルドンにしなかった。ミネルバ選手への復讐よりも、私を優先したのだ。

結果、ハーデスは選択した。

自らの言葉を確実に伝えてくれる者達が多い場所を。

それと同時に、ハーデスは私の存在を明るみにしたかったのではないかと思っている。ハーデスは知っていた。私が表に出て自ら動くことを好んでいないことを。だから、この件で、ハーデスは私の存在を世間へ知らしめたのだ。腹いせに。

(そこまで私を恨んでいたのか、ハーデス)

思わず唇を強く噛む。じつとハーデスの記事を見つめた。

ハーデスが私を恨むのも無理はない。私はそれ相応のことをしてしまったのだから。罪悪感が胸に込み上げてくる。だが、それを根性で抑え込んだ。この程度で心を揺さぶられてはいは——ん？

ハーデスの記事を再び見つめる。ハーデスが捕まった直後の写真だ。簡単に撮られたせいかわ、写真は若干ブレている。その写真をよく見つめて、私は息を呑んだ。

「アヤメの花…？」

ハーデスの胸ポケットにアヤメの花があつた。それを大事そうにハーデスは触れている。

私と同じ名前の花。西洋ではアヤメはアイリスと呼ばれる。西洋でのアイリスの花言葉は『メッセージ』。この意味はよく分かる。彼は態々死ぬことによつてメッセージを伝えたのだから。それ以外のアイリスの花言葉は——。

「信頼、希望」

まさか、と私は震えた。

ハーデスは私を最後の最後まで恨んでなごいなかったのではないだろうか。確かに記事には「絶望した表情」と書かれている。それがもしも、「これ以上私の計画に加担できないことに絶望した」だったとしたら？

彼は生前、常々私にこう言っていた。「あなたの存在を世間へ知らしめたい」と。もしも刑務所に入ればその夢は叶わなくなる。だからこそ、警察を巻き込み、私のことを世間へ知らしめたのか…？

だが、今となつてはもう聞くことは出来ない。ハーデスは死んだのだから。そう、ハーデスは死んだのだ。死、死、死んだ——。

「私を恨んでいたか、信じていたか、この際どうでもいい。それよりも、何でそんなことで死んだんだよ。馬鹿野郎……」

ポロリと目から涙が零れ落ちる。声は震えていた。

ハーデスは死ぬ必要なんてなかったはずだ。イギリスには死刑制度はない。捕まったとしても死ぬことはなかっただろう。まあ、終身刑にはなっただろうが。あれだけ人を殺したのだ。仕方がない。

だが、それでも。死ぬことはなかった。

生きてこそその命だろう。それが極悪非道人だろうと。私は生きて欲しかった。

(ああ、矛盾しているな……)

私は自嘲した。この考え方は矛盾していると自覚していたからだ。

彼は犯罪者である。自分勝手な理由で人を殺す。そんな最低野郎だ。絶対に裁かれなければいけない人間である。

本来なら、私は喜ぶべきだったんだ。世の為にこんな人間、死んでくれてよかった！ と。そう考えて、笑うべきだった。

だって、ハーデスは人殺しなのだから。極悪非道人に対して心を痛める必要なんてない——はずだった。

私にとって彼は協力者で、共犯者であったのだ。例え、どんなに嫌いな奴でも。

罪悪感が再び胸にこみ上げる。吐きそうになった。矛盾を抱える私自身に。そして、ハーデスの死に。

私は一生、ハーデスの命を背負うことになるだろう。身勝手な理由で彼を裏切り、死なせたのだ。この罪はどれだけ時間を掛けても消えないに違いない。抱えきれない罪の重さに押しつぶされそうになった。ガタガタと手が震える。己の弱さに笑いそうになった。

——だが、止まるな。私は誰だ？ 復讐者だ。

泥水をすすってでもやり遂げると決めた。周りから蔑まれようとも進むと決意した。例え、この手足がもがれようとも、私は這ってでも進む。それを決めたのは紛れもなく、『私』だ。

「ハーデスのようなやつに構っている暇なんてない。私の復讐は終わっていないのだから」

ハンカチで涙を拭う。壁に掛けてある鏡を見つめる。少々目を赤くした成人女性が此方を睨んでいた。フツと目元を柔らかくすると、鏡の中の女性も笑う。

その時、コンコンと扉をノックする音が聞こえた。『協力者』が来たみたいだ。

今回の協力者も人格破綻者だからな…。話すのが疲れるから嫌だ。でもなあ、『コナン対策』として必要なんだよなあ。コナン対策なんて出来ればしたくない。死亡フラグでしかないし。だけど、ほんつつとあの死神が邪魔すぎてさア…。

マジで何なのあの探偵野郎。憧れの主人公に酷いことは出来るだけ言いたくないよ？ でもな、コナンは事件がある所にゴキブリみてーに湧いてくるから。恐怖だから。昔はあんなにファンだったのに。

私は気分を切り替える。声色を低めにした。協力者に入室するよう促す。協力者が部屋に入って来た時、私はニタリと笑った。

「———やあ、『モリアーティ教授』。待っていたよ」

「お久しぶりです、幾世あやめさん」

今回は大仕事になる。このホテルで行われるオープニングパーティーでの仕事を失敗させるわけにはいかない。『モリアーティ教授』の晴れ舞台になるはずだから。そんな大事な場面で、私は止まるわけにはいかないのだ。

ハーデスの幻影を私は潰した。もう二度と迷わないために。ジリツと目の奥で復讐の炎が燃え上がった。

・  
・  
・

「すっげー！ でっけーホテル！」

「おい、元太、あんまり走り回り回んなよ」

「コナンも来いよ！」

「コナンくん！」

「つたく、お前ら聞いてんのかよ…」

ホテルの廊下で走り回る元太、歩美、光彦に呆れた目を向ける。そんな俺を見た灰原は小さく笑った。お前も注意しろよ、おっちゃんに叱られるだろ…とムツとした顔を灰原に向ける。その時、やはりと言うべきか、小五郎のおっちゃんが三人を叱った。遅かったかと手を頭に当てる。

今回、俺達は園子にホテルのオープニングパーティに招待された。知り合いの社長のホテルのパーティらしい。園子は一人でパーティに出席するのが嫌で俺達を呼んだみたいだ。蘭、おっちゃん、博士、歩美、元太、光彦、灰原、俺の計8名を招待してくれた。

(流石は鈴木財閥のご令嬢が招待されるだけはあるな。すっげー豪華だ)

そう考えていると会場に到着する。園子と合流した後、立食形式の食事を楽しんだ。

その時、前方に見覚えのあるシルエットが見えた。俺は「あつ」と声を上げる。そして、その人に話しかけた。

「幾世さん！ どうして幾世さんもここに？」

「———ブハアツツツ!! ゲホツゲホツゴホアツゴホアツひい、ゲホツ、ひい、ボハツ、はっ、アツ、ゲホツゲホツ、ご、コナンくん…??」

「だ、大丈夫…? 凄い噓せてるよ…?!」

「ちよ、ちよつと気管に入ったただだから大丈夫よ、はははははははは。えっ、何でここにいるのかな…?!」

「園子姉ちゃんに招待されたんだ！ 幾世さんは？」

「園子ちゃんか…園子ちゃんね…あーうん、うん。私？ 私は仕事だよ…」

「そうなんだ！」

疲れた表情で笑う幾世さん。そんな幾世さんに申し訳ない気持ちになった。

幾世さんは何かと病弱な人だ。直ぐに噓せたり、咳き込んだりして

しまう。それに加えて、気の弱い人である。今みたいに後ろから話しかけただけでビクリしてしまうのだ。何度か事件現場に遭遇しているのだが、その度に顔を青くしているくらいである。驚きに対して耐性がないのだろう。

(今度は気をつけて声をかけるか)

俺は苦笑いを零す。

その時、幾世さんの隣から40代後半から50代前半の男がやってきた。仕立てのいいスーツをキツチリ着こなしている。男性は優しげな表情を浮かべた。そして口を開く。

「幾世くん、この坊やは？」

「知り合いなんです」

「僕、江戸川コナン！ おじさんは？」

「私かい？ 私は幾世くんの上司の有栖川と言う。よろしくね、コナンくん」

有栖川さんは和やかな雰囲気を出しながら笑う。穏やかな幾世さんに似合う上司だなと感じた。

その二人と談笑をする。幾世さんは相変わらず体調が悪そうな顔をしていた。病弱なのに仕事をよく頑張っているよな、この人。

だが、いつも通りなのであまり気にしないことしておく。幾世さんは心配されるのが嫌みたいだからな。

そんな彼等と話していた時だった。

——悲鳴が聞こえたのは。

「きゃああああああ」と女性特有の甲高い悲鳴だ。俺は思わず、バツと声の方向へ目を向ける。どうやら舞台裏から悲鳴が上がったようだった。俺はすぐさま走り出す。舞台裏に無断で突入した。後ろからおっちゃんも入ってくる。

舞台裏には腰を抜かした年若い女性スタッフがいた。女性の隣にも40代くらいの男性スタッフが驚いた表情で突っ立っている。おっちゃんは慌てて二人に駆け寄った。

「どうした?!」

「しゃっ、社長が…！ 首を吊って…！ し、し、し、死んで…！」

「何?!」

女性は身体を震わせながら指を指した。彼女の指の先にいたのは『首吊り死体』。スーツを着た60代前半ほどの男性が首を吊って死んでいたのだ。

俺はいつも以上に目を鋭くさせる。ギリツと歯を噛み締めた。

(また首に関係する死か…!)

最近、首に関係する死が嫌に多い。その中で最も多いのが首吊りによる死だ。自殺の時もあるが、殆どが自殺に見せかけた他殺である。偶然で片付けてしまうには少々数が多すぎた。

しかし、どの事件も既に犯人は捕まっている。同一犯の仕業ではないようにみえた。

これは偶然なのか？ だが、偶然に済ませてしまうにしては——  
——些か不自然だった。

(この一連の首に関する事件の裏にきっと誰かいるに違いない…!)  
でも、それを言っても誰も相手してくれないだろう。俺が新入だったとしても、「そんなのあり得ない。犯人は既に捕まっているんだぞ?」と言われてしまうに違いない。

だが、引つかかるのだ。パズルのピースをいくつか見逃している気がしてならなかった。これは俺の探偵としての勘。難事件を解決してきた俺だからこそ抱く、言い様のない『違和感』だった。

しかし、トリックも何も見抜けていない状況で周りに言うことなど出来ないだろう。

俺がウンウン唸っていると、横から灰原が話しかけてくる。その顔には珍しく笑みが携えられていた。俺は首を傾げる。何で笑っているんだ？ そんな俺の疑問を他所に、灰原はそのまま口を開く。

「随分と楽しそうね。まるであの時みたい」

「楽しそう？ 俺が？ 後、あの時っていつだ？」

「自覚してないの？ ほら、貴方が大人の体に戻ってイギリスに行き、帰ってきた時よ。今みたいにワクワクしてたじゃない。『俺を出し抜いた奴がいるんだ!』って」

「あ——」

その時、脳裏に過るのはイギリスの新聞。『モリアーティ教授』と書かれたあの新聞だった。

イギリスでウィンブルドン選手権会場を爆破しようとしたハーデスによる事件。あの時、ハーデスは自分の裏に誰がいるということに仄めかした。

俺を出し抜いた真犯人。

モリアーティ教授と称される『誰か』。

沢山の足りないパズルのピースのうち、一つだけが俺の前に現れた気がした。

——イギリスのあの事件は『首』に関する事件ではない。だが、この一連の『首』の事件に非常に酷似していた。

（俺はどうして似ていると思っただんだ？ うーん……そうだ。『癖』だ。ハーデスの事件も、首の事件にも、特有の『癖』があったんだ！）俺が違和感を抱いた一つ。それはどんな人間でも持つ、『癖』。

計画の立て方とトリックの練り方というのは人によって様々である。まるで将棋の様に攻める計画の立て方もあれば、己が信念に沿って計画を練る者もいる。

つまり、事件というのはその人物の『性格』がどうしても現れてしまうのだ。殺しという行為は、その人物の本性を最もあらわにする。今までに一連の首事件で様々な人物が捕まった。ある時は社長秘書や役員。またある時は風俗嬢や一般の主婦、サラリーマン、外国人。生活圏があまりに違いすぎる者達。更には性別や人種まで違っていた。

（だが、彼らのトリックは共通して、『綿密に練られた完璧な事件』だった——！）

その答えに辿り着いた瞬間、ゾクゾクツと震えた。顔に添えていた手に汗が滲む。口角は上がっていた。

そう、おかしいのだ。何もかもが共通しない犯人達。全てが違う彼らが、俺から見て『完璧な計画』など練ることができだろうか？

答えは、否。できるわけがない。人の考え方は人によって違う。ならば、『完璧な計画』も人によって違う筈なのだ。どの程度が『完璧』な

のかは人の尺度で変わるのだから。

興奮のあまりに声が上がらず。俺は目を輝かせて灰原を見た。

「やっぱり、俺は間違っていないんだ！ この言い様のない違和感。必ずこの一連の首事件の裏には真犯人がいる！」

「江戸川くん…？」

「ありがとな、灰原！ この事件はきっちり調べるぜ！ そうと決まれば行ってくる！」

俺は灰原から目線をそらす。そして俺は走り出した。

だが、この時俺は気がついていなかった。後ろから灰原が「江戸川くん…!!」と叫んでいたなんて知らなかったのだ。その表情が先ほどと打って変わって、悲壮な顔つきになっていたことなど。俺は知らなかった。

## 其の五：「死神は勘付く（下篇）」

——数時間後。

俺はこの事件を解決することが出来た。犯人は第一発見者の女性だ。動機は復讐。

昔、被害者である社長の会社は経営難に陥った。結果、彼女の両親を解雇する羽目になったらしい。それにより犯人の家では家庭崩壊が起きてしまった。ろくに犯人は学校に行くこともできず、ひもじい思いをしたらしい。

（この事件のトリックの仕掛け方は完璧。まず他の人間だとトリックすら分からないだろう。こう言っちゃあ悪いが、あの女性がこのトリックを考えることができるとは思えないな…）

だからこそ、犯人に先ほど聞いてみたのだ。どうやってこの計画を練ったのかと。

だが、ずっと彼女は「自分で計画を練った」と言い張っていた。嘘で言っているのではなく、本気でそう考えているようだったのだ。

でも、俺は納得がいかなかった。何度も何度も確認したが、彼女は「自分でした。確かに色々な人からそれとなく仕入れたけど。最終的に全部考えたのは私よ！」の一点張り。アレは演技でしてできるものではなかった。

何故だ？ そう考えながら廊下を歩いていると、誰かにぶつかつた。その誰かに押し負けて俺は尻餅をつく。「いてて」と言いながら見上げる。そこには幾世さんの上司の有栖川さんがいた。

有栖川さんは俺を見て、目をまん丸くする。そして、凄く心配してくれた。「怪我はないか？」と慌てて聞いてくれる有栖川さんに笑顔を見せる。「大丈夫だよ！」と元気よく言った。

彼は安心したような表情を浮かべる。流石は幾世さんの上司だ。気質が似ているのだろう。俺は思わず苦笑いを零した。

「すまないね、前を見ていなかった」

「僕もなんだ。気にしないで！ あれ？ 幾世さんは？」

「ああ、彼女は疲れたみたいだね。今はホテルの一室で休んでいるよ」

「幾世さんは殺人事件が苦手だもんね。仕方がないよ。あ！　もしかしてその手に持っている果物と花は幾世さんの為？」

「そうだよ。果物くらいなら気分が悪くても食えることができると思ってるね。花はそのついでかな」

果物と花——リンゴとアネモネの花を持ちながら有栖川さんは笑った。

少しの間、彼と会話を交わす。初めて会ったのにも関わらず、随分と話が弾んだ。

まあ、理由は有栖川さんがシャーロキアンだったことに他ならないんだが。まさかここまでホームズについて詳しい人物がいるとは思わなかった。

楽しく会話をした後、俺と有栖川さんは別れようとする。その時だった。

有栖川さんはスツと自然に俺の耳元へ言葉を紡いだのだ。

「あまり無理をしてはいけないよ」

「——ッ」

一瞬。ほんの短い時間。その刹那に発せられた有栖川さんの言葉に俺は目を見開いた。

「ど、どういう意味かな…？」

「その言葉の意味、そのままだよ。よく君は事件に巻き込まれるみたいだから」

困ったように、だけど、優しげに微笑む有栖川さん。その表情は幾世さんと若干ダブった。

俺が口を開く前に有栖川さんは歩き出してしまふ。彼を引き止めようとしたが——やめた。

(優しそうな有栖川さんのことだ。それ以上の意味はねーか)

そう思い、有栖川さんの背中を見送った。

だが、この時、俺は引き止めるべきだったのだ。手がかりはすぐそこにあったのに。

とあるホテルの一室で、私はソファアに座りながら天を仰いでいた。その後、横に座る人物に目を向ける。

「どうやら上手くいったようだ。初仕事、お疲れ様。有栖川さん、いや、『モリアーティ教授』」

「ええ、お陰様で。残念なことに女は捕まってしまいました」

『モリアーティ教授』と私に呼ばれた有栖川さんは和やかに微笑んだ。残念と言いながら、全然残念そうではない。

彼のために私は紅茶を入れ、それを勧める。『モリアーティ教授』は私に礼を言い、紅茶を飲んだ。

私がコナン対策として考えたことはただ一つ。

『モリアーティ教授』を作ってしまったことだった。

本物のモリアーティ教授がいたならば、コナンの目はそちらへ向く。私なんて眼中に入らなくなるだろう。その間に私はゆっくりと復讐を遂げればいい。

あの死神の所為で計画通りに進まなくなってしまったからな…！私の知らない間に復讐相手が勝手に死ぬことがさらにあつたくらいである。しかも、私が準備した道具や仕掛けがこれまた勝手に他の犯人に使われてしまうのだ。本当にやめろ！

まあ、まだそれならいい。『まだ』いいのだ。腹が立つけどな！

一番許せないのは、『復讐相手以外の人間が死んでしまった』ケースだ。その場合、復讐相手も容疑者に含まれていることが多々ある。お陰で迂闊に手を出せなくなるのだ。本当に邪魔だぞ、あの死神！

(まあ、あの名探偵の目を長期間、欺けるなんて思ってはなないけど。長くて精々数ヶ月。最悪、一日でバレる可能性もある。その間に確実に復讐相手を仕留めなくては…！)

このモリアーティ教授はコナン世界に登場する犯人の一人だ。態々、工藤新一が敵対する『モリアーティ教授』に相応しい人間を探してきた。

コナン世界は基本的にホームズに所縁のあるものが多い。主人公である工藤新一が『平成のホームズ』と呼ばれている所為もあるのだ

ろう。そこに私は目をつけた。

——工藤新一がホームズ。ならば、それに対抗するモリアーティ教授がモデルのキャラもいてもいいのでは？

前世の原作知識を必死に思い出した。それだけには飽き足らず、コナンや工藤新一が解決してきた事件まで調べたのだ。片っ端からあらゆる事件を調べまくった。そして、ようやく見つけた。

『森谷帝二（もりや ていじ）』という男を。

森谷帝二とは映画第一作目に登場する真犯人だ。第一作目に相応しく、森谷帝二のモデルは『モリアーティ教授』である。

その証拠に、森谷帝二の名前はモリアーティをもじったものだ。更に、彼は東都大学建築学科教授である。専攻分野は違うが、モリアーティと同じ『教授』だ。

これを見た瞬間、彼以上に『モリアーティ教授』に相応しい人間はいないと思ったね。森谷教授はモリアーティ教授が滝へ落ちた日と同じ日に逮捕されたぐらいだし。まさにモリアーティ教授。

彼ならやつてくれる…！ コナンに恨みもあるだろうし…！

思い立ったら即行動。早速、私は森谷教授を脱獄又は出所させようとした——のだが…。

（森谷教授、勝手に脱獄してたんだよね…）

ちよつ、森谷教授、何でお前シレッと脱獄してんの?!?! 流石にテンパった。

森谷教授は良いところの坊ちゃんだ。脱獄するようなハートを持つ猛者ではないだろう。親戚が金を積んで、森谷教授を出所させたのなら、まだ話は分かったのだが。なんか勝手に脱獄してたよね…訳がわからないよ…。

その後、慌てて別の協力者に脱獄した森谷教授を捕まえてもらった。その時、「どうやって脱獄した？」と森谷教授に聞いたのだが…。「知らない人に助けて貰った」と言われたのだ。余計訳が分からなかった。

誰だよ、森谷教授を助けたやつ。何か森谷教授にしてほしいことがあったのか？ それならば少々不味い。森谷教授には未長く『モリ

アーティ教授』を演じてもらわなければいけないのだから。他の奴には取られては敵わん。そう考えて、慌てて彼を引き入れた。

(森谷教授も快くモリアーティ教授になることを引き受けくれて良かった)

森谷教授は最初、かなり私を警戒していた。当たり前である。だが、会話をしている間に警戒も解けたのだろう。協力的になってくれた。

結果、森谷教授は私の協力者になってくれたのだ。その後、追っ手対策のために森谷教授は整形を行った。他にも『モリアーティ教授』になる為の演技や人を操る技術を習得してもらったよ。ホームズのモリアーティ教授は人を操るプロだ。森谷教授にはそうしてもらわねばならない。

少し前に森谷教授の訓練は終了した。その訓練の最終試験として、手始めに事件を裏で操ってもらうことになったのだ。このホテルに来たのもその為である。

今日、裏で操ってもらったのは『社長に恨みを抱く女性』——つまりは今回の犯人だ。森谷教授は彼女の元へ何度も沢山の『協力者』を向かわせた。

犯人の元へ大勢の我々の協力者を向かわせた理由。それは、『彼女の社長殺害計画に他者の意見を取り入れさせるため』である。

それとなく協力者達が犯人に対して、少しづつ少しづつ殺人に関する知識を与えたのだ。「こういうトリックって怖いよね」「知ってる？

こうしたら人にバレないらしいよ」と言うように殺し方を教えていった。

確実に社長を彼女に殺させるために。

本当なら、こんな手間をかけることは滅多にない。だが、今回は『森谷教授の為の最終試験』である。敢えて難しくなるようにしたのだが

(難しくしておいてよかった！ まさかコナンがいるとは思わなかったから…) 会った時は思わず飲み物を嘔き出したわ！)

ベストタイミングでやってくるあの死神に戦慄したものだ。「森谷

教授の最終試験に態々被るの?!」と本気でびびった。伊達に国民的名探偵をやっていない。事件に関して神がかり的なタイミングでやって来やがる。本当に怖すぎ。慌てて森谷教授に「コナンが来た！」と伝えたものだ。

余談だが、森谷教授にはコナンの全てを伝えている。コナンについてよく知っておかないと、ホームズのライバルなどなれないからね！

私にはつこりと森谷教授に笑ってみせる。そして、静かに口を開いた。

「モリアーティ教授、どうやら因縁の相手に会ってしまったみたいだね?」

「ええ、まあ。あれが私の邪魔をした工藤新一が縮んだ姿、ですか。本当は半信半疑だったのですが、今回の事件で確信しました。江戸川コナンは工藤新一だと」

「そうでしょう! そうでしょう!」

「後、一つだけ言いたいことがあるんですが…」

「何かな?」

「確かに彼は私の因縁の相手です。でも、モリアーティ教授と呼ぶのはやめていただけですか? 私には相応しくない」

「何故? 今から貴方がする仕事はまさにモリアーティ教授。ホームズを打ち倒す可能性を持つ、モリアーティ教授だ」

「いえ、私はモリアーティ教授の器ではない。私の役割は精々モラン大佐ですよ。モリアーティ教授は貴方だ、幾世さん」

「やめてくれないかな。私もその器でないよ」

何故、皆さんは口を揃えてモリアーティ教授と私を呼ぶの? 本当にやめて欲しい。私は顔をしかめた。それを見た森谷教授はクツクツと喉を鳴らす。随分と楽しそうだな。

それを尻目に入れながら、更にソファアールへ身を沈める。ホテルの天井を見た。

(復讐したい相手をまた一人、仕留めた)

一步一步、確実に私は歩いている。しつかり地面を踏みしめ、私は歩くことができている。その事実をゆっくりと噛み締めた。

例えその進む道が血の海だったとしても。怨念と怨恨の闇が広がる世界だったとしても――…

――私は進んでいる。茨の道を。傷つきながら進んでいる。最後には何も残らないかも知れない。だが、私はそれでも進み続けるだろう。

(だから、邪魔をするな。『ホームズ』！)

私は主人公の顔を思い浮かべ、睨みつけた。

幾世あやめの復讐は終わらない。

其の六：「会いたくない人物ほど遭遇してしまう」

「貴方が幾世あやめさんですね。コナン君や蘭さんから話は聞いています。僕は安室透。毛利先生の弟子です」

「へえ、毛利さんは弟子を取られたんですね。流石は毛利小五郎です」「いや、あつはつはっ！ 私は名探偵ですからな！」

毛利小五郎が高笑いをした。それを見たコナンと蘭が引きつった笑いを浮かべている。その横では安室がイケメンスマイルを貼り付けていた。私も周りと同じように笑ってはいる。だが、内心は違っていた。

（だから、何でこんなに遭遇するんだ！）

右手に握りしめるスプーンが震える。さつき食べたパスタを口から吐き出しそうになった。今、居る場所はレストラン。一人で優雅にパスタを食べていたら、コナン御一行様がいらっしやっただのだ。コナン、毛利蘭、毛利小五郎、安室透というラインナップで。

（安室は絶対に遭遇したくないランキング上位だから避けていたのに…!!）

前にも言ったと思うが、最近、コナンとの遭遇率が嫌に高い。レギュラー入りできるのではないか、と思うレベルである。オフの日だろうが何だろうが、事件に巻き込まれてしまうのだ。これは由々しき事態だ。確かに私は殺人犯で、死体製造機（不本意）ではある。しかし、自分が関わる殺人事件以外には関わりたくないというのが本音だ。死体なんて出来れば見たくない。気分が悪い。吐き気がする。だからこそ、私はこう決意した。

（安室透、赤井秀一、ジンにだけは会わないでおこう）

彼らは公安、FBI、黒の組織の主要人物だ。それ故に危ない。コナンだけでも手がつけられないのに、彼らにまで目をつけられたら……私は死ぬ。確実に死ぬ。これでも私は人をバンバン殺している復讐者だ。悪いように言えば、ただの人殺しである。それは公安やFBIにとつては容認できない事態だろう。

次に、黒の組織で懸念していることは、『私が殺した人間が組織所属

だった場合』だ。原作で、黒の組織は巨大犯罪シンジケートのような扱いをされている。そんな中、私が復讐している人間が、大概が黒い事に手を染めている人々である。私が知らず知らずの間に黒の組織のパトロン、もしくは構成員を殺している時があるかもしれない。今の段階では殺したかどうかなんて分からないのだが……。まあ、それはさて置き。そんな彼らを殺した人間が私だと知られたらば？

——目も当てられないことになる。

(そう考えていたのに、安室透と遭遇?! ふざけんなよ)

本気で吐きそうになっていた。持ち歩いているポリ袋(嘔吐用)に手が伸びそうになる。だが、必死にそれを抑えた。会った瞬間、吐き出す女とか意味が分からないよな。私ならビククリするし、そもそも人としての尊厳も失うし、絶対に嘔吐なんてできない。

というか、安室の『コナン君や蘭さんから貴方の話を聞いていました』って何のことですか。何を聞いたんですか。もう怖いよう。帰りたいよう。こんな世界で犯罪を犯した私の馬鹿……。でも、仕方がないんだよ……。くそッ悪人は全員死ぬ!

(幸運なのは『協力者』と別れた後だったことか。会合中にコナン達と遭遇していたら、大変だった)

不幸中の幸いと思っておこう。そうでなければ心が折れる。ちよつと既に心がガタガタだけど、頑張れ私。泣くな私。先程、毛利蘭に『折角会ったんだし、一緒にご飯食べましょう』と言われて、食事を共にしていることなんて気にするな私。彼女はただの好意で言っているだけなんだ。間違っても嫌がらせではないんだ……! ああ、折角、協力者の方からご飯を奢ってもらったのに、気分が下がる。そう考えながら、必死にコーヒーを啜った。なんとか気を紛らわせようと口を開く。

「今日は皆さん、何かご用事があるのですか?」

「依頼人の方と待ち合わせしているんですよ」

「事務所で会う予定だったんだがなあ。依頼人が急にこのレストランで会いたいと言ってきやがったんだ」

「名探偵はお忙しいんですねー」

どうしよう。『急にレストランで依頼人が会いたいと言いだした』がフラグにしか聞こえない。コナンでは『突然の変更』などは確実にフラグである。長年のコナン読者の勘、そして、今まで遭遇してきた事件の数々の経験がこう訴えていた。

——— 確実に事件が起きる、と！

もう嫌だこの世界。どうしてこんなに事件が起きるの。おかしいだろ。帰る。私は帰る。絶対に帰る。ランチを食べ終わったら直ぐに帰宅する。この後、ショッピングを楽しむつもりだったけど、全てキャンセルだ。

(そう考えていた時も私にもありました)

目の前にあるのは死体。トイレに座り、自分で拳銃で自殺したように見える男の死体があった。その彼の隣には女性がいる。女性はガムテープでグルグル巻きにされて、泣いていた。恐らく、彼女は人質なのだろう。

余談だが、ここは毛利小五郎の自宅兼事務所のトイレだ。現在、毛利小五郎、安室透、コナンが険しい顔をして、死体と女性を調べている。

(『また』無関係の事件に巻き込まれるのか…ッ!!)

私は口を手で塞ぐ。昔のトラウマがフラッシュバックした。ガタガタと身体が震える。胃からせり上がってくるものを感じ、慌ててポリ袋を用意した。オエエエという気持ちの悪い音とともに嘔吐してしまう。はーはーと息を吐き出した。

何故、私は毛利探偵事務所にいるのかと思っっている方もいらっしやるだろう。私もできれば来たくなかった。だから、『〇〇っていうDVD買いに行かないかやいけないから、そろそろお暇します』と適当に理由を付けて別れようとしたのだ。しかし、毛利蘭にこう言われてしまった。『私、そのDVDを持ってますよ！ 貸しましょうか？ 依頼人の方が今度は事務所で会いたいと言ってきたので、家までついてきてくださったら貸せますよ』と。やめて欲しかった。だが、断れない。今から用事がくと言っても、既に『DVDを買いに行ったら帰るだけ』と言ってしまった。私は内心顔を引きつらせながら、『是

非』と言うしかなかったんだ…。

(蘭ちゃんの好意が辛い！ いい子だから余計に断れねえ！)

ガチで泣きそうになった。悪意のない好意って怖い…。ここで下手に断れば、コナンに目をつけられそうだし。コナンが怖すぎる。自分が今住んでいる家のトイレでの殺人事件だよ？ 完全に事故物件になっているじゃねえか！ こんな家によく住み続けることができな?! 私だったら夜にトイレへ行けなくなるんだけど。くそツこの鋼メンタル探偵共が！（毛利親子も含む）

(しかも、この事件、原作であった事件じゃないか?)

人質にされたように見える女性——それが今回の犯人だったはずだ。偽名が檜塚圭(かしつかけい)、本名が浦川芹奈(うらかわせりな)だったと思う。確か、浦川芹奈の殺人理由は復讐。数日前、銀行強盗があった。彼女はその銀行強盗犯に恋人を殺害されてしまう。理由は恋人と銀行強盗犯が友人だったから。犯人の顔を知る恋人は殺されてしまったのだ。結果、彼女は恋人を殺した三人の銀行強盗犯への復讐を決意した。トイレで死んでいる男は強盗犯の一人だった筈。彼女は恋人の携帯を使い、強盗犯の場所をあぶり出したのだ。

彼女の名前や経歴を思い出せてよかった…。これも前世の友人のお陰か。彼女が安室透のファンだったので彼の登場回についてよく話していた。その為、犯人の名前や詳細を今世でも思い出せることができたのだろう。感謝しかない。

(復讐、ね)

普通の人ならばこう言うのだろう。『銀行強盗犯の顔や連絡先が分かっているなら、何故警察へ通報しなかったのか』と。直接殺しにくなど正気の沙汰ではない。道徳的に完全にアウト。更に、自分に危険が及ぶ可能性だってある。それらを踏まえると、周りは今回の犯人、浦川芹奈を『馬鹿な女』というのだろう。だが、そうではないのだ。

頭で分かっているても、感情だけは動かせない。

人を殺すなんて、一般人が簡単にするはずがない。あらゆるデメリットが自分についてくるからだ。しかも、浦川芹奈は『普通の女性』

だ。家族もいる。友人もいる。『普通の女性』だ。デメリットを理解しながら、彼女はそれでも決意した。耐えれなかったのだろう。許せなかったのだろう。恋人が『金』などのために殺されたことが。理不尽な死に方をしたことが。彼女は同じ地獄をどうしても犯人に味わせたかったに違いない。

——浦川芹那は加害者であり、同時に、最大の被害者なのだ。弱者が武器を取り、震えながらも立ち上がった。だからこそ、彼女の決意を笑うことなんて誰にもできない。できるはずがない。

(どちらにせよ、『殺した』時点で犯人と変わらないのかもしれないけれど)

でも、まあ、それは私が議論することではないだろう。善悪なんて時代ごとに簡単に変わってしまうのだから。

同じ復讐者である浦川芹奈に私はなんとも言えない気持ちになった。今、庇おうにもコナン達がいるせいで庇えない。だが、それでも、彼女の先を見届けたいと思った。思ってしまった。

(その結果がこれだよ)

今回の犯人、浦川芹奈に誘拐されました。しかも、現在は浦川芹奈の復讐相手に包丁を突きつけられています。

わっ、笑えねえ?! 何をしているんだ私は?! 冷や汗が流れ出る。今、私はコナンと共に浦川芹奈が運転する車に乗っていた。ついでに、浦川芹奈の復讐相手も乗っている。笑えない。本当に笑えない。お前、どうして浦川芹奈に誘拐される羽目になっているんだ? とか、どうして彼女の復讐相手がいるんだ! とか色々疑問があると思う。こうなったのには理由があるんだ。ちよつとビビってるので頼むから理由を聞いてくれ。

毛利探偵事務所での事件後、浦川芹奈を自宅へ送ることになった。一応、彼女はこの事件では人質ということになっていたからね。安全の為に誰か付き添いが必要だったのだ。本当は彼女が事務所のトイレで男を殺したんだけど。

安室透が送ると言っていたのだが、何故か毛利蘭や毛利小五郎、コナンまでもが付き添うことになっていた。しかし、安室透の車は四人

乗り。毛利親子二人、コナン、安室、浦川芹奈では五人になってしま  
う。一人が乗れないという事で、仕方がなく私は名乗り出た。その  
時、私は自分の車をこの辺りに停めていたからだ。

（本来ならこんなことぜつつつたにしないけど、犯人の浦川芹奈  
が心配だったからな…）

気が狂って浦川芹奈が自殺する可能性もある。今回の事件が終  
わったら、浦川芹奈は死ぬつもりであることをコナンが言ってい  
たし。原作では死んでいなかったが、万が一があるからなア。とい  
うわけで、彼らについて行つた。

ちなみに、浦川芹奈が『自分の家』として私達に案内したところは、  
本当は強盗犯の家。しかも、浦川芹奈が殺した強盗犯の一人が隠され  
ているというオプシヨン付き。あんまり行きたくないけど、安室  
透や毛利親子と一緒にいれば、危険はないと考えていた。

（でも、その家から逃げようとする浦川芹奈に私はバツチリ遭遇して  
しまったんだよな…。ついでに、彼女についていこうとするコナンに  
も）

浦川芹奈は恐れた。殺した強盗犯の一人が毛利小五郎達に見つか  
り、自分が捕まることを。捕まってしまうえば復讐が完遂できない。ま  
だあと一人、復讐相手は残っているのだから。それを知っていたコナ  
ンは敢えて浦川芹奈について行こうとしたのだ。

（その時に遭遇してしまった私、馬鹿だろ！）

本当に馬鹿。今、余計な口出しをすれば、浦川芹奈は最後の復讐相  
手の顔を見ることができなくなる。彼女は未だに復讐相手の顔を知  
らないのだ。原作通り、コナンは敢えて浦川芹奈についていくのだろ  
う。逃亡しようとする彼女を目撃してしまった今、私は迂闊に毛利親  
子たちの元へ帰ることはできない。下手をしたら殺される。仕方が  
なく、私は浦川芹奈とコナンへついて行つた。そして、浦川芹奈の車  
にコナンと共に乗り込んだ。

ちなみに、これにより、浦川芹奈はコナンや私を人質にすることを  
決めたようだった。人質を取ることににより、少しでも最後の犯人探し  
の時間を取るためなのだろう。睡眠薬入りのボトルを渡された時は

どうしようかと思ったな…。これ、原作を知らなかったら飲んでたよ…。

(それよりも怖いのはコナンだけど。車内で浦川芹奈の謎解きをするのはやめて欲しかった…)

小学生どころか、大人の私ですら難解な内容をポンポンと言っているのだ。途中、難しい単語が出てきて、「え？　なんて？」と聞き返しそうになった程である。コナンは本当に怖すぎ。今回は自分が犯人じゃないのに、ギロチンの前にいる気分だった。震える浦川芹奈。当たり前である。最後に彼女はコナンにこう問うた。

「貴方、何者なの？」

「江戸川コナン。探偵さ」

やめろオ！　私が隣にいるんだぞ?!　ドヤ顔すんな馬鹿ア！　正体をバラしそうな勢いで事件の内容を言うなア！　ちよつとコナン、私への配慮はどうしたの?!　普通、周りの大人に対しては隠してたじゃん！

前世ではワクワクしたシーンだが、今世では恐怖で震えてしまっていた。私は何も聞いていない。何も聞こえていない。頼むから巻き込むのやめて。私はただのか弱い復讐者だから！　途中、コナンがハッと気がついたようにこちらを見たときは心臓が止まるかと思つたわ…。私は苦し紛れに口を開いた。

「もしかしてコナン君はギフトテッドか何かなのかな…?」

「そつ、そうなんだ！　パパにこのことは黙っておけて言われてただけど…」

「子供だもんね。救える人がいたらどうしても動いちやうもんね。子供だもんね」

大事なことから、『子供だもんね』を二回言った。気がついてないよー。お前が新一ってことは気がついてナイヨー。ちなみにギフトテッドとは先天的に平均よりも顕著に高度な知的能力を持っている人のことである。

そうやって私は誤魔化した。日に日に演技だけが上手くなる自分が憎い。まあ、その後は原作通りだ。浦川芹奈の最後の復讐相手探し

である。そして、そいつは見つかった。これで終わりかと安心していったのだが――。

(すっかり忘れていたよね！ 話の終わり辺りに最後の強盗犯の一人がコナン達を捕まえてしまうことを！)

コナン達の『最後の強盗犯探し』のせいで、強盗犯の一人は勘付いてしまった。自分を誰かが探していることに。そして、「逮捕される」と焦った強盗犯の女はコナン達を尾行したのだ。最終的には、『最後の強盗犯探し』でウロウロしていたコナン達を捕まえることに成功。

現在、強盗犯の女は浦川芹奈に運転をさせている。自分が遠くに逃げる為に。浦川芹奈以外の人間のコナン、私と一緒に乗せているのは、恐らく、人質は多い方がいいからだろう。それか、考えなしか。それにより、現在、私の隣には強盗犯の女がいる。死にそう。

(あー…でも、安室透が自分の車をぶつけて、この車を停止させてくれるんだっけ？ 気楽に行けば――待てよ?)

安室透が車をぶつけた部分。原作では誰も乗っていない左の後部座席だ。つまり、今、私が乗っている場所である。

(やばくない？ えっ？ やばくない…？ 安室透が車をぶつけたら私が死ぬ、もしくは大怪我を負うんだけど)

笑えないくらいにヤバイ。どうする。どうする?! 今、安室透の車っぽいのが横を通った。そろそろ来るだろう。あのバイオレンスな停車の仕方が。安室透のことだから、私を殺す真似なんてしないだろうが…。万が一がある。なんとか犯人側に寄って行くか、もしくは犯人を無力化するしかない。でも、犯人側に寄るとかそもそも無理。気が立っているのに。かといって犯人の無力化も無理だ。どうする…?! どうする…?!

その時、私の足元に二丁の拳銃が転がっているのが見えた。先程、浦川芹奈から回収した拳銃がそこにはあったのだ。私が持っている方がいいと言って、先程までは後部座席に置いていた。しかし、衝撃で運良く下に落ちてくれたようだ。夜のせいで見えにくくなっている足元にあるそれを見て、目を閉じた。

――今、犯人は私へ拳銃を向けている。しかし、少し照準がず

れていた。現時点で彼女が注目しているのが進行方向だからだろう。彼女自身は私に向けているつもりでも、幸運なことに銃口を別方向へ向けてしまっていた。先程までは包丁だったんだけど…。直ぐに殺せる拳銃に変更されちゃったんだよね…。ちくしょう。

(やるしかないか)

私は決意を固めた。今まで培った全スキルを使うときだ。

## 其の七：「紫の銃剣」

江戸川コナンは焦っていた。

「動くな」

「は?! アンタ今、自分の状況が分かってんの?!」

「ええ。分かっていますよ。分かっている、貴方に拳銃を向けている」  
バックミラーを見ると、そこには幾世あやめが映っている。彼女は強盗犯の女へ拳銃を向けていた。怯えることなく、真つ直ぐと強盗犯を睨みつけていたのだ。その顔を見て、冷や汗が流れる。

(幾世さんは何をしているんだ:?!)

先程まで、強盗犯の女が幾世さんの蟀谷へ拳銃を突きつけていた。ピクリとも動かない幾世さんを見て、本当に心配になったものだ。しかし、今はどうだ? 何故か幾世さんは強盗犯へ拳銃を向けている。事務所のトイレで発見された死体を見た時から彼女の様子はどうにもおかしい。あの瞬間、彼女は顔を真つ青にさせて嘔吐してしまっていた。最近、彼女は事件に巻き込まれやすい。その度に倒れそうになっているのをよく見かける。だが、彼女が吐いた姿は初めて見た。それ程までにショッキングだったのだろう。

(幾世さんはか弱い普通の女性だ。しかし、冷静に物事を判断できる大人だった——はずなんだ)

何をトチ狂えば、幾世さんがこんなことをしでかすんだ?! 訳が分からなかった。彼女は優しい人だ。どんなに疲れていても人を気遣える人間、それが彼女である。だからこそ、俺達が浦川芹奈の家を訪ねたいと言えば、幾世さんは自分の車に乗せてくれた。その他にも、俺を心配して、浦川芹奈と俺が外へ出る時にも付いてきてくれた。そんな彼女だからこそ、わざわざ怪しいあの安室透に釘までさしたというのに。幾世さんを巻き込んでしまった。唇を噛みしめる。俺が後悔している、強盗犯の女が叫んだ。

「今すぐその拳銃、捨てないと撃つわよ!」

「どうぞ、自由こ」

「はあ?!」

「ちよ、幾世さん?!」

「代わりに、必ず貴方を仕留めますから」  
「なっ」

「私、海外で拳銃を撃ったことがあります。これでも腕が良いと言われたんですよ? 貴方が撃った瞬間、私が貴方を撃ちます。必ず」  
虚勢を張っている訳ではなかった。幾世あやめという女は本気で、『相打ちになっても犯人を撃ち殺す』気でいたのだ。バックミラー越しに見える彼女の目の鋭さに息を呑む。決意が籠った目だった。何故ここまでする? どうしてそんなことをする? だが、そんな疑問の答えは直ぐに分かってしまった。彼女の人間性、今の表情から導き出される答えは、

——俺を、俺達を助けるためだ。

それを自覚した刹那、胸から形容しがたい何かがせり上がって来るのを感じた。手が震える。唇を更に噛みしめる。息が荒くなる。脳裏に様々な人達の顔が過った。

(駄目だ。幾世さんを死なせては駄目だ)

彼女は他人のためなら平気で自分を犠牲にできる人間なのだろう。どれだけ恐ろしくても、気が弱くても、人のために奮闘する。彼女を『か弱い人間』と言ったことは訂正しよう。彼女は『勇気ある人間』だ。そう考えた刹那、幾世さんの顔が一瞬だけ歪んだ。『人を人として思っていないような冷たい顔』になった。瞳に光がない。人を何人も殺していそうな、『殺人鬼』の目をしていたのだ。俺が稀に見る、最低最悪の殺人者の目。その表情と瞳にゾクリとした。驚いて目をこする。そこには先程と同じ顔をしてる幾世さんがいた。

(…、…何だ、気のせいか)

幾世さんがまさかそんな顔をする訳がないのに。だが、何故だか手が震えていた。おかしい。おかしい。何故、俺は——と思考していた時だった。強盗犯が動揺してか、叫び出したのだ。ハッと顔を上げる。考えている暇なんてない! まずい! 幾世さんへ強盗犯が拳銃を発砲しかねない!

血の気が引くのを感じた。慌てて身を振り、後部座席へ目を向け

る。俺は腕時計型麻醉銃を構えた。そこには幾世さんしか見えていない強盗犯の女がいる。

(これならいける！)

パシユツ

麻醉銃の針が飛んだ。

針が刺さった瞬間、強盗犯の女はへろへろと倒れる。カシャンとそのまま拳銃が床に落ちた。運転座席にいる浦川芹奈さんは『どうなったの?!』と困惑した面持ちで叫んでいる。それを聞きながら、俺は胸を撫で下ろした。ホツと息を吐く。

(幾世さんを守れた。でも、あの幾世さんがどうしてあんなことを…?)

幾世さんへ視線を向ける。俺を視界に入れた幾世は小さく笑った。不敵に、素敵に、綺麗に笑っていたのだ。まるで、『江戸川コナンを信じて、役者を演じ切った』かのように笑みを浮かべていた。俺はそれを見て、目を見開く。

(幾世さんは俺に何か手があると信じてくれたんだ。この子供の姿なんかの俺を)

だからこそ、幾世さんは拳銃を構えた。強盗犯の女の意識を幾世さん自身へ向けるために。それにより、俺が動きやすくするために。――

全ては俺のためだったのだ。

幾世さんは眠る強盗犯に対して言葉を投げかける。

「言ったでしょう。必ず貴方を仕留めると」

・  
・  
・

今回の犯人である、浦川芹奈は困惑していた。

「浦川さん、紅茶をどうぞ」

「ありがとうございます。ええっと、貴方は…?」

「ああ、私としたことが失念しておりました。そうですねえ…私この

とは『教授』とでもお呼びください」

「はあ、」

『教授』、そう自分を称した40代後半ほどの男性がニコリと笑う。仕立てのいいスーツを着た彼からティーカップを受け取った。私は訳が分からなくて、引き攣った笑いを浮かべる。

（おかしい。強盗犯が捕まった後、私も一緒に警察へ連行されたのに…）

幾世あやめという女性の行動により強盗犯は無力化された。最終的になんとか私は車を止めることができたのだ。あの時はホッと息を吐いたものである。しかし、車を止めたことにより、私は捕まってしまうたけれど。強盗犯共々、『殺人犯』として。

（強盗犯が捕まったのは良いけど、私も捕まるなんて世話がないわね）でも、仕方がないのかも。人殺しなんて道徳に反した行いをしてしまったのだし。更には、復讐が終わった後、死のうとまでしていた。己に降りかかるであろう、中傷や苦しみが嫌だったから。ふふ、私って馬鹿な女ね。復讐をやり遂げることもできず、死ぬこともできないなんて。けれど、コナン君にこう言われてしまった。「貴方は死なせない」と。だから、罪に苦しみながらも、生きるしかないのかもね。そう考えていたのに、私を乗せたパトカーだけが急に方向転換したのだ。意味が分からなかった。そして、連れてこられたのがここ。教授と呼ばれる男性がいるこの部屋だったのだ。

教授という男性が紅茶を優雅に飲む。少し飲んだと思えば、彼はティーカップを机へ置いた。

「単刀直入に言います、浦川芹奈さん。貴方を我が組織へ誘いたい」

「組織…？」

「我が組織の理念は『復讐を遂げること』。貴方も復讐したい相手がいますでしょうか？」

「それ、は、」

どうしてこの男はそんなことを知っている…？ 私が捕まったのはつい先程。まだテレビにも私のことは流れていない筈だ。というか、『復讐を遂げる組織』とは一体なんのことだ？ どうしてそんな組

織が今さら私のところなんかに来ているの…？ もう捕まった私なんぞに勧誘？ 意味が分からない。

私が疑問と警戒で胸をいっばいに行っていることが分かったのだろう。教授は眉をハの字にした。申し訳なきような顔をする。

「できることなら、もう少し早く貴方と出会いたかったものです。しかし、我々として万能ではない。いつ、だれが、どこで、恨みを持つかなんて誰にも分かりません」

「それが分かっちゃえば最早、人間ではないと思いますけど…。そろそろ、私を誘った理由を教えてくださいませんか」

「ああ、これはこれは。ご婦人を待たせてしまって申し訳ないです。貴方を誘った理由はただ一つ。貴方の行動力と精神力の高さに感銘を受けたからです」

「胡散臭いですね。新手の宗教家ですか？」

「そう思ってしまうのも、仕方がないでしょうね」

「もう帰ってもいいですか？ 私は刑務所に行かなくてはいけないので」

「——貴方の今までの行動が無意味になってしまうのに？」

立ち上がろうとした体勢で止まる。不可解だというように私は眉をひそめた。

私の行動が無意味？ どういうことだ。これでも一応は三人の強盗犯のうち二人を殺せた。最後の一人も刑務所行きは確定。小心者で、ただの一般人の私がここまでやったのだ。結果は上々ではないだろうか。私の復讐はこれで終わり。これ以上はもう無理だ。

そんな私を見た教授は笑う。紳士らしい、上品な笑みだ。彼はテーブルの上に両肘をのせ、顔の近くで手を組む。そのまま静かに口を開いた。

「だって、そうでしょう？ 結局、全員を殺せていない。それなのに貴方は刑務所行き。しかも、中途半端に二人も殺したせいで、一生牢獄から出ることが出来ない可能性の方が高い。絶望しかありませんね」

「……仕方がないわ。それが私の罪」

『最後の強盗犯の女』はきつと貴方より早く刑務所を出ることになり

ますよ」

「……、……え？」

「あの女自身は人を殺していないのですから、当たり前でしょう。ま、性質たちの悪い銀行強盗犯なので、それなりに長い間は牢屋に繋がれるでしょうけどね」

「、それは、」

胸が苦しい。声に出して叫びたいのに、声がでなかった。何故だか鼻の奥がツンとし始める。思ってはいけないこと。考えてはいけないことなのに、心がひたすら叫んでいた。

——悪いのはあちらなのに、どうして私がこんな目に遭わないといけないんだ！

確かに、二人も人を殺した私は『悪』だ。まごうことなき、『悪』である。周りからは、強盗犯と私はなんら違いはないと言われるだろう。だけど、最初に銃口を向けたのは間違いなく、『彼ら』だ。恨んで何が悪い。私も銃口を奴らに向けて、一体何が悪い。しかし、この世界では被害者は加害者に銃口を向けることができない。これではやったもの勝ちではないか。

そこまで考えて、私は唇を噛みしめる。私のやったことが無意味であって欲しくなかった。自分の手を嫌々ながら血で染めたのに、この仕打ちは——何だ？

「それでも、一定期間は警察に繋がれます。少しは悔い改めるでしょう。それに、あれほど酷いことをやったんです。神から天罰が下りますよ」

「本当に？」

「え？」

「本当にそう思っているんですか？ 冗談でしょう？ なら、何故、貴方は武器を手を取った。何故、殺した。分かっているでしょう、その理由が」

「っ」

「警察に突き出したところで、犯人が悔い改めるはずがない！ そもそも、悔い改めるような人間が銀行強盗なんていう犯罪を犯すはずが

ない！　もしも、少し後悔の念を抱いたところで一体何になる？　それで貴方の恋人は戻ってくるのか？

—— 答えは否！　ありえない！——

「確かにその通りかもしれませんが。でも、天罰が……」

「天罰なんて下りませんよ。確かに天罰が下ったように見える不幸もあるでしょう。しかし、自分が加害者であることを忘れ、幸せに過ごして一生を終えるやつもいるのです」

それは真理だった。否定しようにも、否定できなかった。この世の中は強者に良いように出来ている。きつと、あの強盗犯の女は私より早く刑務所を出るのだろう。そして、今までの罪なんて全て忘れて、生きるのだろう。もしかしたら、結婚して、子供までできるかもしれない。私が恋人とできなかったことをあの女がやる。それを考えた瞬間、ドロリとしたものが胸に込み上げた。

最初から復讐なんてせず、警察に通報しておけばよかったのかもしれない。けれど、人を一人殺した程度で、死刑には中々ならないのだ。しかも、強盗犯共の刑は死刑や終身刑よりも、有期懲役で終わる可能性の方が高かった。人を殺しているというのに。私の恋人の友情を踏みにじり、ゴミ同然に捨てたというのに！　一体、彼が何をしようんだ！

だから、私は決意した。恋人と繋いだ手に武器を持った。警察なんぞに任せてられない。目には目を歯には歯を。死には死を与えてやらねば。決して、決して、許してなどやるものか。のうのうと生を享受なんてさせてたまるか。ああなんて憎らしい。ああどうして、どうして——

—— どうして、奴らはまだ生きているんだ。私の恋人を殺したのに。

それは殺意。明確な殺意が形を持って私の前に現れた。もう捨てたと思っていたはずの殺意が止まらない。二度と抱いてはいけなかったはずの想いが私の思考を奪う。「ころせ、ころせ」という言葉が怨念のように脳内で渦巻いた。コナンという少年の顔が憎しみで掻き消される。私は唇を噛み締めた。

それを見た教授は目を細める。まるで歌うように言葉を紡いだ。

「さて、もう一度聞きましよう。復讐を再びする気はありませんか？

我が組織で」

「……ええ、私でよければ」

「歓迎します、我らが同志（弱者）。強者に目に物を言わせましよう。復讐を遂げ、その先の幸せを掴むために！」

ようこそ！ 『紫の銃剣（ヴァイオレット・ベイオネット）へ！』

その日、私は産声を上げた。『紫の銃剣（ヴァイオレット・ベイオネット）』——通称、VBと呼ばれる組織へ加入した瞬間に。

（やっつっつべえ。コナン君がいなければ、私、死んでいたぞ…？）

自分の車の中で、ガチガチに固まった身体を少し解した。事情聴取がようやく終わったことに安堵する。

あの時、拳銃を取った理由——それは弾丸で拳銃を弾くためだ。とある『協力者』の方に、私は拳銃の扱い方を教わったことがある。かなりの使い手の方だった。しかし、私の拳銃の使い方は凡人レベル。仕方がなく、『弾丸で拳銃を弾く方法』だけ死ぬほど教え込まれたのだ。弾丸で拳銃を弾くなんて凡人レベルができるはずもない。それなのに必死で教えられたな…。最終的には、低確率ではあるが、なんとかできるようになった。

（まあ、コナン君がなんとか解決してくれたけど）

しかも、何故かコナン君に無駄に感謝されたしき。よく分からなかったけど。え…？ どうして感謝されるんだ…？ と目を白黒させたものだ。でも、コナン君にここまで感謝されることは、ある意味で良い事だ。『いい人』だと認識されたのなら、今後、コナンに遭遇しても動きやすくなる。そう考えることにしよう。目立ってしまったことは気にするな私。ああ、ただのモブでいたいのに…。コナンに下手に印象付けられたら、復讐がしにくくなるから…。

とりあえず、弾丸で拳銃を弾くとかしなくてよかった。アレをやっ

ていたら確実にアウトだったな。コナンに警戒されていたかもしれない。他にも、安室や赤井にまで疑惑の目を向けられていたかも。今回のお話には安室だけではなく、変装した赤井まで地味に登場していたからな。ああ、恐ろしや…。

(なににせよ、無事に終わってよかった。浦川芹奈も勧誘できたみたいだし)

今回の犯人、浦川芹奈を勧誘するタイミングはここしかなかった。彼女が捕まり、警察へ連れて行かれるこの間だけだったのだ。警察には数人の協力者がいる。金を握らせたら簡単に動いてくれるような下衆共だ。そいつらに要請して、彼女を『モリアーティ教授』——  
—森谷帝二の元へ連行した。

(森谷帝二さん、回を重ねるごとに勧誘スキルに磨きがかかってるよな…)

少々恐ろしいな…。早々と彼から『勧誘は成功しました。今から彼女を警察へ引き渡します』と電話が来たもん。流石は記念すべき映画第一作目の真犯人。モデルがモリアーティ教授だけある。コミュニケーション能力や擬態能力といった『人を騙す』能力は確実に私より上だ。他にも、体術や様々な技術も能力が飛び抜けている。おかしいな…同じ先生から教えてもらったはずなのに…?? 私はここまで上手くできなかったぞ…?? 極めつけは、先生からの「あら、あなたよりいい人材を見つけてきたわね」である。森谷帝二さんの授業の様子を見に行くたびに顔が引きつったものだ。

(乗っ取られないように気をつけよ…。最近妙に森谷帝二さん、張り切っているし…)

この前なんか、ヴァイオレット・ベイ…? なんだっけ…えーと、ヴァイオレットなんちやらかんたらとか言っつて、ワクワクしていたし。何で唐突に紫を英語で言い出したんだろう。うーむ、よく分からないな。まあ、彼は元東都大学の教授様である。自分の専門の建築物の名前か何かを言っていたんだろう。気にすることでもないか。

そう考えているとピロリンと携帯が鳴った。そこに表示されている名前を見て、小さく溜息を吐く。『先生』からのご連絡だ。彼女とは

かなり付き合いが長い。彼女がいなければ、私はここまで復讐を行なうことはできなかつただろう。彼女と会えたことは私にとって幸運だった。そう考えながら、携帯を耳に当てる。

「ああ、先生？ 先程はご飯を奢っていただけでありがとうございます。次の件なんです——」

・ ・ ・

ピツとブロンドヘアの女は電話を切った。豊満な胸の谷間に携帯をしまふ。全身にピツチリと張り付くライダースーツに身を包んだ絶世の美女は笑った。

「ふふ、楽しみにしているわ。私の紫の銃剣（ヴァイオレット・ベイオネット）」

・ ・ ・

幾世あやめは進み続ける

其の八： 「ミステリートレインには乗るな（上編）」

「あれ…？ 先生の呼び名ってベルモットって言うんでしたっけ…？」

「あら、言っていないなかったかしら」  
言っていない言っていない。

衝撃の事実には私は硬直した。右手のフォークに刺さるケーキがボトリと皿へ落ちる。それを見た先生——ベルモットが顔をしかめた。「お行儀が悪いわ」と言う彼女へ慌てて謝る。そして、私は皿に落ちたケーキをフォークに刺した。小刻みにフォークが震える。

（え？ マジで？ 目の前にいる先生、ベルモットなの…??）

待つて。ちよつと本当に待つて。私は知らず知らずの間に超重要キャラと遭遇していたわけ…?? 『あの』ベルモットに??

それを自覚した刹那、ゾツと震えた。一瞬で身体が冷たくなる。なりふり構わずに叫びたい気持ちになった。

だが、今いる場所は列車の食堂車である。周りには沢山の人々。更に、目の前には『あの』ベルモット。数々のフラグを立て、コナンキャラ屈指の重要キャラの一人のベルモットが！ 私の目の前にいるのだ！ 叫び散らかせば、直ぐに私の首は飛ぶだろう。そう考えてグツと感情を抑え込んだ。

（私よ、気がつくのが遅い…！ でも、仕方がないと言えば仕方がないか…。原作知識を思い出したのはつい最近だし…）

しかも、記憶を思い出した時期があまりにも悪すぎた。あの江戸川コナンと遭遇した時に記憶が蘇ったのだ。探偵という、『人の秘密を暴く』ことに特化した主人公との出会い。そんな非常事態が起きている時に普通の協力者の一人だと思ひ込んでいた『先生』へと意識が向くはずがない。

（もつと早くに記憶が戻れば良かったのに…！）

ベルモットは他のコナンキャラと違い、個性的な服装や見た目をしていない。パツと見はただの金髪碧眼の白人美女だ。とはいえ、かなりの美人ではあるが。しかし、それくらいなら頑張つて探せば何人か

は見つかるだろう。

(それに加えて、私は今の今まで先生の名前を知らなかったからなあ…)

私はベルモットのことをずっと『先生』と呼んでいた。恐らく、そのせいで彼女の顔を見ただけではダメだったに違いない。

(早々に彼女の名前を知り、記憶が蘇っていたならコナンと知り合いになんてならなかった…!)

くそつたれ！ 名前聞けよ私！ 思わず髪を掻き毟りたくなった。

一応、先生の名前を聞かなかったのには理由が二つある。一つは、見るからに先生が裏社会の人間だったからだ。もしも名前を下手に知ってしまえば、さらに危ない事件に巻き込まれるかもしれない。そう考えた昔の私は何も聞かなかったのだ。

もう一つは、ベルモットとの契約でお互いに干渉しないことも条件の一つだったからである。この二つの理由から私は名前を聞いていなかったのだ。

(コナンと顔見知りになっているのも最悪だが…。ベルモットと協力関係になっっているなんて更に最悪だ！ 私は悪夢でも見ているのか?!)

余程、この世界の神は私が嫌いらしい。ああ、しかし、ベルモットと遭遇していなければ、現時点での復讐がここまで進んでいなかっただろう。それが事実だけにベルモットと契約を結んだ昔の自分を責めることができなかった。

今でこそ私は金銭的な余裕がある。だが、復讐を決意した時期は殆ど金がなかった。当たり前前だ。私はどこにでもいる普通の日本人だったのだから。

仕方がなく、「薄汚いことでもやるか…？」と考えていた。本当は凄く嫌だったけど。私は小心者で雑魚で何の力もない弱い人間だ。それを自覚していたからこそ、裏社会へ身を置けば直ぐに死んでしまうと分かっていたからである。しかし、金がなければ私の復讐を効率よく進めることはできない。

(自分の命を賭けたりなんかしたくないけど…復讐が優先だ。黒いこ

とでもなんでもやってやる)

そう意気込んでいた時だった。ベルモットが何故か私へ手を差し伸べてきたのだ。当時は驚いたものである。何も聞かず、こんな小娘に協力する馬鹿がいるのかと。

もしかしたら騙されているかとも思った。その時のベルモットの服装は明らかに裏社会の人間の格好だったしなあ……。だから、彼女が契約を持ちかける前は支離滅裂なことを言って追い返そうとした程だ。

(だが——だが、それでも)  
騙されていたっていい。

ボロボロの布切れのように使われてもいい。

人としての尊厳を失っても。

絶望の果てに朽ちようとも。

——それでも、金が必要だ。

協力者が、モノが、頭脳が、ありとあらゆる全てが必要だ。憎つき奴らの喉笛を掻き切るためには。私はどうなつてもいい気持ちで彼女の手を取った。

しかし、ベルモットは本当に私へ協力する気でいたらしい。私が望めば必要なだけの金を、知識を、人材を、武器を授けてくれたのだ。

もちろんタダでそれらを与えてくれたわけではない。『もしも先生に何かがあれば優先的に彼女を助ける』——という条件つきである。復讐の傍、私は先生の雑用係としても動いていた。彼女と契約を結んだことは私にとって最大の幸運であり、現時点では失神レベルの悪夢である。

(どうして契約なんて結んじゃったんだ、私！ いや、仕方がないんだけどさ！ でも、それにしただけで今、いる場所と乗り合わせている人物が危険すぎる……！)

今、いる場所を言っただけだろうか？ ミステリートレインの中である！

ちなみに、ミステリートレインというのは、列車内で行われる体験型の謎解きアミューズメントのことだ。実際に参加者が探偵、もしくは

は犯人となり、事件を解決するという催し物である。そのミステリートレインで、ベルモットの登場とか本当にヤバイ。いや、ヤバイどころの話ではない。マジで致命的なミスである。確実にコナン御一行様が来るじゃん。

(くっそ、こんな列車に乗るんじゃないよ…！)

だが、先生からの頼みがあったのだから仕方がない。『貴方の手がある』と先生に言われたのならば行くしかないだろう。これを断るという事は彼女との約束を反故にする事と同じ。今までの恩を仇で返してしまうことになるのだ。

(というのは全て建前で、先生が怖かったからだよ！)

いつも先生は優しくしてくれる。しかし、あんな大金や武器、知識をポンつと簡単に渡してくれちゃうお人でもあるのだ。そのような人の約束を破るなんて真似は誰だって怖すぎて出来ないだろう。直ぐに死んでしまう。小心者まるだしの理由でごめんなさい。

(ああ、先生だから大丈夫とか思うんじゃないよ…！ てか、どうして今、先生がベルモットと気がついてしまったのか…！)

先生がベルモットだと気がついたのは先程、食事中に彼女が電話にでた時である。先生が「ハアイ、ベルモットよ」と言って電話にでたのだ。思わず紅茶を噴き出すかと思った。動揺しすぎて先生を二度見どころか五度見したぐらいである。

(つーか、こんな人の多い場所でどうしてベルモットって言うの?! 言っついでいいの?!)

はー…今まで気がつかなかった私が馬鹿すぎる。もう帰つてもいいだろうか。でも、この列車はミステリートレイン。行き先に着くまでは基本的に止まらない。辛い。発狂したい。ベルモットである先生がミステリートレインに乗るとかフラグでしかないじゃん…。

私が遠い目をしていると、先生は再び爆弾発言をした。

「今回の準備の手助け、感謝するわ。例の物の配置は終わったかしら？」

「ええ、もちろん。手筈通りに」

「やはり貴方は手際がいいわね。ふう、あまり気が乗らないけれど捕

まえなくては…シエリーを」

「シエリー、ですか…？ ベルモットやシエリーといい、お酒の名前ばかりですね」

「言っていないなかったけれど、私はとある組織に所属しているのよ。そこのコードネームがそれってわけ」

「へ、へえー。私に教えちゃってもいいんですか…？」

「それ以上は教えるつもりもないし、関わらせるつもりもないわ。でも、名前くらいは知らないと不便でしょう？ まあ、気にすることはないわ。貴方はただ私の手伝いをしてあげばいいの。今回はこれで終わりよ」

『先生のごことは深く詮索しない』がルールですもんね。分かってますよーはっはっはっ」

やめろ！ シエリーって言うな！

できれば名前すら知りたくなかったです…！ 生存率が下がるだろうが生存率が！ ただでさえ犯罪を犯している時点で幾つか死亡フラグが立っているというのに…！

私は乾いた笑みを浮かべながら、内心でうな垂れる。やってらんねえ。本当にやってらんねえ。テーブルに隠れた自分の足が震えた。それを頑張って抑える。その時、私の頭の中にとある考えが浮かんだ。

———つーか、多分、これって原作の『漆黒の特急（ミステリートレイン）』の話じゃない…？

『漆黒の特急（ミステリートレイン）』とは黒の組織とコナン達がグツと近づく話である。この回の登場人物は豪華勢揃いと言っているけど、それはもう主要なキャラ達が登場する。毛利親子、少年探偵団、鈴木園子、世良真純はもちろんのこと、赤井秀一、安室透、ベルモット、工藤新一の母、怪盗キッドまでが出てくるのだ。更には全員がこのミステリートレインに乗り合わせているという悪夢。

（確か、外野にはジンやウオツカもいたっけ。そんな時に私が居合わせている、だと…？）

地獄かここは?! 死神のオンパレードやめろ！

私、地獄に落ちるようなこととしてませ……しているわ、ヤバイくらい地獄に落ちるようなことをしているわ……。そのせいなの?! やっぱり犯罪者なんてしているから、この遭遇率なの?! 犯罪者は地獄に落ちるべきだよな、分かる! でも、私に対しては適用して欲しくなかった。私は善良な復讐者だ!

(それでも全力でコナンを避けているというのに……!)

しかも、今回の遭遇した時期が最悪の中の最悪だ。黒の組織とコナンが完全対決の時に私がベルモット側にいる——その事実だけでもう泣き崩れたいレベルである。どうしよう本気で震えが止まらないんだけど。

先生が「ただ手伝いをするだけ」「組織に関わるな」と線引きしてくれているだけマシとは言えばマシだが……。『マシ』なだけで、全然良くない。どうして今、私に教えたんだけ先生エ!

私が内心で頭を抱える。その時、あることをハツと思い出した。とんでもないヤバすぎる事案を思い出してしまったのだ。

(ヤバイ。ヤバイぞ。確か今回、森谷帝二さんがこの列車へ乗った誰かの復讐の手助けをしていたはず)

ヤッツツベエ!! こんな探偵がわんさかいる場所で犯人側とか死ぬ!! 一応、今回の復讐の手伝いでは、依頼者側が『復讐相手が反省しているようなら自首を勧めたい』ということだけは知っていた。だから、もしかしたら今日の犯行は取りやめになるかもしれない——  
—わけないだろボケがア!

ここはコナン世界だぞ?! 絶対に復讐相手は反省していない! なんなら、寧ろ、「あんな奴らなんて殺して正解だったヒツヒツ」とか最低なこと言いだすぞ!! 確実に依頼者は怒って、そいつを殺す羽目になる!!

ちなみに、現在、私達は『復讐の手助けをする』というビジネスをやっている。こんなビジネスをしている理由は二つ。一つ目は資金や協力者集めのため。二つ目の理由は捜査攪乱のためである。このビジネスをすることで多くの人達が復讐をするようになるだろう。結果、警察や探偵の注意が私へ向きにくくなるに違いないと見込んで

のことだ。

(まあ、このビジネスも最初のうちは私がやっていたんだよ！)

先程言ったように、今は『モリアーティ教授』こと森谷帝二さんへ全て任せている。理由は簡単だ。私が自分の復讐などで忙しいからである。

確かに資金や仲間集め、捜査攪乱は大切で、重要だ。一つのミスも許されない。森谷帝二さんがポカをすれば、芋づる式に私へと辿り着くことだろう。

しかし、私の為すべきことは復讐。ビジネスがメインになってしまえば本末転倒だ。

(あー…本当、最低な人間になったなあ…。こんな薄暗いビジネスやめたいなあ…)

だが、復讐には金がかかる。完璧さを求めれば求めるほど金が必要になってくるのだ。今はまだ先生がお金をくれているが、いつ切られるか分からない。それ故に仕方がなくこのビジネスをしていた。

(今回の依頼者がどんな人物とかどんなトリックを使うとか、詳しいことまでは知らないんだよなあ…。『復讐相手が反省しているようなら自首を勧めたい』という内容しか知らねーよ！)

私と犯人との関係性を断つために敢えて聞いていないのが仇になったか…！ このお話の内容はどんなのだっけ…?! ちよつと忘れているんだけど…！ 確か犯人は絵画の鑑定師の人だったかな…？ ああああヤバイヤバイ!! 早々に彼を止めなきゃ！ 一番初めの時のようにコナンを誤魔化せるはずがない!! あれは運がよかった。いや、『運が良すぎた』。あの奇跡は二度と起こることはないだろう。

もしも万が一、何万分の一の確率でコナンが誤魔化せたとしても、赤井や安室がいる。それに加え、工藤母に怪盗キッドまでいるのだ。二段構えどころか五段構えである。6人もの頭脳チートとやりあうなんて無謀すぎ。戦闘力5の村人がフリーザに立ち向かうレベルの無謀さである。

捕まる！ 確実に捕まる！ あああああどうして私はミステ

リートレインなんて乗ったんだ?! 今後、『ミステリー』が付くモノには絶対に行かないぞ!

(ちよっ、中止中止!! 今回の殺人計画は中止!!)

森谷帝二さんに伝えなきゃ!! メールや電話……はダメだ。この探偵がわんさかいる場所で携帯電話の使用は死亡フラグ。かといつて、直接対面はもっとアウトだ! こういう緊急時ってどうやって連絡するんだっけ?! 事前に決めていたんだけど、テンパって頭からすっぽ抜けている!

(どうする……? どうやって犯人を止める……?)

くっそ、直接私が犯人と関わっていたのなら、もっと簡単だったのに……! 自分以外の復讐者への手助けを森谷帝二さんに丸投げするんじゃないかった……! ああ、くっそ!

(丸投げした結果がこれとかヤバイ! 万が一、森谷帝二さんが逮捕された場合を考えて、犯行中は殆どの連絡手段を絶っていたのも仇になってんじゃないか……! いや、一つだけ直ぐに繋がる連絡手段はあるにはあるけど、それは別用だし……!)

まさかのダブルパンチやめて欲しい!

今、森谷帝二さんは別の女性とこのミステリートレインに乗り込んでいる。だが、彼はいつもの私の上司役の『有栖川』ではない。森谷帝二さんは変装して、協力者の一人である女性の恋人として此方へ来ていた。

それに対して、私は通常通りの『幾世あやめ』スタイルである。変装した森谷帝二さんとは一切の関わり合いがない姿だ。ちくしょう!

余談だが、私は女友達と一緒に来ている。一人でミステリートレインへの乗車は不自然だからだ。

まあ、ベルモットと話をする必要があったから、彼女には下剤を飲ませたけど。その為、現在、友人はトイレに籠りつきりである。食事の時間になっても彼女は出てこなかった。流石に私に悪いと思った友人は「先にご飯を食べておいて」と言ってくれたのだ。結果、迷惑通り、ベルモットとの食事にこぎ着けることができた。本当にごめん

な…我が友よ…。罪悪感がヤバイ。

(トイレ…トイレか…。そうだった！ トイレだ！ トイレでメモを書いた後、ハンカチでそれを包む！ そのハンカチを森谷帝二さんとすれ違いざまに落とす！ それが緊急時の連絡手段だ！)

思い出したらすぐ行動しろ！ 頭を回転させろ！ 一応、コナンと遭遇した時用の連絡手段を思い出せて良かった…！ 暗号文をメモに書いて、早々に森谷帝二さんに渡さなきゃ…！

そう思いながら、私はナフキンで口を拭う。目の前に座るベルモットへニツコリと笑った。

「では、これで失礼します」

「ええ。また何かあれば連絡するわ」

妖艶に笑うベルモットに悶えている暇はない。死ぬ！ マジで死んでしまう！

ああ、探偵の魔の手が自分の直ぐ近くに差し迫っている。それを想像すると、ドツドツドツと自分の心臓が強く波打つのが分かった。恐ろしい死神の幻想が頭から離れない。

どれほど完璧さを求めようとも、必ずミスはある。その小さなミスを拾い集め、コナンはきつと私へと辿り着くのだ。それを思い浮かべると、恐怖で身がすくむ。

いつの日にか、私はあの探偵に断罪されるのだろう。

メガネを光らせた彼の幻想が私の前にあらわれる。

——犯人はお前だ！

(捕まってたまるか！ 今回は誰も死なないミステリートレインにしてやる！)

私は足を必死に動かした。目指す先はトイレだ。

其の九：「ミステリートレインには乗るな（下編）」

（いた。丁度森谷帝二さんが向こう側からの廊下から歩いてくる）

運がいい。変装した森谷帝二さんを早めに発見できたなんて。私は内心で笑う。

ベルモットと別れた後のことを少し話そうか。あの後、私は即行でトイレへ入室。そして、メモ用紙に暗号文を書き出した。その後、すぐにトイレから退出。森谷帝二さんがいそうな場所を必死で探した。（今回の依頼の詳細をもっと聞いておけばよかった：）

先程言ったように、今回は依頼の詳細を殆ど知らない。ああ：私の馬鹿：。でも、下手に詳細を知りすぎていたら、探偵共に勘付かれるかもしれないからなあ：。もしかしたらコナンたちにトリックの内容を無意識にうっかり言ってしまうかもしれない。一瞬のミスが命取りになっちゃうコナン世界マジ怖い。

『やべえ、早く見つけよう』と焦りながら森谷帝二さんを探した。結果、なんとか早めに森谷帝二さんを発見できたのだ。

（すれ違いざまにハンカチを落とそう。そのまま姿を消せばミッシェンコンプリートだ）

私は森谷帝二さんを視界に入れないうちにしながら、前だけを見る。彼とすれ違う瞬間に肩を『敢えて』ぶつけた。

「ああ、すみません」

「いえ、大丈夫です」

そして、私はメモ用紙が入ったハンカチを落とす。自然に、本当にうっかり落としてしまったかのように。ベルモットから教わった全てを出し切り、私はハンカチを落としてみせる。終わった後は早足でその場を去った。他の人達に見つかれば注意される可能性があるからな。その後、私は友人と自分が予約した列車の部屋へ戻る。

（ミッシェンコンプリートオ！）

内心でガッツポーズをした。これで大丈夫だろう。部屋でホッと息を吐きながら、着席する。ドツと疲れが出てきた：。座席に全身を沈めた。そして、気を紛らわせる為に外の景色を眺める。

何十分かそうしていると、友人がトイレから帰ってきた。げっそりとした様子の友人に、申し訳ない気持ちになる。下剤を飲ませたのはこの私です。利用してごめんな…でも、仕方がないんだ…。そう考えながら、私は心配そうな顔を作った。

「お帰り〜お腹、大丈夫…?」

「うう…あやめ、ほんつつつとにごめんね…なんか死ぬ程お腹の調子悪くて…」

「結構酷いみたいだね…。今日は謎解きには参加しないで、部屋でゆっくりしよ?」

「いいよいいよ! あやめは一人で参加してきなよ!」

そう友人が言った瞬間だった。放送が車内に響き渡ったのは。

《お客様にご連絡致します。先程、車内で事故が発生しました為、当列車は予定を変更し、最寄りの駅で停車することを検討中でございます》

「フアツ?!」

「ええ?! 事故って何? はー…今日はお腹の調子も悪いし、列車も止まるみたいだし、最悪だ…」

自分の顔がサツと青くなるのが分かった。友人が項垂れている姿を尻目に入れながら、私は頭を高速で回転させる。じわりと額から汗が滲む。若干手が震え始めた。

(この放送が流れたということは――)

――事件が起きたんだ。

何故?! 確実に私は森谷帝二さんにメモを渡した。暗号文も間違いなかったはずだ。もしかしたら彼が犯人を止める時間がなかったのか? いや、ギリギリ間に合ったはずである。あの程度なら優秀な森谷帝二さんなら軽々やっつてのけるだろう。なのに何故? 何故だ?! 不具合でも起きたか? ええ…不具合とか考えるだけで恐ろしいのだが!

(いや、何が起きたかは関係ない。大切なのは結果だ。考えろ、対策を!)

こうしている間にもコナンは犯人である私の依頼者の周りを嗅ぎ

まわっていることだろう。そして、最終的に彼は事件を解決するに違いない。

解決するだけで終わるならマシだ。しかし、焦った依頼者がうっかり私達のことを話すかもしれない。もしくは、コナン自身が依頼者へ質問する可能性もある。今回のトリックと今までに私が起こした事件に類似点を見つけ、コナンが依頼者に詳細を聞けば——ヤバイ。ヤバイ！ 冷や汗が止まんねえ！

(仕方がない。こうなったら、)

今回の依頼者を殺す。

森谷帝二さんが復讐を支援する際に必ずやっていることがある。それは小型の毒薬入りの機器を依頼者へ渡すことだ。いや、渡しているのではなく、『飲ませている』が正しいか。毎回、依頼者を言いくるめて、それを飲ませている。ボタン一つで毒が溶け込み、証拠も残らない優れたものだ。

本来なら、こんな毒薬入りの機器なんて渡したくない。私と同じく復讐に臨む相手には全力で支援したいものだ。

(だけど、もしも依頼者がうっかり私達について話してしまったら？ 犯行を行う際、致命的なミスを犯してしまったら？)

私達の存在がバレてしまう。そこで登場するのが毒薬入りの小型機器だ。証拠も残さずこれで殺す。ちなみに何日か経てば便と共に排出されるので、発動しない限りは安心だ。もちろん解剖しても毒の反応は出てこない仕様になっている。まったく、コナン世界の科学力は色々とおかしいな。

(これを発動させるのは初めてだが、まあいい。死人に口なし。死んでもらおう)

突然の依頼者の死にコナン達はきつと驚くだろう。依頼者を殺した犯人を見つけようと足掻くに違いない。しかし、先程言ったように『死人に口なし』。死んだ犯人から情報を仕入れる事は出来ない。それに加えて、一応、他を探っても私達へ辿り着かないよう、いくつかのダミーも用意している。

(それでもコナンはいつか私にたどり着くだろう。それでいい。私の

本懐は復讐相手を殺す事なのだから。時間稼ぎができれば構わない）  
本音を言うと、捕まりたくないけどな！ 復讐を終えた後はぬくぬくと幸せに過ごしたいものである。まあ、こんな罪まみれの女が幸せになれるとは思わないけれど。きっと罪を償わなければならぬ日が必ず来るだろう。

（本当に最低になった。なんの罪もない、寧ろ、被害者である依頼人を簡単に殺そうとするなんて）

私は自嘲する。自分を最低だと自覚していても、それでも私は依頼者を殺すのだ。紛れもない自分のエゴの為に。

（はは、手が震えてやがる。今でも人を殺すのにはこうなってしまうんだよなあ…罪悪感で）

——それでも目的のために殺人を行う私は、人として破綻しているのだろうか。

あーあー…自分、暗いわ。それに若干厨二病チックだな。恥ずかしいから、悩むのはやめよつと。

そう考えながら、唯一の森谷帝二さんとの連絡手段である簡易の機械のスイッチを入れる。この瞬間、彼へ信号が伝わった。ちなみに、この機械は『依頼者を殺す』という判断をした時のみ使うものだ。先程述べた『とある連絡をするためだけの通信手段』とはこれのことである。

（こうすれば森谷帝二——『モリアーティ教授』がベストタイミングで依頼者を殺すだろう）

さあて、やってくれよ、『教授』。コナンに気がつかれないタイミングで依頼者を殺してみせろ。誰にも悟られず、誰にも捉えることができない、『犯罪界のナポレオン』と呼ばれた『モリアーティ教授』。貴方ならできるはずだ。

——ホームズと対をなすモリアーティ教授である貴方なら！

（私は所詮モブでしかない凡人だからね。モリアーティはやはり森谷帝二さんの方が似合う。原作でも森谷帝二さんのモデルは教授だし）

そう考えながら、私は列車内で友人と談笑する。今回の私の役目は終わった。出来ることといえば待つことのみ。これ以上は余計に自

分の首を絞めかねない。

その後、部屋ですつと待機しようと思気込んでいたのだが、途中、そこから出るようになってしまった。理由は後ろの列車内で火事が起きたとアナウンスがあったからだ。私達は火の手が回らないうちに逃げなければならなかった。

(何事?!… っで一瞬だけ焦ったな…)

『あつ、そういうえば原作で起こったやつだった』と思い出して、普通に逃げることに専念したものである。焦るわ…やめてほしい。つか、私、さつきから『やめてほしい』しか言ってるわ…。

余談だが、この火事騒ぎはベルモットとバーボンの仕業である。シェリーを捕まえる為、わざと火事の煙だけを発生させたのだ。シェリーの性格上、火事の起こった列車へ逃げ込むと見込んでのことである。

どうしてそんな場所へシェリーは逃げ込むのか？ 理由は簡単だ。彼女は少年探偵団達の前だけでは殺されたくないと考えているからだ。迷惑をかけたくない、彼らを悲しませたくない——その思いが彼女を突き動かすだろうとベルモットは予測した。

(まあ、これもコナンの掌の上なんだけどな！ 恐ろしいな！)

コナンの策略によりシェリーはちやっかり保護済みである。火事が起こった列車へはシェリーに化けたキッドが向かっているはずだ。

本当にコナンはなんなの？ 数々の探偵や悪の組織を欺き、その上、キッドにまでコネクションがあるとか…。寧ろ、コナンが黒幕なんじゃね？

(はー…コナンは絶対に敵に回したくない相手だよね！ でも、そいつが私の敵なんだよな！ 本当に意味が分からないよね！ 世知辛い！)

ついさつき列車が爆発した音が聞こえたから、そろそろ物語も終幕だろう。バーボンとベルモットは『シェリーを列車ごと爆破できた』と勘違いしている頃ではなからうか。一応、後に彼らはそれが間違이었다と気がつくのだけれど。

(上手く列車が爆破されたようで良かった)

ちなみに今回の爆弾の配置は私がやった。ベルモットこと先生から依頼されたのはこれだったのだ。ジン達に悟られないようにするため、私が使われたのだろう。原作でベルモットはこのことを内緒にしていたみたいだし。

(この混乱に乗じて森谷帝二さんも依頼人を殺しただろうな。さて、私の役目は終わりだ)

火事のために途中下車した駅で私は小さく笑う。ホッと溜息を吐いた。隣にいる友人と笑い合いながら、その場から直ぐに去ろうと足を早める。

(あー…終わった終わった。今回はコナンと直接顔を合わせることにならなかったから良かったかな)

そう思いながら、友人と適当に取ったホテルへと向かう。本当はこの後、友人とその辺りで散策と洒落込みたかった。しかし、友人へ下剤を仕込んだせいで、現在の彼女の体調は最悪である。これでは遊びにいけない。もう休もうということホテルへ向かっていた。

(本当にごめんな、我が友よ。後日何か奢ります)

ホテルに着くと、早々に友人はベッドへ倒れ込む。友人があまりに可哀想だったので、コンビニで薬を買ってくることに決めた。薬を購入後、私はホテルへ戻ろうとする。だが、その帰り道で眉をひそめた。「トイレに行きたい…」

今からコンビニに戻るか？ いや、でも、さっき出たばかりだしなあ…。ホテルはまだ遠いし…。

トイレはないかとキョロキョロすると、公園を発見した。公園なら公衆トイレがあるかもしれないと思い、公園へ足を向ける。やはり私の考え通り、トイレがあった。良かったと思いつつながら、トイレへ入った瞬間、私は声をかけられる。聞き慣れた声がトイレの中で響きわたった。

「あら、あやめじゃない。どうしているのかしら」

(それこっちのセリフウー！)

ベルモット、お前は何で公衆トイレにいるんだよ?! ビックリしたわ! まさかあのベルモットが公衆トイレにいると思うわけがない

じゃん！ 驚くくらい公衆トイレが似合わねーな！ いや、似合っていたらそれはそれで嫌だ———そうじゃない！ 話がそれている！ 落ち着け、私！

視線がうろろうろと彷徨う。本当に落ち着け、私。別に偶然、ベルモットに遭遇しただけだ。今の私に何もやましいことはない。「ああ、偶然ですね。トイレに行きたかっただけですよ」と言つて、普通にトイレへ行けばいいのだ。私はにっこりと笑みを浮かべた。

「いえ、ただ、」

「———貴方と交渉しに来ただけですよ」

カチャという音と共にベルモットの後頭部へ拳銃が突きつけられた。音もなく、気配もなく、ベルモットの背後にいる人物———森谷帝二はうつそりと笑う。その刹那、ベルモットの形のいい目が限界まで見開かれた。それと同時に私も目を見開く。

(おっつっつっつまえは何をしているんだ?!)

ベルモットへ拳銃を突きつけるのはやめて！ 死ぬだろ！ 私が!! ベルモットに「これは…裏切りかしら」と言われた暁には本当に死ぬ。消される。なんとか逃げ帰っても、私がした悪事を世間へ晒されてしまうかもしれない。一つだけベルモットに事件の内容を報告したことがあるから…！

後、森谷帝二さんよ、お前は どうしてここに いるんだ?! 怖いわ！  
そして、何故、女子トイレに入ってきているんだ?! お前は男だろう?!

私が混乱で硬直している間に森谷帝二さんはドンドン話し始める。  
おい、やめろ。本当にやめろ。やめてくれ。

現在、彼は変装したままであるが、表情は既に『モリアーティ教授』スタイルになっていた。歌うように森谷帝二さんは言葉を紡ぎだす。

「この姿でお会いするのは初めてですね、先生———いや、ベルモット」

「あら、どうしてその名前を貴方が？ 現時点ではまだ貴方は知らないはずよ」

「まさか我々が、幾世あやめが、貴方のコードネームを今の今まで知ら

なかつたとでも?」

「……へえ?」

「まあ、それは今は置いて起きましよう。貴方に交渉があつてここ  
にきたのですよ」

「交渉、ねえ。恩人たる私にこの仕打ちをした上での交渉? 出来る  
と思つているの?」

「はい」

「ふうん、まあいいわ。用件だけでも聞いてあげましよう」

「ベルモット、貴方に我々の傘下へ入つて欲しい」

だから、森谷帝二さん、お前は何を言つているんだ!

頭を抱えるワードのオンパレードで泣きたい。いや、咽び泣きた  
い。もうお前は口を塞げ! 何もこれ以上言うな! 頼むから!!

最早、取り返しがつかないレベルの言葉ばかりを並べているけれど!

つか、お前、どうして先生の名前がベルモットつて知つていたの  
?! 私は知らなかつたよ?! 何で『私は昔から知つていた』みたいな  
言い方しているわけ?! 知らないから!!

私は森谷帝二さんへ対して、『どういふつもりだ』という表情を浮か  
べる。しかし、森谷帝二さんは『わかつてます』という顔しかしない。  
いや、わかつてないわかつてない。まるで分かつていないぞ、森谷帝  
二!!

私が混乱しきつている間、ベルモットはずつと無言だった。怖い怖  
すぎる。彼女へ恐る恐る視線を向ける。ベルモットは一旦、目を閉じ  
たと思えば、ククツと喉を鳴らした。

「随分と大口を叩くわね。——できると思つて?」

思つてねーよ! 思つていないから、ここまで私は内心で荒ぶつて  
いるんだよ! 森谷帝二さんはどうして出来ると思つた?! お家に  
帰りたい。帰りたいよ! やはり依頼人を殺し、友人を下痢にしたツ  
ケが回つてきているのかな?! いや、もしかしてアレの所為か。そ  
れともあつちか? 思い当たる節が多すぎて辛い。ちよっ、改めて思  
うけど、自分が最低すぎる! ……そうじゃなくて! 混乱し過ぎて  
余計なことまで考えてしまった!

(今の森谷帝二さんの発言は撤回出来るか…？ いや、無理だろうな。あの発言をした時点で私の首は落ちたも同然)

背中が汗でびっしょりになるのを感じた。笑顔を保っているが、崩れそうになる。何か、何かないのか…?! なんとか誤魔化せる方法は…?!

頭を高速回転させる。本日何度目か分からない脳の酷使。絶対に明日は頭痛で苦しむに違いない。

私は考えに考えて、考えすぎて——こんなトチ狂ったことを口にしてしまった。

「ベルモット、貴方はそんな態度で良いのですか？ 『教授』が『交渉』だなんて言い方をしたから、勘違いさせてしまったのかもしれないですね」

「何ですって？」

「——これは交渉などではない。『強制』だ。貴様の立場を弁えろよ」

何を言っているんだろう、私。本当に何を言っているんだろう。立場を弁えるのは私の方である。

(ヤバイ、死んだ?)

ドツと冷や汗が更に流れ落ちるのが分かった。急速に身体中が冷えて行く。ヤバイ。真面目に殺されかねない。本当に馬鹿すぎることを言ってしまった。

確かに、ベルモットは原作では『悪側だけど、そこそこ助けてくれる』みたいなキャラクターである。少しくらいなら見逃してくれそうに思えるだろう。だが、あれは主人公とヒロインの毛利蘭限定だ。残念ながら主人公パワーもなく、ヒロインパワーも持たない私には無理だ。

いや、私も適用してもらえるかな…？ 今までベルモットの可愛い生徒でいたから——アツ無理だな。今、ベルモットをチラツと見たけど、絶対零度の目になっていた。駄目だ。ああ…だめだア…殺される…。

(やっぱり私にはそんな優しさ適用されねえよな)

あああ何でこんな言葉を言ってしまったのか……！ 私、テンパリすぎ！ちくしょー！ 完全に取り返しがつかなくなってしまった……！ ええい！ もうなかつたことには出来ない！ こうなったら全力で脅してやらア！

私は自分の唇をペロリと舐めた。若干、手を震わせながら。

## 其の十：「ベルモット（上篇）」

「連続して起こる『首』に関する事件、ねえ？」

ブロンドの髪を掻き上げる。紫色の口紅をひいた唇を静かに開いた。そこへベルモットが入ったグラスを近づける。グイッと酒を呷るとアルコールの味が口に充満した。

グラスをそつと机へと下ろす。私の名を冠する、『ベルモット』をグラス越しに見つめた。

——「最近、俺達のパトロンが死んでいつている。だが、どこかいつもの死とは違う。誰かが糸を引いている——そんな気がしてならねえ。もう一度探せ」

ジンにそう言われたのがつい最近。あの男がいつも以上に目を鋭くさせていたのが印象的だった。

ジンの言う『誰かが糸を引いているような』事件はたった8件だけ。1件はパトロンの1人による首吊り自殺。これは組織の恐怖から逃れる為だと片付けられていた。様々な原因があったが、一番の原因は彼が死ぬ前の数日の様子がおかしかったからである。明らかに自殺をほのめかすような行動ばかりをしていたのだ。

次に上げている事件も首吊り自殺。その次も首吊り。更に次も首吊り自殺。4体目以降からは首吊りではない。だが、『首』に関係のある死だった。例えば首にロープの跡があったり、首だけが切れていた、である。

この数件に及ぶ事件は二週間という短い間に起こった。これだけならば『怪しい』と思っても仕方がないだろう。私とて、初めて聞いたときは疑った。

しかし、8件のうち3件が他殺と断定され、犯人全員が警察に捕まったのだ。また、残りの5件は自殺と判明している。組織の手でも再調査したが、それは本当だという結果も出ていた。

確かに、この短期間で似たような事件が続くのは珍しい。だが、珍しいというだけで、今までにないわけではない。

(そこまで気にするほどではないはずなのだけれど)

私はジンから貰った資料に眉を顰めた。

眉を顰めている理由は簡単だ。我々が所属するこの組織は生半可な犯罪組織ではないからだ。莫大な資産と多数の有能な人材を抱える、大型国際犯罪シンジケート。数多の人脈が政界までに広がり、ありとあらゆる国の重鎮と手を結んでいる。

いや、『結ばせた』が正しいだろうが。そんな組織の目を掻い潜り、事を成す。それが出来る人間など、殆どいない。いや、いないに等しい。

本当にもしも——もしも、ジンの言う通り、真犯人がいたとしても。そいつは八人ものパトロンを今の今まで警察にも、組織の人間にも、気がつかれずに殺したことになるのだ。更には別の犯人を多数仕立て上げて。

現に、捕まっている犯人達は口を揃えてこう言っている。「私がやった」と。組織の者達が裏から根回しをして、拷問までしたのだ。彼らが嘘をついているとは考えにくかった。

いや、『ありえない』のだ。まさか真犯人がこの事件の裏にいるなど。本当に本当に本当に、そんな人物がいたとするならば———そいつは人間ではない。

『怪物』だ。

(ジンの勘は侮れないけど……。今回に関しては少し疑うわね)

ふうとため息を吐いた。やる気なく、資料を見つめる。まあ、万が一があつてはいけない。調べるだけ調べなくては。結果、私はジンの言う真犯人について調べることになったのだ。

———しかし、やはりと言うべきか、『真犯人』など見つかりはしなかった。

当たり前前だ。既に警察や他の組織の者達が『この事件は解決済み』と太鼓判を押している事件である。そこへ私がもう一度調べたところ、結果がそこまで変わるはずがない。

(それでも稀に結果が変わることがあるけど)

ジンの勘はよく当たるのに今回は外れたわけね。まあ、勘は勘。勘に絶対などない。彼の勘は当たるとはいえ、度々外れることもあった。今回もそれなのだろう。

私はテーブルの上に資料を投げ打つ。ジンへメールで結果を報告した。

(さて、これで終わり——あら?)

そんな時に目に付いたのが一つの映像。

——クールガイがウィンブルドン選手権の映像に映っていたのだ。

動画内ではこう伝えられている。『苦戦するミネルバ選手をクールガイが鼓舞した』と。だが、実態は事件に巻き込まれたミネルバ選手と彼女の母親を助ける為だろう。クールガイがあそこまで行動したのだ。それくらいしか考えられなかった。

(あの子らしいわ)

自然に笑みが浮かんだ。流石は私のシルバートレット。何でもつと早くにこの動画を見つけたことができなかったのかしら。最近はずんからの依頼などで忙しかったから、仕方がないわね。

そう思った瞬間、もう一つ、気になる記事が目に入った。今回の犯人であるハーデスという男だ。ハーデスは警察に捕まり、パトカーに乗った刹那、自分もろとも爆破したらしい。そこまでなら別段気にならないだろう。その後の言葉が少し引かかった。

——「何故だ。モリアーティ教授よ。何故、私を見捨てた。ああ、私は貴方の駒に過ぎなかったのか。やはり貴方はモリアーティ教授に似ている。私の目に狂いはなかった」

(『モリアーティ教授』か)

それを聞いて思い出すのは、紫の銃剣(ヴァイオレット・ベイオネット)だ。紫の銃剣とは、私の生徒である『幾世あやめ』の呼び名である。

その彼女が『森谷帝二』という40代〜50代くらいの男を『教授』と呼んでいたはずだ。私もヴァイオレット・ベイオネットに倣い、彼を『教授』と呼んでいる。そのため、この記事の『モリアーティ教授』

を見て、ヴァイオレット・ベイオネットのことを真つ先に思い出した。  
(あの子とも随分付き合いが長いわね。最初は何を教えてもダメダメ  
だったから、どうなるかと思っただけ)

凡庸でありながら、裏社会で生き残っている生徒。それが『幾世あ  
やめ』だった。

(私のヴァイオレット・ベイオネットと会ったのはいつだったかしら  
? …ああ、そうだね、彼女が10才の時だったわね)

今でも目を閉じると思い出す。ボロボロのゴミのように転がって  
いた彼女のことを。

ヴァイオレット・ベイオネットと初めて会った日——私は裏路  
地とある取引をしていた。相手から金を受け取り、帰ろうと歩いて  
いた時のことである。ゴミ置場から物音がしたのだ。いつもなら気  
にならないはずの音。しかし、その時の私は何故かゴミ置場へ足を向  
けた。

そこにヴァイオレット・ベイオネットはいた。ゴミ袋の上に倒れこ  
むように寝ていたのだ。10才の少女が、だ。

ここが貧富の差が激しい国であるなら、それは普通の光景だろう。  
しかし、彼女と私がその時にいた国は日本。子供がボロ切れのようにな  
って寝ているのは珍しかった。もちろん、日本でもこのような光景  
は稀にあるのだが。

それだけなら私は彼女に目をかけることなんてなかっただろう。  
だが、彼女は少し違った。

死んでいなかったのだ。

『目』が死んでいなかった。

絶望的な状況であろうとも、燃え上がるような目をしていたので。  
ギラギラと生きる執念を示し、何かを掴みとろうとしている。そんな  
『目』をしていたのだ。

こんな目をしている人間は久方ぶりに会った。私が身を置く裏社  
会ではこのような目をしている者と偶に会う。そして、この目をし  
ている人間は必ずと言っていいほど、何かしらの成功を収めているの  
だ。気がつけば私の口が勝手に開いていた。

「貴方、どうしてここに居るのかしら」

「…誰、貴方」

「質問は質問で返してはいけないわよ。まあ、いいわ。聞き方を変えましょう。何を望んでいるの？」

「——望み？」

消えてしまいそうなほど掠れた小さな声だった。カサカサになっている唇が嫌に目立つ。しかし、私が少女の『望み』を聞いた刹那、彼女の声色が変わった。ただでさえ煌めいていた瞳の炎が更に燃え上がる。紫色がかかった黒の瞳の奥に、確かに揺らめく炎。

その時、私は彼女の紫の炎に魅せられたのだろう。彼女はその幼い姿とは似合わぬ、言葉を紡ぐ。

「殺したい人間がいる。絶望という絶望を味わわせて、地獄の淵に落としたい人間が」

「どうして彼らがあんな目に遭わなければいけなかったんだ」

「どうして？」

「目には目を歯には歯を。死には死を！」

「私はガキで、子供で、脆弱で、脆くて、力がない」

「力が、欲しい」

「欲しい」

「——欲しいー！」

話す内容は支離滅裂。酷いと言いたいようがない。だが、これだけは分かった。これは嘆きだ。力を渴望する嘆き。いや、嘆きというよりもこれは決意だったのかもしれない。明確な殺意を示す叫び。

私はこれを聞いた時、自然と口角が上がるのを感じた。珍しく胸の内からじわじわと湧き上がる、とある感情。どのように表現すればいいのか分からない、複雑な感情が胸の内を占めていた。

（彼女なら組織の心臓を撃ち抜く、『シルバードレット』に、いや、『拳銃』になれるかもしれない）

この少女がシルバードレットになるにはあまりにも荒々しすぎて、似合わない。組織の心臓を撃ち抜く前に自爆してしまうだろう。

だが、『拳銃』なら？　シルバードレットを撃ち出す『道具』である、

『拳銃』ならどうだろうか。弾丸は拳銃なくては決して撃てない。シルバードレットを加速させる、『拳銃』。

ここまでの激情を携える彼女なら、あるいは――。

そこまで考えた後、私は彼女を見た。少女と私の視線が交わる。

「ねえ、貴方。私についてこないかしら。貴方に金を、知識を、人材を、授けてあげる。その代わり、貴方は私の仕事の手伝い――いや、私の『拳銃』になるのよ」

「は?」

「あら、貴方にとって悪くない条件だと思うけれど」

少女はキョトンした顔を晒す。初めて見た年齢相応の顔にクスツと笑ってしまう。

そんな私を見た彼女は視線を彷徨わせていた。恐らく、迷っているのだろう。今の私の格好は明らかに裏社会の人間だから。

でも、彼女は必ず私の手を取る。

例え、騙されようとも、使い捨てられようとも、少女は『それでも構わない』と思うだろう。本懐を遂げるために。その覚悟が既に少女の瞳には宿っていた。

少女は私へ手を伸ばす。そして、こう言った。

「拳銃は嫌だな」

「あら、じゃあ何がいいの?」

「銃剣」

「銃剣、ねえ。どうして?」

「なんとなく。そっちの方がかつこいいから」

「フフ。じゃあ、貴方のことは紫の銃剣（ヴァイオレット・バイオネット）とでも呼びましょうか」

そうして、契約は結ばれたのだ。

当時のことを思い出して、私の顔には自然と笑みが浮かぶ。

ちなみに、その後、少女には様々な知識や技術などを授けた。しかし、残念ながら彼女は凡庸。一生懸命鍛えても、平凡の域を出なかったのだ。一応は平均よりは少し上ではあったが。

（平凡で、凡庸で、凡人だとしても、彼女は成し遂げてみせた）

幾世あやめは旅館という閉鎖空間で完全犯罪をやってみせたのだ。しかも、自分の身の潔白を証明するだけではなく、他の犯人まで仕立て上げたらしい。

会社の同僚を躊躇なく切り捨てた彼女には『よくやった』と言いたくなかった。本人はこれを話している途中、眉を顰めていたが、恐らく、後悔しているのだろう。しかし、あれで彼女の復讐は完遂したはずだ。

「両親を殺害した男を遂に倒せたのね」

彼女には直接そうは言わなかった。だが、帰宅後、ワインを飲みながら、その言葉を発したものだ。

実は、少女を拾った後、彼女について軽く調べた。少女はとあるお屋敷の使用者の子供だったらしい。しかし、ある時、そのお屋敷はパーティー中に火事となった。参加客はなんとか逃亡できたのだが、彼らを逃がすために奮闘した屋敷の主人や使用者の大半が焼死したとか。

それだけなら不運な悲しいお話で終わるだろう。

(だけど、これで終了してしまうならば、『幾世あやめ』という少女はあれ程までに人を恨まない)

あのパーティーの実態は『とある研究結果のお披露目会』である。だが、ただの研究ではない。人体実験といった暗いことに手を出まくっている研究である。パーティーの参加者や屋敷の主人全員、『そういうものばかりしている関係者』だったのだ。

私が断定的ではない言い方ばかりしていた理由はこれである。彼女についての資料があまりに少なかったからなのだ。屋敷の主人の意向により、情報が制限されていた。少女や彼女の家族の写真一つすら残っていなかったくらいである。恐らくは屋敷の主人の研究のせいなのだろう。

そんな薄暗いパーティーの研究結果はそれはもう素晴らしいものであったとか。皆が屋敷の主人を賞賛する中、とある議員の男はそれを妬んだ。

結果、屋敷を燃やすに至ったらしい。

——その議員の男こそが少女の復讐相手であり、彼女が紫の銃剣（ヴァイオレット・ベイオネット）となって殺した奴なのだ。

彼女の復讐はこれにて終了した。しかし、彼女は何故かこの裏社会に居続けているのだ。脱獄した『森谷帝二』という男の『補佐』として。森谷帝二がリーダーとなり、『復讐の手助け』をするビジネスをしているらしい。

全く、変なビジネスをするものだ。恐らく、森谷帝二がまだまだ壊し足りないだけだろう。彼は自分が昔に手掛けた建物が『シンメトリーではない』というだけで爆破しまくった男だ。それ以前にもシンメトリーに拘るあまり、名前まで改名したサイコパス。

初めは、そんな野郎にあの幾世あやめが付いていくとは考えにくかった。確かに彼女は能力としては平均ではある。しかし、決して愚者ではない。小さな子ネズミで、取るに足りない存在ではあるが、必死に爪を研ぎ、ライオンの喉首を掻き切るに至った。そんな彼女が彼の補佐になる？

（少し驚いたけれど…。森谷帝二がしているのは『復讐の手助け』をするビジネス。彼女が彼に付いていっても無理はないか）

まあ、それなら納得がいく。あれ程までに復讐に囚われた人間も中々いないだろう。そんな彼女がする裏社会でのビジネスとしては妥当かもしれない。

（本当の理由を聞くつもりはないけど。それに、彼女との契約で、お互いに干渉しないことも条件の一つだもの）

自分と同じような人間の助けになりたいのか。それとも、私に恩を返すために私のヴァイオレット・ベイオネットとしてあり続けているのか。はたまた裏社会から逃げることに怯え、居続けざるを得ないのかは分からない。それは彼女にしか分からないのだろう。ただ分かるのは彼女の雰囲気やわらかくなったことだけ。あのキラキラした燃え上がるような瞳がなくなってしまった。

（あれではただの一般人でしかないわ…。組織の心臓を撃ち抜く銀色の弾丸を撃つ、『拳銃』にはなれない）

彼女は今のままでも色々使える。だが、能力は平均的だ。寧ろ、

彼女が連れてきた森谷帝二の方が腕は遥かに上である。あの復讐に燃えている『幾世あやめ』でないならば、『拳銃』、いや、『銃剣』にはなり得ないだろう。あの、彼女本来のほんわかした優しげな雰囲気へ戻ってしまつては。

「潮時ね。新たな拳銃でも見つけようかしら」

そう考えて、ホテルの一室で再びベルモットを呷った。——しかし、私はこの考えを改める必要がでてくるのだ。ミステリートレインでの事件後に。

## 其の十一：「ベルモット（下篇）」

「あっはっはっ！ 『これは交渉などではない。強制だ。貴様の立場を弁えろよ？』 こんなことを言われたのは久々よ」

—— だけど、冗談にしては行き過ぎているわね。

私は思わず声を上げて笑ってしまった。自分らしくない大声。まさかこんなことを幾世あやめが言うとは思わなかったのだ。一通り笑った後、スツと表情をなくす。

現在、私は二人の生徒に囲まれている。しかも、拳銃を突きつけられていた。私の目の前にいるのは幾世あやめ。私の後ろにいるのは森谷帝二だ。

どうしてこうなっているのか？ いや、それよりもこの状況を打破しなければいけない。高鳴る鼓動を聞きながら、頭を高速回転させる。

（ミステリートレインでは私の紫の銃剣（ヴァイオレット・ベイオネット）は普通だったはず）

ジンからの頼まれごとの処理をした数日後、私はミステリートレインに乗り込んだ。理由はシェリーを始末するためである。まあ、残念ながら、あのシルバールブレットの坊やに出し抜かれてしまったのだけだ。

そのシェリー捕獲作戦での下準備を幾世あやめに頼んでいた。勿論、彼女にはどんな作戦を練っているかは伝えていない。準備だけだ。

何故、作戦内容を伝えないのか？ 理由は二つある。一つは、前にも言ったように、お互いに干渉しないという契約を結んでいるからだ。

もう一つの理由は、彼女は弟子ではあるが、所詮はただの『道具』だからである。道具を長く使うためには余計な情報を与えない方がいい。

（今回、彼女は私の頼み事を請け負ってくれただけと思っていたけれど…。この様子じゃあ違うみたいね）

私のヴァイオレット・ベイオネットはいつもの優しげな風貌が一変していた。いや、雰囲気自体は変わっていない。前と変わらず、凡人で、平凡で、守られるべき人間の雰囲気を纏っている。決して裏社会の人間などではなく、どこにでもいる一般人にしか見えない。

しかし、目が違うのだ。

彼女は私と会ったばかりの時と同じ目をしていた。目の奥に炎が眩く煌めいているのだ。周りどころか、自分の身すらを燃やしかなない、紫色の炎。

——嫌な予感がする。

今の状況は絶体絶命。しかも、幾世あやめは『あの』目をしている。覚悟の炎が灯った目を。

だが、この程度なら斬り抜けられるだろう。嫌な予感？ それはどうしたというのだ。私を誰だと思っている？ 何十年もこの裏社会を一人で渡り歩いてきた。秘密を着飾り、人々の絶望で輝いてみせた女。それが私。いつ何時、どんな状況であろうと、逃げ出す手段は何通りも確保している。

私は余裕ありげに幾世あやめに微笑んでみせた。

「フフ、随分と大口を叩けるようになったわね。でも、少し行き過ぎよ。そんな悪い子には——消えてもらわなきゃ」

「ベルモット、この状況が分かっているのか？」

「私がこの程度、逃げ切れないと思ってる？」

「貴方ならできるとしようね。逃げたいのなら逃げて構いませんよ」

「あら、逃げてもいいの？」

「ええ。もちろん。貴方の大切なシルバーブレットやエンジェル、後はシェリーのことをバラしても良いのなら」

「——なんですって？」

耳を疑った。どうして彼女がそのことを知っている…？ 私があのクールガイを『シルバーブレット』と呼んでいることはごく一部しか知らないはずだ。しかも、彼の幼馴染の少女の呼び名まで調べられている？

(一体どこから漏れた?)

考えても考えても、情報のルーツが思いつかなかつた。何故ならば、『ありえない』からだ。

確かに私と彼女はお互いの行動を干渉しない契約を結んではいる。だが、私から彼女への情報は完全に制限していた。私が彼女へ恩恵を与えていようと、今のように裏切る場合があるからである。裏社会では裏切りは当たり前。どんな人物でも警戒して然るべきだ。例えば、能力が凡庸な『幾世あやめ』だとしても。

(情報が漏れる可能性は極めて低いはず)

シルバードレットに関する情報は私にとっては重要中の重要だ。あのジンにさえ漏らしていないというのに、何故彼女が知っている?

一体どこから流出した...? 私は彼女への情報制限だけではなく、不自然な動きをしていないかの定期調査までしているのだ。

——— ありえない! 彼女がその情報を知っているなど!

私は私の腕に自信を持っている。重要な情報を『幾世あやめ』程度に知られてしまうへまなんて絶対にしない。だが、実際には私の情報が彼女へ流れている。それは絶対的な事実。逸らすことのできない真実。認めざるをえない現実。思わず内心で舌打ちした。

(『幾世あやめ』は間違いなく私が一から育てたと言うのに...)

拳銃の扱いも、人の騙し方も、変装の仕方も、ありとあらゆるすべてを彼女へ授けた。一番近くで見守り、一番手をかけて育ててやったのだ。

だからこそ分かる。彼女は絶対に私を出し抜けるはずがない。それくらい凡庸だった。それくらい普通だった。とはいえ、私が教えたから一応、彼女は平均より上だが。

しかし、私を上回るはずがないのだ。一番彼女の側にいた私だからこそ知っている。実感している。理解している。10歳からずっと彼女を見守ってきたのだから。

(私は彼女の細かい癖まで全て把握しきっている。どうやって私の深いところまで調べたというの?)

彼女の今の上司である『森谷帝二』を使ったのか? 彼はかなり優

秀であり、能力としては上位だ。彼なら調べ切ることが可能ではある。しかし、可能性としてはかなり低い。『森谷帝二』は優秀だが、経験不足だ。私に勝てる域にはまだ達していない。

そこまで考えて、今の現状に少し疑問を抱いた。

(どうして『森谷帝二』が彼女へ付き従っている…?)

『森谷帝二』がリーダーではなかったのか。先程までの二人の発言や、森谷帝二の幾世あやめに対しての態度がおかしいのだ。まるでリーダーは『森谷帝二』ではなく、『幾世あやめ』かのようなのである。そこまですべて考えて、私は眉をひそめた。

(この二人の上下関係は森谷帝二が上ではない)

幾世あやめだ!

どうして気がつかなかった。どうして『気がつかなかった』? これ程までに近くにいたというのに。これ程までにそばにいたというのに。

いや、それは今、考えることではない。動揺は正常な判断を鈍らせる。ただ頭を動かせ。この場をどう切り抜けるかを。このくらいの危機はいくらでも越えてみせた。策ならまだある。

「随分と面白いことを言うわね。でも、その情報をどこかへ流せばどうなるか分かっているのかしら?」

「私のした『復讐』、貴方風に言うならば『悪事』を世へ晒すだけでもいいのでしょうか。犯人はすでに捕まっているというのに?」

「それだけではなく他にもよ。貴方の復讐は確かに終わった。でも、それ以外にも色々としてきましたでしょうか? 私を舐めないことね」

そう言った瞬間、幾世あやめはキョトンとした間抜けヅラを晒した。突然の表情の変化に私は少々面食らってしまう。彼女がキョトンとする場面などなかったはずだ。そう考えていると幾世あやめはブツブツと下を向いて呟きだす。

そして、彼女は腹を抱えて笑った。

いつも朗らかな笑い声でも、上品な笑い声でもない。狂気を孕んだ笑い声。その声は裏返り、引き攣り、掠れ、酷く醜い。だが、醜いからこそ、どうしようもなく美しくかった。

「何も知らない君のために答えあわせをしようか、ベルモット。私の復讐はまだ終わってなどいないよ」

「…どういふことかしら」

「終わってなどいない。終わってなどいないよ。終わるわけがない！」

「いえ、終わっているはずよ。使用人の両親達が働く屋敷もろとも燃やした議員の男——彼の殺害を完遂できたはず」

「その通り。ふむ、だが、貴方は一つ思い違いをしているようだ」

役者のように手を広げる、『幾世あやめ』。私は何故だか分からないが一步後ろへ足が下がっていた。私の背後にいた森谷帝二の拳銃が髪に触れる。

「一体、どうして、私の両親が屋敷の使用人だと思っていたんだ？」

ヒュツと息を呑んだのは誰だったか。

(私の目の前にいる『女』は『何』?)

一瞬の思考の停止。そして、ジワジワと理解していく彼女の発言。この言葉は脅しでもなんでもないのである。悠然たる事実であると私は理解していた。

彼女は使用人の子供ではないのだ。恐らく、彼女の経歴も、能力も、目的も、全てがフェイク。『幾世あやめ』は全てを偽ってきた。敢えて私と接触し、無能を装ったに違いない。でなければ、説明がつかないのだ。今の状況に。

あれ程近くにいながら、彼女は完璧に無能を演じ切った。たった10歳の少女が！

(あの経歴がフェイクだというのなら、彼女の復讐相手は一体誰だというの)

分からない。これ程までに理解できないと思った人物に出会ったのは二人目だ。一人目——それはもちろん、『シルバートレット』の坊や。

だが、彼とは種類の違う理解のできなさだ。シルバートレットは

『胸が高鳴るような不思議さ』だとすれば、幾世あやめは『背筋が凍るような不思議さ』。同じようで、同じではない。

彼女は何をしようとしている？ 誰を——。そこまで考えて、不意に思い出したのが『ジンからの依頼』だった。

——「最近、俺達のパトロンが死んでいつている。だが、どこかいつもの死とは違う。誰かが糸を引いている——そんな気がしてならねえ。もう一度探せ」

(まさか、)

ゾツと身体の芯から震えた。これ程までに自分の根本が揺れたのはいつぶりだろう。これ程までに頭が真っ白になったのはいつぶりだろう。それくらいに久方ぶりの感覚。久しぶりの『畏れ』。口紅が引かれた唇が小刻みに震えた。

(まさか、あの『首に関する事件』が全て彼女がやったことだとしたら？)

『首に関する事件』は『幾世あやめの復讐が終わった日(仮)』から始まっていたはず。そして、彼女が殺人を行なった旅館事件での被害者達は一様に『首吊り自殺に見せかけた他殺』。しかも、この事件で幾世あやめは他の犯人を仕立て上げ、自分は逃げ果せていた。

もしかしたら。

もしかしたら、ジンの言っていた事件全ての裏に『幾世あやめ』がいるのではないか。

嫌な妄想だった。私や他の組織のもの、警察が『首に関する事件』は調べ切ったはずだ。それなのにもかかわらず、そう考えてしまうなんて。だが、どうしてもそうとしか思えなかった。今の今まで誰にも気がつかれず、私の頭へ拳銃を当てる芸当ができている、彼女ならば。この『幾世あやめ』ならばできるのではないかと。

(幾世あやめは凡人なんかじゃない。ましてや、ただの復讐鬼でもない)

——怪物だ。

『森谷帝二』が『モリアーティ教授』？ 馬鹿を言うな。『幾世あやめ』の方が余程、『モリアーティ教授』ではないか。数多の蜘蛛の糸を張り巡らせ、決して自らは動かぬ、怪物。とんだ犯罪者がいたものだ。

（ああ、そういうこと。だから、私が『幾世あやめ』に契約を持ちかけた時、彼女は『拳銃』ではなく、『銃剣』がいいと言ったのね）

彼女は『弾丸』を加速させるだけの『拳銃』では終わらない。『弾丸』なくてはただのモノに成り下がる『拳銃』などではないのだ。扱い難くとも、その身一つで戦うことのできる、『銃剣』。間違えれば自分すらも怪我しかねない『銃剣』なのだ。

「どうやら私は扱い方を間違ってしまったようね。アヤメの花の装飾がなされた『銃剣』の扱いを」

「うっかり持ち主ごと刺してしまったようだ。我々の『紫の銃剣』は誰にも扱えませんから」

私は肩をすくめる。それを見た森谷帝二は私の後ろで和かにそう言った。その会話を聞いた幾世あやめは嬉しそうに笑う。私のこの発言で、『ベルモット』は自分の傘下へ入ってくれるのだろう』と実感したのだろう。

そう思っていたのだが。

「——この『銃剣』にはアヤメの装飾などないよ。装飾されている花は別の花だ」

・  
・  
・

（ベルモット、マジで怖かった…）

はー…と溜息を吐く。顔が青くなっているのを感じながら、ホテルへと歩いていった。

森谷帝二さんがベルモットへ『傘下へ入れよオラア（要約）』と言い出したときはどうなるかと思ったものだ。何故、森谷帝二さんがこん

なことを言うのか意味が分からなかったし……。その上、どうしてここに彼が居るのかも知らなかったしな！ 森谷帝二さん、勝手に色々行動するのやめて！

(彼とコンビを組んでいる私は否応なしにベルモットに喧嘩を売る羽目になっちゃったからなあ……)

私は『このまま終わらせてしまえばベルモットに殺される！ どうかして彼女を脅さなくては……!』と焦った。それにより、まさかのシェリーやコナンの秘密を暴露。これには流石のベルモットも若干驚いていたものである。この時の私は『これで勝つる!』と調子に乗っていたが、『ちよつと待てよ』と考え直した。

(組織フラグが立ってない?!)

組織でも少数しか知らないことを私が知っているとか色々ヤバイ！ 余計に死亡フラグを乱立させてるよ私!!

それに加えて、ベルモットの『それがどうしたの？ お前がその情報をどこかへ流せばお前の悪事をバラすぞオラア(要約)』な発言。正直に言っている？ 私の命、これで終わりかと思いました。マジで死ぬかと。背中ビッショビッショになっていたから。若干、唇を震わせながら、当時の私は必死に思考した。

(考えろ、考えるんだ！ この危機から脱するアイディアを！)

そう考えた瞬間にベルモットの『貴方の復讐は確かに終わった』という言葉を聞いたのだ。一瞬、何のことか分からなかった。えっ、終わってないけど？ 私、まだまだバリバリ復讐するつもりだけど？

と思ったものである。ベルモットがまさか『幾世あやめの復讐は終わった』私の両親が屋敷の使用者』などと勘違いしているとは夢にも思わなかった。だが、これは私にとって光同然。

(全力でこれをネタに脅す!!)

とんでもない奇跡がやってきた!! 九死に一生を得たとはこのこと!! ベルモットなら私が昔、偶然にもやらかしたことまで全て知っていると思ひ込んでいた。だが、私のやらかしちゃったことを知らず、とんでもない勘違いをしているとは!! 何でこんな勘違いしているかさっぱり分からないけれど!!

随分後の話になるが、この時と昔の私に神がかり的な偶然が起きていた。これに気がつくのはもつと先のことになる。しかし、そんなことを知らない私はただひたすらに自分の運の良さに咽び泣いていた。「はー…早く帰って寝よう」

そう考えて、私は道の角を曲がろうとした瞬間だった。前から来た男へドンつとぶつかってしまったのだ。私は「すみません」と謝るが、当たってきた男はそれをスルー。腹立つな〜と思っていいたら、下にハンカチが落ちていた。仕方なく、それを拾って振り返る。

「ちよつと貴方、ハンカチを落としましたよ……………つてアレ？」

私にぶつかってきた男がもういない。え？ 消えるの早すぎない？ 怖…。少々恐ろしさを感じながら、私はハンカチを見た。

——怪盗キツドマーク入りのハンカチを。

しかも、ご丁寧に『後日伺わせていただきます。怪盗キツド』というメモ入りである。

「……、……、……?!」

数秒の思考停止。その後、私は口をパクパクさせた。ジワジワと胸に湧き上がってくる恐怖。しかし、直ぐにそれへ蓋をする。ありえないと首を振った。いや、まさかこれがキツドからのわけがない。そんなわけがない。どうしてキツドが私へ接触してくるんだ。これはきつとキツドのファンの方が落としただけだろう！ あー嫌だ嫌だ。最近神経質になりすぎ——

——そう思った刹那、ハンカチからポロリと2枚目のメモが落ちた。

私が森谷帝二さんへ渡したはずのメモが落ちたのだ。

「え？ ……えつ？」

震える手でそのメモを掴む。そつ、そんなまさか。私が森谷帝二さんへ渡したメモのわけないじゃん。ありえないありえない……いや、これ、私の字だわ。完全に私の字だわ。間違えようもなく私の字だどうもありがとうございます!!!

(わあああああぎやあああああああああああ  
?!)

どっ、どっ、どっ、どうしよう?! キッドが私の元へ来る?! 何で?!  
っーか、どうして私のメモがキッドへ渡っているんだ?! まさかあの森谷帝二(変装済み)は森谷帝二さんではなかった…? 森谷帝二(変装済み)にキッドが一時的に変装していたとか…? 変装したキッドに私は間違えてメモを渡してしまったのだろうか。だから、事件は原作通りに始まってしまった…? それなら辻褃があう。しかし、どんな偶然だ?! 運が悪いのにも程があるだろう!! 怖いわ!! 私を再びドツと冷や汗を流していた。これからどうするべきかと考えながら。まだ友人の待つホテルへは帰れそうにない。

## 其の十二：「怪盗は微笑む」

(キッドは何で私のところに来るわけ…?)

本当にやめろよ。というか、いつ、どこにくるんだよ…分かんねえよ…怖い…。

とあるカフェのオープンテラスにて、私は内心うんうんと頭を抱えていた。パンケーキを頬張りながら溜息を吐く。

私がかここまで悩んでいる理由はたった一つ。つい二日前にキッドから渡された意味深なカードの所為である。目の前のテーブルにある『後日伺わせていただきます。怪盗キッド』と書かれた紙を見て、頭痛が止まらなかった。

(ベルモットという峠を越えた途端にキッドが来るなんて…。もうやだア…疲れたよオ…復讐だけに頭を悩ませたい…)

頼むからキッドだけは来て欲しくなかった！ 何故なら、あの男は

——『主人公』なのだから。

キッドの出典は『まじっく快斗』。その漫画の主人公がキッドである。そんな彼はある時、『名探偵コナン』へゲストキャラとして登場を果たした。一回程度の登場で終わるはずが、気がつけばコナンの準レギュラー入り。その人気はとどまることを知らず、コナン名義で彼がメインの映画まで何本も制作されている。まるで元からコナンのサブキャラかのようだ。

(コナンではサブキャラ扱いでも、彼の本質は『主人公』)

主人公キャラというのは非常に厄介である。どれほどのピンチが降りかかろうとも、生き残ることができてしまうのだ。形勢逆転なんて当たり前。いや、寧ろ、当然のように『大逆転』や『ギリギリでの生存』ができるから、彼らは『主人公』なのかもしれない。

「は…あのメモを見て、何で『私に会いにくる』って結論に達するんだ…。もしや私の正体を知り、その上で協定を結びたいと思ったとか…?」

ハハッ協定を結ぶのはねーな！

確かにキツドの目標は『前怪盗キツドである父の死の真相究明とその敵討ち』である。しかし、彼は私と同じ復讐者とはいえ、ベクトルが違う。

私は周りから非難されるべき人殺し。まごうとなき人々の敵であり、『悪』だ。それに対して彼は『怪盗紳士』とかいうオシヤレ犯罪者さんである。一線は決して越えない『善』の犯罪者。人を殺さないものと、人を殺すものとは訳が違う。

はー…善の犯罪者が私に一体何の用だ？ キツドの真意が分からないすぎて震えが止まらない。そもそも私が人殺しだつてバレてんのか…？ 天才キツド様ならあり得るぞ。あいつIQ400の化け物だもん。

えっ、私の復讐はこれでジ・エンドだったりする？ キツドって人殺しには容赦ないイメージあるぞ…偏見だけど…。分からないよオ怖いよオ…助けてエ…。

へタレる気持ちを抑えようと、パンケーキを口へ放り込もうとした瞬間だった。

「約束通り、参りましたよ」

——— 耳元で囁くようにキツドの声が聞こえたのだ。

その刹那、私は数秒間停止する。ドツドツドツと心臓が波打つのが分かった。ツウと冷や汗が背筋を流れる。突然の出来事に固まり、唾然と前だけ見つめた。地に足が着かない、グラグラとした感覚が己を支配する。

そして、私は唐突に理解した。

理解せざるを得なかった。

(かつ怪盗キツド…?!?)

な、な、な、何でお前がここにおるんや工藤オ…?! えっ、ちよ、まつ、はア?! 嘘やろ工藤?! せやかて工藤オ?! 混乱しすぎて西の名探偵の迷言が脳内リピートする…! えっ、えっ、えええ?! …… ゆ、夢でも見てんのかな…ハッハッ最近心労が酷いからなア。幻聴でも聞いたんだろ。毎日、悪夢ばかりだし!

私はアメリカン風にH A H A H Aと内心で笑って横を見る。横に

いた男が「失礼しますね」と言いながら、私の前の席へ座った。彼はピツと怪盗キッドのマーク入りのトランプを取り出す。小さなそのマークがやけに大きく見えた。私は思わず素早く視線を下へ下ろす。後悔した。

(夢じゃねえ！ キッドだコレ…。間違いようもなく怪盗キッドだコレ！ どうもありがとうございました！)

なんなの。本当になんなの：?! 突然、来るのやめろよ：! 心の準備ができてねえから！ いや、心の準備ができたとしてもお前とは会いたくねえけど！ ——そうじゃない！ 話が逸れすぎている！ あんまりな現実に思わず別方向へ逃げてしまった！

(動揺を見せてしまえば向こうに主導権を握られてしまう。あくまで余裕たつぷりに振舞わなきゃ)

足ガツクガクに震えてつけどな。キッドにはバレバレかもしれないが、とりあえず『分かってますよ』な雰囲気を出そう。全然理解してねーけど。

私はキッドを見据える。目の前にいるキッドは変装しており、20代後半のサラリーマンのような装いだった。平凡な顔立ちのキッドに違和感を抱きながら、私は口を開く。

「…………どなたでしょう?」

「既に分かっていらつしやるのでしょうか? これを渡しておいて、惚けるのも程々にお願ひ致します。美しい女性にこのような物言いはしたくありませんが…」

渡したつもりはねーんだよ私は！

間違えて森谷帝二さん宛を貴方へ渡してしまっただけなんです！ マジですみません。お引き取りいただけますかね?!

つーかさア、『これを渡しておいて』ってどういうことですか。あのメモには暗号というか、どちらかと言えば合言葉的なモノを書いただけだよ：? どうしてそんな苛立たしく言われなければならないの？ 訳が分からなすぎて恐怖しか覚ええない。マジで震えが止まねえ…。キッドよ頼むから帰ってくれ。

私がガタガタと震えているのが分かったのか、キッドは目を細め

た。彼は少し溜息を吐きながら、ピツとメモを取り出す。それは私が間違えてキッドへ渡してしまったメモだった。

『m・ne : poui』——それがこのメモに書かれていた文字です」

「へえ。それが一体どうしたっていうんでしょう？ ただの文字の羅列ですよ」

「ええ、その通りです。M・neの意味はデンマーク語で『月』。Pou iはデンマークの人名であり、英語のP a u iと同じ意味を持つ。これだけ見ればなんて事のない、ただの単語です」

「はあ…」

何が言いたんだよオメーはよオ！

「ご丁寧にメモに書かれていた文字の訳を説明していくキッド。私的には『それがどうしたの？』なので、眉をひそめた。

ちなみに、このメモの意味は『殺人計画： 中止』である。森谷帝二さんとは暗号の解読方法や合図を常に共有しており、今回の『殺人計画』と『中止』はM・neとPou iだったのだ。

余談だが、この単語を使っている理由は特にない。『意味のない言葉』だからこそ、このメモがもし他者へ渡っても首をかしげるだけで終わるからである。それなのにキッドは何で私の下へ来たんだよ…。もう帰ってくれませんか？ あ、帰りませんよねハイ。クツソ世知辛

い。  
眉をひそめている私を見て、キッドは小さく笑みを浮かべた。そのまま彼は話を続ける。

「使用された暗号形式はアトバシユ暗号とシーザー式暗号」

(あとば……え？ なんて？ シーザーサラダ??)

「暗号形式の特定は実に簡単でしたよ。貴方がメモに書いたクロスマークと、メモの柄である賽のイラストのお陰で」

「はあ」

「アトバシユ暗号は紀元前500年頃に旧約聖書で使用された暗号です。そして、シーザー式暗号は紀元前100年頃に古代ローマ皇帝、ガイウス・ユリウス・カエサルが考案したもの」

「はあ」

「クロスマークが旧約聖書を表しており、賽のメモはカエサルを表しているのでしょう。カエサルは『賽は投げられた』という言葉などで有名ですからね」

「はあ」

ドヤ顔をするキッドに『はあ』としか私は返せなかった。確かに私はメモにクロスマークを書いた記憶がある。だが、一つ言わせてくれ。

(ただ単に！ インクが出るかどうかを！ 確かめただけだよ！)

私はインクが出るかどうかの確認をクロスマークを書いてするんだよ！ そこに意味もクソもねえ!! 難しく考えすぎではありませんか?!

というか、アトなんちやらかんたらとシーザーサラダっていう暗号式って何?! 今まで生きてきた中で聞いたこともないんですが?!

いや、ベルモット先生の授業で聞いたことがあるかもしれないけど！ 忘れているわそんなもん！ それにしてもキッドの知識量が怖いな！ 多分、コナンも同じ知識量を誇っているんだろうな！ もうこの世界から離脱してエー！

内心で泣きそうな私を置いてけぼりにして、キッドは語り続ける。

『m・n e : pou l』の『pou l』をアトバシユ暗号で解くと、『K L F O』になります。アトバシユ暗号は順序を逆にする暗号形式です。英語のアルファベットで例えるなら、A↷Zに1↷26の番号を振り、逆順でZ↷Aにも1↷26の番号を振ります。

アルファベットで2番目の『B』を暗号化すると、逆順で2番目の『Y』へとなる。つまり、暗号を解く場合は、『Y』が書かれていれば、『B』と読めばいい」

私に分かるようにキッドはテーブルへ用紙を置く。そこへ右から順番にa、b、cとアルファベットの表を書いていった。同時に逆順のアルファベットをZ、Y、Xも書いていく。

それを見た私は「ふむふむ」と頷く。全くもって分からないが。

「次に来るのがシーザー式暗号。これは元のアルファベットから文字

を特定の数だけ後にずらして作成する暗号形式です」

「へえ?」

「暗号を作る場合、一つだけズラすなら、『A』から『B』へ。二つなら『C』へ。だからこそ、暗号を解く時、例えば三つズラされている場合は『KL』の答えが『HI』になります」

「成る程ねえ（分からん）」

「それを踏まえて、先程アトバシユ暗号で解いて出た答えの『KLFO』を見てみましょう。これをいくつ戻せばのいいか? 単純明快、二十三です」

「何故?」

「ヒントは『m・ne : poui』の『m・ne (月)』にあります。貴方と出会った時、丁度二十三夜でした。つまり、月が満ち欠けて二十三日目だったということ。『KLFO』を二十三戻すと――

――『NOIR』。フランス語で黒となる。

そうでしょう? 惚けるのがお上手な幾世あやめさん」

だから何言ってるんだお前?!

本当に何の話をしているんだお前…。たった『m・ne : poui』という二つの単語だけでそこまで深読みする…。怖すぎる。そして、最終的に『noir (黒)』って単語が出てきちゃうのも怖い。何なお前。賢いのは痛いほど分かるけど、本当は馬鹿なのかとすら思ってしまうぞ…。オメー今、無駄なこととしてっからな。知識の無駄遣いだぞ…。

唐突の意味不明な彼の謎解き。それを受けて、私は微笑むしかなかった。逃げなかった自分を褒めたい。私の笑みを見たキツドは目を鋭くさせる。

「さて、貴方の上の方には会わせてくださらないのですか?」

(え? 上の方…?)

「このような腕試しまでさせたのですから。私は合格でしょう?」

上なんていねーよ?! 私がリーダーだよ?!

てつきり分かっているとばかり…。態々私に接触してきたんだし

…。えっ何で?! 私が頼りないから『こいつはリーダーじゃねーな』って思われたとか…? なにそれ辛い。

確かに私は頼りないよ! 凡庸な女だよ! だけどここまで全否定はやめろ! 流石に辛い!

(なんかもう…。疲れた…。私に会いたかったんじゃないんだったら、森谷帝二さんに押し付けよ…)

私は内心で頂垂れる。天を仰ぎたい気持ちになった。

はー…もうキツドのことは森谷帝二さんへ丸投げしよう。キツドの正体など諸々は彼へ既に伝えてあるし。適当に処理してくれるだろう。

そう決めた私キツドへ向き合う。そして、再び笑ってみせた。今度は怪しく、妖艶に見えるように。

「歓迎致します——怪盗キツド」

もうどうにでもな—れ!

・  
・  
・

「さて、単刀直入に申します、怪盗キツド。我々の仲間になりませんか?」

某高級ホテルのスイートルーム。その部屋の奥にて、重厚感のある椅子に深く腰掛けた男がうつそりと笑う。足を組み、両肘を肘掛に置く男からは余裕が窺えた。俺は男の顔を見ようと顔を傾けるが、日差しのでよく見えない。しかし、声の質から大体40〜50代程だろうと推測できた。男の言葉を聞いた俺は顎に指を添える。

「この私を仲間か?」

「ええ。かの有名な怪盗キツドが我が組織に協力してくれるとなれば百人力。それに貴方にとっても悪い話ではないでしょう? お父上の仇討ちの為に活動している貴方には特に」

「あなた方の活動理念は『復讐を遂げる』でしたか。確かに仰る通りで

すが…」

このおっさんどこでその情報を仕入れやがった。

俺——怪盗キッドこと黒羽快斗は内心では眉をひそめる。本来ならばキッドとしてこのような場所へ俺が来るはずがない。しかし、行かざるを得なかったのだ。理由は簡単。

現在、この男に脅しをかけられているからである。

数日前、俺は『ミステリー・トレイン』でこの男の部下からとあるメモを渡された。メモの内容は『m・n e : p o u l』。デンマーク語で『月』と『人名のポウル、パウル、ポール』である。そのメモの暗号を解くと、『p o u l』が『n o i r』——フランス語で黒となるのだ。最終的にメモに浮かび上がる文字は、

(『m・n e : n o i r』。月と黒)

『月』は月下の魔術師とも呼ばれる『怪盗キッド』。

『黒』は怪盗キッドの正体である『黒羽快斗』。

この真実に行き着いた刹那、ゾツとした。思わずこの俺がその時ばかりは声を失った程である。誰とも分からぬ存在に俺の正体が知られてしまっている！それがどれほど気味が悪く、どれほど驚いたものか。小刻みにメモを持つ手が震えた。

(おいおい、マジかよ。怪盗キッドは常に驚かせる側だつてのに！)

ギリツと歯を鳴らす。ぐしゃりと自分の髪を握りしめる。睨みつけるようにメモを見ながら、自分が仕出かした失態に悪態を吐いた。『一体どこでバレたのか』——必死に頭を回転させ、あらゆる記憶を引っ張り出し、照合し、このメモの犯人を導き出そうとした。

だが、だが、だが、恐るべきことに『なかった』。なにも、一片たりとも、出てきやしなかったのだ。どんな手を使おうとも、己の協力者の寺井ちゃんに調べてもらおうとも、全く出てこなかったのである。その事実には俺は衝撃を受けた。ゾクゾクつと全身が痺れる。震える唇を噛み締めた。

この俺が！

怪盗キッドが！

——出し抜かれた！

その考えが頭に浮かんだ瞬間、俺はテーブルに自分の手を叩きつけたものだ。バンツと激しくテーブルが揺れた後、怪盗キツドのシルクハットが床へ落ちた。

自分で言うのもなんだが、俺は他の人間よりも抜きん出ている。でなければ親父の後を継ぎ、怪盗キツドとして活動などできるはずがない。そもそも俺が凡人であれば、既に警察にとっつかまっているだろう。華麗に素敵に獲物を攫い、逃げきるためには並大抵のものでは務まらない。

しかし、そんな俺を『誰か』が出しぬきやがった。この俺様に全く悟られないままやってのけちまったのだ。それが何て恐ろしいことか。それが何て驚愕すべきことか。それが何て——  
「おもしれえーじゃねーかよオ……」

心踊ることか……！

これは俺に対する挑戦状だ。『この程度のこと怪盗キツドならやつてのけるだろう？』と。

確かに最大のピンチだ。どうしようもないほどの崖っぷちに立たされている。俺の正体を警察にバラされてしまえば、一卷の終わりだ。全ては無に帰すだろう。

苛立ちはあった。恐ろしさもあるし、気味悪さもあるし、心臓を掴まれるような居心地の悪さもあった。

だが、それ以上に俺は胸を高鳴らせていたのだ。まるであの名探偵と戦ったあの時のような、血が沸き立つ胸の高鳴り。ドクドクと心臓が動く。身体中が沸騰するかのように熱かった。

「これはゲームだ」

そう、これは自分の人生を賭けたゲーム。生と死の瀬戸際のゲームだ。

じわじわと胸にこみ上げる感情に、口角が歪に上がった。喜んでいいのか、怖がっているのか分からない笑みだった。

ああ、これだから嫌になる。俺の目的は親父の仇討ちなのに、こう

いう奴が偶に現れちまうから嫌なんだ。

(だが、悪くはねえな)

さあて、誘いにのってやるか。でなければ『怪盗キッド』の名が廃る。

直ぐに俺はこのメモを渡してきた女性——幾世あやめとコンタクトを取った。この女性と偶然を装って会うのはかなり楽だったものだ。何故ならば、幾世あやめはレストランへ入ると『誰かが邪魔をしないような席』で、尚且つ、『誰かが相席になってもいいような場所』に座ることが多いからだ。

そして、今回もまた。幾世あやめは俺が接触しやすいレストランに入り、人気のないテーブルへ座った。それを見て思わず目を細める。(ホォー、なるほどね。誘ってやがるのか。あのねえちゃんも見かけによらねーな)

幾世あやめ。

調べたところ、彼女はあの名探偵と仲がいいらしい。一般企業に勤め、普通の人生を歩んでいる。だが、過去に火事で両親をなくしており、天涯孤独の身の上という少々痛ましい経歴の持ち主。

どうしてそんな人物が俺にあのメモを渡してきたのかは分からない。恐らくは黒幕の協力者か何かだろう。現に幾世あやめは俺と会話している間、ずっと震えていた。『あの』怪盗キッドと対面しているという現実と重大任務に緊張しているに違いない。

そんな彼女との対面中、幾世あやめは何とかのらりくらりと俺の追及を躲そうとする。若干顔は引きつっていたが。誘ってきたのはそちらだというのに、よくもまあそんな表情ができるものだ。まだまだ一般人の域は出ない素人ということか。

痺れを切らした俺は解読した暗号文を突きつけ、『黒幕を出せ』というようなことを言ってみせた。すると彼女は目を見開き、口をつぐむ。

——次の瞬間、幾世あやめは『笑った』。

妖艶に、不敵に、素敵に、笑ってみせたのだ。今までとは考えつかない程の雰囲気の変化。その笑みを携えたまま彼女は俺へ歓迎の言

葉を発した。少しその変化に驚いたが、瞬きをすると幾世あやめはすぐに元に戻った。それを見て、俺は内心でガシガシと頭をかく。

(まあ、あれぐらゐの笑みができなきや仲介人は務まらねーか)

おーおー怖え怖え。あの名探偵の周りにはおつかねー奴らしかいねーのか。誰よりも真つ先に謎を解き、俺の下へ辿り着く小さな探偵を思い浮かべる。あいつも苦勞してんなあと考えながら溜息を吐いた。

まあ、その考えも黒幕に会った刹那、忘れてしまふけどな。

—— 出会った男は『教授』と自らを名乗った。

紳士的な態度を取っているが、それが逆に胡散臭い。しかも、奴の隣に浦川芹那がいたのだ。警戒するに決まっている。

(『浦川芹那』——彼女は確か殺人容疑で捕まっていたはず)

浦川芹那には銀行員の恋人がいた。しかし、彼女の恋人は銀行強盗犯の手により殺されてしまう。結果、浦川芹那は復讐のために銀行強盗犯数名を殺害したらしい。

(警察に捕まったはずの人間がどうしてここに?)

そう、浦川芹那は捕まった。復讐は完遂することなく終わったはず。今は刑務所にいる……はずなのだ。そんな彼女が何食わぬ顔をしてここにいる。だが、世間はそれを知らない。

ああ、そういえば最近、生き残った強盗犯の一人が自殺したんだっただか。つい最近報道されていたニュースを思い出す。これが意味するものに気がついて、俺は頭が痛くなるのを感じた。

(こりゃあ一筋縄じゃあいかねーな)

奴らは俺の目的を知り、更には正体まで分かっているのだ。俺の命を握られているも同然。圧倒的にこちら側が不利だ。全てが相手の掌の上。自分が転がされていく感覚に舌打ちをこぼしたくなる。

(だが、勝機はある)

奴らは俺に『仲間』になれと言った。この発言には少々耳を疑ったものだ。てつきり真つ向から『利用』してくると思っていた。だが、あ

くまで奴らは俺と対等な関係になりたいらしい。全然対等ではないけどな！裏切れば直ぐに俺を切り捨てるだろう。この組織は世間様に出た殺人犯を簡単に仲間に行っている。生半可な犯罪組織ではない。それくらい普通にやってくれそうだな。

しかし、逆に言えば、裏切らなければ奴らは俺を仲間として末永く扱うに違いない。

怪盗キッドにはそれだけ価値があるのだ。

(そうだな。俺『は』裏切らなければいい)

教授の言葉にのって、仲間になつて差し上げようではないか。仲間として協力しようではないか！なんなら俺の持てる技術を伝授してやってもいい。ああ、そうだな、俺は裏切らない。俺『は』な。完璧に素敵に華麗にお前たちに指示された仕事をしてみせよう。

それを考えた刹那、脳裏にあの小さな探偵の幻影が揺らめいた。

思わず俺は口角を上げる。目の前にいる教授へうやうやしく膝をついた。純白のマントが翻り、床へ落ちる。

「ええ、喜んでその申し出、受けましょう」

この怪盗キッド様がただで転ぶと思うなよ。

——しかし、この時、俺はまだ知らなかったのだ。

この選択の恐ろしさを。

とある一室にて、二人の男が向き合っていた。部屋は闇に支配され、テーブルの上のランプだけが周りを見渡せる唯一の光となっている。闇の中にぼんやりとランプの光が浮かび、二人の顔を照らしていた。

その闇の中で、二人のうち一人が上品に紅茶を啜る。椅子に深く腰掛け、菖蒲と牡丹一華柄のティーカップに口をつけていた。もう一人

はソファアールに軽く座り、短剣の手入れをしている。一通りの手入れが終わったのか、短剣から視線を外した後、口を開いた。

「モリアーティ教授、今日は随分と顔色が悪いようだ」

「……あ、ああ……。久々に恐ろしいと感じましてね……」

「貴方が？」

「私には恐ろしいと思う人間が二人いてね。その一人である女性に改めて恐怖を感じたのです」

「ほオ、どんな女性なんだ？」

「凡庸で、平凡で、平均で、取るに足りない、そんな女性ですよ」

モリアーティ教授と呼ばれた男——森谷帝二は下を向く。紅茶に彼の固い表情が映った。ティーカップは小刻みに揺れ、中の紅茶が波打つ。それを見た短剣の男は不可解だというように片眉を上げた。

「凡庸な女性が怖い？」

「そうです。私も初め、彼女など恐るるに足りぬと思っていました。なんせ彼女は何の力も持たなかった。ありとあらゆる全てが平凡だったのです」

「それが何故、怖いんだ」

「……、……。その通りです。その通りのはずなんです。本来なら『凡庸な女』など怖いはずがない。だが、彼女は凡庸で弱者だからこそ、どうしようもなく、この上なく、

——恐ろしいんだ」

教授の恐怖は本物だった。全身全霊で彼はその『凡庸な女』に怯えていたのだ。そんな彼の姿を初めて見た短剣の男は目を見開く。『プライドが高く、いつも飄々としているあの男が？』とでも言うように。彼は何かを言おうと口を開くも、言葉は発せられることなく終わった。

何故ならば、教授は次の瞬間には元に戻っていたからだ。いつも通りの余裕ありげな笑みに。それを見て、あれが夢だったのかとさえ感じる。しかし、あれは夢ではない。教授の手の震えにより、カップから溢れた紅茶が作った卓上の染み。それがなによりの証拠だったか

らだ。

教授は上品に笑いながら口を開く。

「私のことはさて置き。貴方にはやってもらわねばならないことがあるんですよ」

「教授は人使いが本当に荒い。貴方を脱獄させたのは私だと言うのに」

「それについては感謝しておりますよ。だからこそ、貴方に何度も協力しているではありませんか」

「教授程の頭脳の持ち主は中々いないのでね」

「いえ、私なんぞまだまだですよ。さて、それよりも、あの件についてですが……既に手配できていますよね？　お願い致しますよ。」

——『ジャック・ザ・リッパー』

ジャック・ザ・リッパーと呼ばれた男は小さく笑みを浮かべた。

### 其の十三：「切り裂きジャックとホームズ」

「幾世あやめさん、あの月下の魔術師と手を結ぶことができましたよ。まあ、かなり使い勝手は悪そうですが」

「そうか……………え？」

なんか幻聴が聞こえたんですけど。

えっ？ 本当に幻聴が聞こえたぞ…。あのキッドが私の仲間になったという幻聴が…。ヤバイ、今世の身体はまだ二十代後半なのにもう老化現象が起きているのかな？ うん、うん、これは老化だ。耳が悪くなってきたんだ、きつと。そのせいで幻聴が聞こえてしまったんだね！

内心でハハハハとアメリカンに笑ってみせる。自分を落ち着かせるために唇へティーカップを近づけた。その瞬間、森谷帝二さんが私へ何かを差し出してくる。

「あの怪盗が友好の証として、こちらのトランプを渡してきました」

目に入ったのはキッドマーク入りのジョーカー。

———幻聴じゃなかった！ 本当にキッドが仲間になってらあ！！

右手に握りしめるティーカップがガタガタ震える。顔がヒクヒクと動いた。それをなんとか根性で押さえつけながら、私は心の中で頭を抱える。

（ちよ…待って、本当に待って?!）

なんでキッドお前、私の仲間になってんだ…………?! おかしいだろ…………?! お前は人殺しの仲間にはならないタイプじゃねーか。お前の心の中でどんな化学変化が起きたんだよ…クーリングオフはできないんですか…? 仮にもキッドは別作品の主人公だから、こんなことはいたくないけど…返品したい!! 切実に返品したい…! オメーの協力なんて一番いららないんだけど!! 恐ろしすぎる!! 一体何を考えてんだあの天才…?! やべ、恐怖で鳥肌が…!（もっ、餅つけ私! いや、落ち着け私!）

理由、そう、理由! どうしてこうなったか森谷帝二さんに聞くん

だ！ 私はキッド関連について森谷帝二さんに丸投げしているからな。彼なら全貌を把握しているだろう。理由を聞けば少しは私も落ち着けるはずだ。現実には変わらないけど。

「教授、」

「まさかキッドを味方につけるとは。しかし、少々不可解です。彼が仲間になるのは我々にとって不利になるでしょう。何故、キッドをお選びに？」

「知らねーよ！」

勝手に仲間になってたんだよ!!

心からの叫びだった。思わず私は右手で顔を覆ってしまふ。大きな溜息を吐きたい気分だった。この一連の『キッド仲間入り事件』が不可解すぎて胃痛がしてくる。ああ、胃薬、足りるかなあ……色々と森谷帝二さんにツツコミたいよう……。『キッドを仲間にするか決めたのはお前の判断じゃないの?』とか、『どうして私の判断ということになってんの?』。そもそもどうやってキッドを仲間にしやがった?』とか沢山言いたいことがあるけど……。

だが、仲間になっちゃったもんは仕方がねえ!

「(っーか、今更、キッドに対して『やっぱやめてください』とか言う方が怖い)」

キッドが何してくるか分かんねえからな。もしかしたら何か意図があつて組織に入ったのかもしれないし。キッドを無理に辞めさせたら何か彼からの報復が来そうで怖い。え? キッドは報復なんてしてこない? バツカおまつ、私だぞ?! ただの人殺しの私だぞ?! そんな奴にキッドが慈悲を与えるわけねーよ! ぜってー警察に突き出されるのが関の山! いや、警察ならまだマシかもしれない。東都湾に沈められる可能性がある! あいつ案外えげつねーこととしてくるからな?!

そこまで考えて私は眉間の皺を解す。はあ……と溜息を吐いた。

(キッドの真意がまるで分からないし、森谷帝二さんも意味不明だし、理解不能だらけ……!)

だが、分からないことは分からない。だって、キッドや森谷帝二さ

んが馬鹿正直に答えを言ってくれるとは思わないし。一応、森谷帝二さんは部下だけど、聞けないものは聞けねえ。森谷帝二さん怖いから。私の部下だけど超怖いからな。下手にヘソ曲げられて私の情報を暴露されたら困る。だから諦めよう。この思考を放棄しよう。考えるだけ無意味だ。うん。できるだけ案じるのは止めよう。とりあえず今のところなんとかなっているし。私には他にもやらなきゃいけないことが沢山あるんだから、こんな無駄な思考はしちやいけな。復讐を遂げるためには不要だ。うん、考えないように、考えないように………いや、考えちゃうナー……。あのキツド様は一体何をする気なんだ……マジで怖いよう……ふえええ……。

内心で私は号泣した。しかし、心の中で涙していても森谷帝二さんと対峙している現実是不変ならない。直ちに彼の問いに対して何か答えねばならないのである。タダでさえ私は森谷帝二さんにいつ裏切られるか分からないからな。彼は自分に有意義な人間ではないと思つた瞬間、その人物との縁を躊躇なくぶつた切る男である。そのため、私は彼に対して常に自分の価値を提示し続けなければならないのだ。でなければ死、あるのみ。……今更だけど部下選りミスったかな……。

（幾世あやめ、逆に考えろ。逆に考えるんだ。これはチャンスだと……）理由は知らないけれど、何故か森谷帝二は『私がキッドを仲間にした』と思つているんだ。これを使わない手はない。キッドを仲間にしたことを私の功績にするんだ。未永く彼に私の下で働いてもらうために私を大きく見せる糧とするのである。

私は一旦、手に持つティーカップを机の上に置いた。そして、腕と足を組む。小さく笑みを浮かべながら、口を開いた。

「何故、キッドを選んだのかって？」

「ええ」

「——それは貴方が知る必要のない情報だ」

知る必要のない情報って何だよ私。森谷帝二さんにキッドの件を丸投げしておきながら流石に失礼すぎやしないか。やべえ、自分は何を言っているんだ。森谷帝二の癪に障ったらどうする。『は？ 手

伝ってやってんのにそれ?』などと彼に言われ、殺されたらどうするんだ…。森谷帝二さんは私より能力が遥かに上である。私なんて簡単に殺せてしまうだろう。ああ、発言の訂正をしたい。だが、出来ない。出たものは二度と戻らないからなあ…。私は慌てて言葉を紡いだ。

「ああ、誤解のないように伝えておくが、貴方が劣っているからだとか、貴方を陥れるために言わないわけじゃあない。必要ない、ただそれだけだ」

「……、……なるほどね、『知る必要のない情報』ね」

森谷帝二さんは目を細める。数秒の沈黙した後、納得したかのように頷いた。「貴方が決めたことなら何だって構いませんよ」、そう言うて。

(え、怖…それで納得しちゃうの…?)

森谷帝二さんが最近、意味不明すぎて怖い…。何で納得してんのお前…。意味不明な説明をしておいてなんだけど、びっくりする…。『ベルモット脅迫事件』から彼を理解できない部分が多くなってきたんですが…。ほんと何を考えてんの…。でも、怖くて聞けない。あれ? 一応、私は森谷帝二さんの上司なだけだな? 何故、こんなにも彼を把握してないの…。大丈夫かな? 私、森谷帝二さんに殺されない??

複雑な気持ちになりながらも、とりあえず私はホッと息を吐く。何故だか分からないが、森谷帝二さんは納得しているからいいや。これできっと、彼は私に付いてきてくれるだろうから。そう考えながら、私はゆるりと笑った。

「用件はそれだけか?」

「いえ、まだ後一件あります」

「ほう?」

「切り裂きジャックが動き出したそうですよ。面白いことになりそうです。ホームズと切り裂きジャックのショーを楽しみましょう」

え? ごめん何て??

またもや幻聴が聞こえてきたことに私は頭を抱えた。第二のツツ

コミどころ満載ワードの数々に再び顔が引きつる。そろそろ森谷帝二さんは私と会話のキャッチボールをすべきである。言葉のドツジボールはお呼びでない。

胃がキリキリとするのを感じながら、必死に考え始めるのであった。

「ジャック・ザ・リップパー？」

「何や工藤、知らんのかいな?! 最近、関西中心に著名人ばかり襲つてるあの『切り裂きジャック』やで?! 東京のもんはまだ殺されとらへんとはいえ、まさかお前が知らんなんてなあ…」

「……まあな」

現在、俺は西の高校生探偵、服部平次と米花町を歩いていた。毛利探偵事務所へ帰宅途中、偶然にも服部と道で遭遇した為、こうして言葉を交わしている。

俺、工藤新一こと江戸川コナンは少し間をおいた後に短く返答する。その反応が意外だったのだろう。色黒の青年——服部平次は怪訝そうに片眉を上げた。服部の疑問はよく分かる。俺は幼馴染の蘭にまで『推理オタク』と呼ばれているのだ。そんな奴が日本のニュースを把握していないなど、あり得ないに等しい。

(だけどなあ、今、それどころじゃねーんだよ)

一連の『首』に関する事件の数々。現在の俺はそればかり調べていた。傍から見れば各事件の間には何の繋がりが無いように見える。だが、俺は、俺だけは知っていた。あの事件全てが一つの大きな事件なのだ。非常に綿密で芸術的なまでに美しく、未恐ろしい事件。俺以外は水面下で起こっている事態に気がついていないだろう。俺ですらにも証拠を掴めていないのだ。早く解決しなければとんでもないことになるに違いない。

(チツ、ラチがあかねえ。だが、今の服部に協力してもらおうのも…はあ、何でこういう時に限って問題がどんどん出てくるんだか…)

内心で頭を押さえながら、服部の方へ顔を向ける。すると服部がグリグリと頭を撫でてきた。奴は少々不満そうな表情を浮かべている。「ちゃんと聞いてんのか?? 切り裂きジャックを工藤が知らんっつーことは、や。まーた、別の大きな事件を抱えとるんちやうか?」

「ちよ、頭ぐしやぐしやにするのやめろよ!」

「はっはっ小さいから撫でやすいわ」

「っーか、服部お前、何で東京に来てんだよ」

「和葉が東京のライブ行きたいから付いてきてくれてって言われたんや。でも、俺は興味なくてなあ…。そんでお前のところに来てんや」

「来るなら連絡してこいよ」

「おーすまんすまん。携帯は壊れとつてな。今から別の番号渡すわ」  
「そうかよ」

俺がそう言った瞬間だった。きやあああああと甲高い悲鳴が響き渡ったのは。

俺と服部は顔を見合わせる。その後、直ぐに走り出した。悲鳴が上がった路地裏へ走ると、一瞬だけ逃げ行く誰かのジャケツト裾が視界に入る。どうやらジャケツトの持ち主は裏路地を左へと曲がったらしい。それと同時に地面へ倒れている女性も眼に映る。女性は喉を掻き切られており、新鮮な血が止めどなく流れ続けていた。

(どうする…どうする?! 犯人を追わなきゃいけないが、女性を放置するわけにもいかねえ。だが、かといって…)

そこまで考えて、俺は思考を止める。いや、そんなことを言っている場合じゃねえだろ俺! 人命第一だ。

俺は服部に「犯人を追ってくれ」と叫ぶ。それを聞いた服部が「よっしや、まかせとけ!」と犯人が消えていった方面へ駆け出した。その姿を見送った後、俺は救急車と警察を電話で呼ぶ。そして、女性へ応急手当てを始めた。その刹那、俺はハッと気がつく。

(また首に関する事件じゃねーか!)

まさかこの事件も関係があるのか…? だが、こんな通り魔のよう

な例は初めて見た。いつもなら綿密なトリックが仕込まれている『事件』だというのに。もしかや今回は趣向を変えてきた？ いや、本当に別件という可能性もある。安易に一連の首事件に繋げるのは得策ではない。

(けど、関係あるんじゃないかねーかどうしても思っちゃまうな…)

頭から離れないあの事件に苦い気持ちになった。なんとかその考えを振り払い、俺は女性の手当てを終える。その時、救急車よりも早くパトカーが到着した。ものの数分で到着した警察に驚く。流石にこんなに早く来るとは思わなかった俺は慌ててそちらを見る。すると目暮警部が慌てたようにパトカーから降りてきた。彼は俺と死にかけの女性を見た瞬間、目を見開く。

「コナン君?! どうしてここに…?」

「え? 目暮警部は僕の通報を聞いてこっちにきたんじゃないの?!」

「いや、ジャック・ザ・リッパーと名乗る者から『女を殺した。添付している地図に死体がある。次は工藤新一だ』という手紙が届いてな。指定した場所に來たら君とその女性がいたんだ」

ジャック・ザ・リッパー?!

どうして奴の名前が今でてくる?! 関西中心に活動していたんじゃないなかったのか? しかも、俺を狙っているだど? どういうことだ。

出口のない迷路を歩くかのように俺はぐるぐると脳内で彷徨い続ける。終わりのない思考を続けている間に救急車が到着。女性が運ばれて行った。それと同時に服部が俺の下へ戻ってくる。服部は「あかん。見失ってしまってたわ」と悔しそうな顔をしていた。その姿を見て、俺は眉をひそめる。

(これは難事件になるかもしれねえ…。とりあえず、『首』に関する事件については一旦おいておこう。余計な思考は推理が鈍っちゃまう。今だけは『ジャック・ザ・リッパー』とやらに集中しようじゃねーか)

——その決意はあっさりと砕け散る。

何故ならば俺はこの事件を簡単に解決してしまっただからだ。

犯人は路地裏で殺害された女性の恋人だった。つまり、この事件は

ただ単に痴情のもつれの延長だったのである。『また』犯人があつさりと捕まった。まるでいつもの『一連の首事件』と一緒に。だが、一緒のようで全く同じではなかった。

(……この事件は杜撰すぎる)

いつもの『一連の首事件』と比べて些か事件のトリックが簡単すぎたのだ。しかも、『黒幕がいるのではないか』と匂わせるものが登場する始末。極めつけは犯人からのあの発言——目暮警部が犯人に対して「君がジャック・ザ・リッパーか？ ああ『女を殺した。添付している地図に死体がある。次は工藤新一だ』という手紙を送ってきた人間なのか」と聞くと、犯人は「なんだそれ、僕は知らないぞ！」と言ったのである。その発言により『この事件には裏がある』と誰もが思っただろう。誰もが再調査を検討しただろう。これにより目暮警部は目を鋭くさせ、一層調査に力を入れる結果となったのだから。

(いつもの『一連の首事件』の犯人ならば「真犯人がいる」などと外部に漏らすはずがない)

そう、それこそが俺が切り裂きジャック事件の犯人と一連の首事件を同一視しない理由だった。もしもこの切り裂きジャックが本当にいつもの首事件の犯人なら、『黒幕がいる』ということすら周りに気がつかせないはずだ。いや、気がつかせないのではない、『犯人は1人である』という事実しか作らないのである。そんな奴が黒幕を匂わせる真似なんてしないだろう。

そう考えながら、俺と服部は深夜の駅のホームで電車を待つ。誰もいない静かなホームで俺はため息を吐いた。ジャック・ザ・リッパー事件を解決している間にこんな時間になってしまったのだ。早く帰らないとおっちゃんに怒られちまう——と服部に愚痴ろうとしたその時だった。

背中にナイフが添えられたのは。

俺は動揺せず ゆっくりと手をあげる。そのままの体勢で静かに頭を後ろに向け、口を開いた。

「なんの真似だ服部、いや、

ジャック・ザ・リッパー」

ジャック・ザ・リッパーと呼ばれた『服部平次』は口角を上げる。次の瞬間、彼は本当の服部平次ならば絶対にしないような歪な表情を浮かべた。『服部平次』、いや、ジャック・ザ・リッパーはナイフの先を俺につけたまま話し始める。

「なんだ、分かっていったのか」

「バーロー、オメエは杜撰すぎたんだよ。しかも、何だあれば。別の人間が犯した殺人をまるで『自分が殺した』みてえに言いやがって。大方、オメエがああ男性をそそのかして、女性を殺害するように仕向けたんだろ？」

「その通り。あの馬鹿男が女を殺害する日に合わせて警察へ予告状を送ってやったんだ」

「何でそんなことを…」

「だって似ているだろう？」

「は、何を言って…」

「君が追っている『一連の首事件』に。なあ、ホームズ？」

その言葉を聞いた瞬間、俺は大きく目を見開く。俺の後ろでナイフを握るジャック・ザ・リッパーを食い入るように見つめた。

(確かに似ていると思った)

先程述べたように、この事件と一連の首事件は似ていた。別に真犯人がいることも、被害者の死因が首に関することも。だが、俺は似ているようで全く別物の事件と判断していた。何故なら、この事件が杜撰すぎたからだ。

(しかし、この事件が一連の首事件を模倣したものであったのなら話が違ってくる)

どうしてジャック・ザ・リッパーは一連の首事件について把握している？ 俺と同じように事件の黒幕に自分自身で気がついたのか、それとも、黒幕と何か関係があるのか。可能性としては後者の方が高いだろう。恐らくジャック・ザ・リッパーと黒幕が協力関係なのではないだろうか。なんせあの一連の首事件の犯人は極めて知能の高い人間であり、今の今まで俺にしかその存在を気づかれていないような人物なのだから。

だが、もしジャック・ザ・リッパーが『奴』の協力者だとして、どうして黒幕はこんな行動を切り裂きジャックにさせた？ 今の今まで水面下でしか行動していなかった、あの黒幕が？ 何故、何故、何故？ 考えろ、考えるんだ、工藤新一！

脂汗が滲むほどに俺は思考をし始める。それを見たジャック・ザ・リッパーは目を細めた。

「ようやく表情が変わったな、工藤新一」

「何故、お前がああ的事件について知っている？ しかも、俺の本当の名前まで！」

「私がああ的事件や君について知っているのは奴の協力者だからかな」

「奴…？ 一体、一体、そいつは何者なんだ…?!」

「それは君が解くべき謎さ、ホームズ。ただ一つ言えることは、そうだなア。」

——モリアーティが動いている、ただそれだけのこと」

『モリアーティ』というワードにブワツと全身の血が騒ぐのが分かった。ツウと額から汗が流れ落ちる。唇が微かに震え、形容しがたい複雑な感情が俺の胸を締め付けた。

（二度目だ。『モリアーティ』が表に出てきたのはこれで二度目）

俺がイギリスへ行った時に遭遇した『モリアーティ教授』。ずっと追いかけてきたその名前がようやく俺の前に姿を現した。やはり俺は間違えていなかったんだ！ イギリスで起きたハーデスによる事件も、今まで追いかけて来た首に関する一連の事件も、今回のジャック・ザ・リッパーの登場も、全て同一犯によるもの。全てが——モリアーティ教授がやってのけたことなのだ。その事実には自分の胸が高鳴るのが分かった。

（しかし、少し気になるな…。何故、モリアーティはこうして俺の下へ自分の協力者をわざわざ送った？ 考えられるのは『何か』、何かがあつて送らざるを得なくなった…：そうに違いはない）

その『何か』が分かれば、きつと俺はモリアーティに追いつける。ただの幻想であつた人間を現実にすることが出来る！ 真実を白日の下へ晒せるのだ！

俺は乾いた唇をペロリと舐めた。視線を切り裂きジャックへ向けると、彼はつまらなさそうな顔をしているではないか。当てが外れた、そんな顔をしていたのだ。彼は大きくため息を吐いた。

「君はモリアーティに相応しくないね。奴が一層目をかけているというからこうして協力したというのに」

「それだけのために人を殺したっていうのか…?!」

「ああ、そうさ！ 他にも理由はあるが一番の大きな理由はそれだ。はーあ、君はホームズには成れそうにないな。この会話で確信した。今回の通り魔事件で私の正体に気がついたのも、きつと最終場面だろう？ 君があまりに気がつかないからヒントを沢山出していたからね」

「何を言っているんだ？」

「何って、君があまりに鈍感過ぎるってことを…」

「俺がずっとオメーに気がついていないと、どうしてそう思っていた？」

「——何？」

「気がついていたさ、最初から」

俺は不敵に笑ってみせた。その瞬間、俺たちの横で電車が通過して強風が吹き荒れる。髪と服が盛大に揺れる様子を見ながら、切り裂きジャックはキョトンとした顔を晒した。数秒間、何度か口を開閉させた後、耐えきれないというように吹き出す。彼は『服部平次』には到底できないような狂った表情を浮かべていた。引きつった笑い声が誰もいない駅のホームに響き渡る。ジャック・ザ・リッパーは笑いながら「最初から？ まさか！ 大ボラを吹くのも大概にしなよ」と馬鹿にしたように俺へと言葉を投げかけてきた。俺はそれを無視して話し出す。

「知っているか、服部は剣道の達人なんだよ」

「それがどうかしたのかい？」

「服部は長年剣道をしているが故に、手に剣道経験者特有の手まめがあるんだよ。しかも、一朝一夕で出来ないような豆がな！」

「——!!」

「オメーが俺に接触して来た時、手を上げて会釈してきただろ？ その瞬間、気がついたぜ。オメーが『服部平次』じゃないことだつてぐらいな」

「……これは驚いた。君は本当に最初から私が偽者だと気がついていたのか。そして、君は私をずっと監視していたのかな…？ ああ、だから『犯人を追いかけるか、女性を手当するか』で犯人を追いかけなかったのか。私から女性を守る為に」

「それだけじゃないぜ」

「何？」

「どうして俺が今、お前と2人つきりでいると思う？」

「まさか…ッ?!」

ジャック・ザ・リツパーが驚愕で目を見開いた時、駅のホームの上空からザザザザと風を切るような音がした。切り裂きジャックは弾かれたように顔を上へ上げる。するとそこには警察用ヘリがいるではないか。パツとヘリからライトが点灯してジャック・ザ・リツパーを照らし出す。

《いきました！ 服部平次に変装中のジャック・ザ・リツパーです！》

《流石工藤君だな！ ……コナン君を早急に保護したのち、ジャック・ザ・リツパーを捕獲せよ！》

目暮警部の声がヘリから響いたと思うと、駅のホームの階段から警察が降りてくる音がした。それを聞いたジャック・ザ・リツパーは自分の手を額に当てる。そして、おかしくて仕方がないというように口角を上げた。

「……ふはは、これは一本取られたな。モリアーティの目に狂いはなかったわけだ。訂正しよう、工藤新一。君はホームズに相応しい」  
「別にそんな称号はいらねーよ。それよりもお前には沢山聞きたいことがある。檻の中で根掘り葉掘り聞いてやるから、覚悟しろ」

「それは是非ともご遠慮願いたいね。そろそろ帰るとするか」

「帰る…?」

俺が首を傾げた時、視界の端からザツと何か白いものが高速で過ぎ去った。そして次の瞬間、ジャック・ザ・リツパーが俺の目の前から

消えてしまったのだ。俺はギョッしながら慌ててジャック・ザ・リッパーを探すと、奴は上空にいた。しかも——怪盗キッドと一緒に。俺は唾然とした表情を浮かべる。

(な、なんで、何でキッドが人殺しと一緒にいるんだ?!)

ジャック・ザ・リッパーはキッドに抱えられ、空をキッドのハングライダーで飛んでいた。その事実には柄にもなく動揺してしまう。残念ながらキッドの表情はシルクハットに隠れて見えなかった。俺が驚愕で思考が一瞬停止した時、切り裂きジャックが大声を上げた。

「開幕ベルは既に鳴った！ ホームズ、君の喜劇を楽しみにしている！」

そう言っつて、段々と小さくなっていく2人を俺は何も出来ずに見送る羽目になった。冷たい風が俺へと吹き付ける。焦ったように2人を追いかけてようとする警察用ヘリの音をBGMにしながら、俺は顎へ手を当てた。

(開幕ベルは既に鳴った…？ 何が始まるっていうんだ…？)

この一連の首事件は謎ばかりだ。どうしてキッドまでがこちら側についているのか、ジャック・ザ・リッパーが何故俺に接触してきたのか、そもそも黒幕の思惑は何なのか、疑問しかない。だが、だが——必ず解いてみせる。俺は名探偵江戸川コナンなのだから。

「待つてろよオ！」

だから、江戸川コナンは笑うのだ。倒すべきまだ見ぬ宿敵——モリアーティに対して。

・  
・  
・

「えつと…え？ その…あれは…何？」

私、幾世あやめは望遠鏡と盗聴器を片手に持ちながら超絶困惑していた。それもこれもジャック・ザ・リッパーと江戸川コナンの対談のせいである。

「一連の首事件」とか「モリアーティが動いている」とか色々ツッコミたいワードだらけなんだけど…」

その：「一連の首事件」って何？ 私が起こした事件や不本意で起きちゃった事件のこと言ってるの？ 確かに私が関わった事件の殆どは偶然首に関するものばかりになっていたような気がする。…うん？ 改めて考えてみると首に関係しない事件は一、二件ぐらいだったな…えっ、マジで？ 『首に関係している』という偶然の事実からあのコナンは同一犯の仕業だと気がついたの？ 多分、奴のことだからそれだけではないと思うけど…怖っ！ 気がつくの早ッ！ もつと私頑張らないとそろそろあの死神は更に真実に近づくぞ！ これだからコナンは嫌なんだよ！ 怖すぎる！

（しかも、モリアーティって何だよ?! どうしてジャック・ザ・リッパリーという男がそれを語ってるの?!）

まさか私のことを言っているんじゃないよね…？ 違うよね?! 私はあのジャック・ザ・リッパリーと対面したことないから、彼が幾世あやめを知っているはずがない。…そうだよ。森谷帝二さんのことを言っているんだよ。それはそれで問題だけど…ふえええ…怖すぎ…何で切り裂きジャックは「開幕ベルは鳴った」とかドヤ顔で言ってるんだよ…。開幕ベル何で鳴ってるんだよ…。

これだけでキャパシティオーバーなのにキッドまでもが登場してくんの本当にやめてほしい。胃が痛くなるから。何でお前も登場してんだよ。やめろよ。喧嘩売ってるのか。理由が分からなすぎて怖い。

（一番意味が分からないのは森谷帝二さんだけだな！）

私に望遠鏡と盗聴器を渡してきただけでなく、コナンとジャック・ザ・リッパリーの対談がよく見えるホテルの手配をしたのは森谷帝二さんである。本当にあの人は何を考えているんだ。私を世間の目に晒すような真似をして！ 何をしたのか分かっているのか。ぶんぶんと怒りたい気分だが、森谷帝二さんが怖いので出来ないジレンマな。もう森谷帝二さんやだア…そう思った瞬間だった。

私の背後で爆破音がしたのは。

バババババという爆破音に私はギョツとしながら後ろを振り向く。何があつたんだ?! と驚いていると、森谷帝二さんが爆心地の床へとぶつ倒れているのを発見した。

(森谷帝二さああああああん?!)

アイヤアアアアアア何で?! 森谷帝二さんナンデ?! 何で倒れてんのお前?! つーか、どうして爆破音がしたんだ?!

慌てて森谷帝二さんの近くまで駆け寄るとそこには大量の爆竹があるではないか。その瞬間、ハッと私は気がつく。

(そういえば私、さつき遊びでボタン式爆竹を作ってたな!)

森谷帝二さんが指定したホテルに着いたのはいいが、何をすればいいのか分からなくて暇を持て余していた時のことだ。何を思ったのか、その時の私は持参していた爆竹で遊び始めたのである。結果、ボタン一つで発動する爆竹を作成することとなった。しかし、まあ、その遊びもコナンの登場で直ぐにほっぽりだす羽目になったけどな!

(すっかり爆竹のことなんて忘れていたけど……まさか床に落ちたボタン式爆竹を森谷帝二さん……踏んだ……?)

だって森谷帝二さんのズボンの裾が若干焦げてるもん!! ついでにボタン式爆竹のボタンが森谷帝二さんの足元に転がってるもん!! 完全に森谷帝二さんボタン式爆竹を踏んでいるよ!! ぎやああああああ森谷帝二さんごつつつつつめん!! 謝るから殺さないで!!

焦って森谷帝二さんを助けようとした私は忘れていた。今日の私は慣れないピンヒールを履いていたことに。それを私はすっかり忘れていたのだ。その結果が——これである。

あろうことか、誤って森谷帝二さんの頭部をピンヒールで踏んでしまったのだ!

(ああああああああああああああああああ!!)

私の絶叫が内心で響き渡った。

其の十四：「森谷帝二はシンメトリーがお好き」

(頭が、痛い)

それはそうだろう。なんたって今、私は幾世あやめに頭部を足で踏みつけられているのだから。しかも、ピンヒールで、だ。これがアブナイ趣味の方々なら喜んだのだろうが、残念ながら自分にはそういう趣味はない。ただ屈辱や苦痛といったものしか感じなかった。

何故こうなっているのか？ 理由は簡単だ。

——私、森谷帝二は先程、幾世あやめを殺そうとしていたからだ。

幾世あやめがウキウキと江戸川コナンとジャック・ザ・リップターの対面を見ている時に私はゆっくりと彼女に近づいた。殺してやろうと、幾世あやめを絶対に殺すと、そう思っていたのである。しかし、拳銃の引き金を引こうとした瞬間、その目論見は全て無に帰してしまった。

(殺せると思った。幾世あやめを殺せると確信した。なのに何故だ：何故なのだ)

何故、私は地べたに這いつくばっている？

純粹な疑問だった。幾世あやめは凡庸で、凡人で、取るに足りない人物だ。常に彼女と共にいた私だからこそ分かる。幾世あやめは取り立ててこれといった能力はなく、普通の人間であると。

——しかし、今、私が彼女に頭を踏みつけられている現実が幾世あやめは凡人であるという事実を壊していた。

矛盾だ。これはどうしようもなく矛盾している。美しくない。シンメトリーではない。認められない。認められるものか。このような平凡な顔立ちで、周りがあつと驚く頭脳もなく、才能のかけらもない、幾世あやめなんぞに。私、森谷帝二がこうべを垂れるなど。もしもこれが工藤新一のような才能に溢れた人物ならまだ分かる。だが、どうして私は凡庸なはずの幾世あやめにいつも敗北するというのだ？

(幾世あやめはいつだって矛盾に満ちている)

どう考えても、どう見ても彼女は凡人の域をでない。ベルモットから訓練を受けていた時に何度か彼女に手本を見せてもらったことがあるが、どの技術に関して平均より少し上程度でしかなかった。そんな人物が犯罪を犯せば、簡単に捕まると思うだろう。しかし、既に幾世あやめは2桁に及ぶ人間の殺害に成功していた。しかも、誰にも気がつかれずに。

(理解できない。幾世あやめという女が理解できない……)

いつからだろう。幾世あやめが恐ろしいと感じたのは。初対面の時は何も思わなかったというのに。いや、『何も思わない』という感情すら抱かなかったかもしれない。彼女と出会った当初は、あまりにもどうでもよ過ぎて、名前や顔も覚えていなかったのだから。一応、自分のパトロンとしては認識していたが。つまるところ、あの時の森谷帝二にとって彼女はいてもいなくても良い存在だったのだ。

その認識が変わったのはいつなのだろう。

ああ、それは多分、あの時だ。幾世あやめへ『借り』を返すため、彼女に協力する事になった時。あの時、私は幾世あやめが犯罪者として活動している理由と、復讐対象を伝えられた。彼女が復讐を志した理由は陳腐で、ありきたり。そもそも幾世あやめに興味のかけらもなかった私は『ふうん、そうか』程度にしかなかったもの。しかし、一点だけ、私の興味を引いたものがあつた。

復讐対象者の多さだ。

死にかけの老人から十に満たないような子供まで、殺害対象としてリストに載っていたのだから。いつもの私なら何も言わずにそのままにしていただろう。だが、その時の私は何故か彼女へ質問していた。「どうしてこうも人数が多いのか」と。それを聞いた幾世あやめはキョトンとした間抜け顔をする。彼女は幾つかバツマークが既についたリストに視線を戻した後、静かに口を開いた。

「全部殺さなきゃ意味がないだろう?」

「全部?」

「そう、全部だよ、全部殺すんだ。本人だけじゃなく、そいつの子供、伴侶、親、兄弟、孫、祖父母、叔父や叔母などに至るまで——具

体的には…そうだな、三親等内の人間は全て殺すんだ」

「それはそれは随分と…」

「過激だと？　だが、先にそうしたのはあいつらの方なのだから」

そう話す幾世あやめからはこれっぽちも脅威を感じなかった。

一片たりとも、微塵たりとも、感じなかったのだ。

彼女はこれ以上なく過激で、道徳に反する言葉を口にしてしている。しかも、幾世あやめはそこそこの量の人間を既に殺しまくっていたのだ。

それなのに。

それなのにも関わらず、幾世あやめの口から零れ落ちる言葉は恐ろしいとは感じなかった。

普通の殺人者ならば、必ず何かしらの違和感や恐ろしさがあるはずだ。まあ、殺人者に普通もクソもないだろうが———これだけは言える。人を殺したものとそうでない者の言葉の重みは違うはずなのだ。幾世あやめのようにここまで計画的に殺人を犯す犯罪者が、先程、彼女が口にしたような言葉を話せばどんな人間だって震え上がるに違いない。だが、幾世あやめは平和ボケした一般人にしか見えなかった。

(今まで出会ったことのないタイプの人間だ)

私は「ふむ」と頷きつつ、目を細める。自分の視界に凡庸な顔立ちの幾世あやめがスウと自然に入ってきた。私は彼女に対して「全員殺すとなれば骨が折れますね」と簡潔に述べてみせる。すると幾世あやめは小さく笑った。「確かにその通りだ」と言いながら。彼女の紫がかった黒い瞳が印象的だと思ったものだ。

この時、ようやく私は『幾世あやめ』の顔と名前を覚えた。平凡で、だが、少し風変わりな彼女を1人の人間として認識するようになったのである。

こうして彼女という存在を認めてから、私は幾世あやめの歪さを少しずつ感じるようになっていった。一番歪さを感じた一つは、『幾世あやめが知り得ないはずの情報を知っている』ことである。

例えば、キッドの正体。ティータイム中に突然、幾世あやめが「キッ

ドの正体は黒羽快斗だ。よろしく頼む」と言い出した時は何を言っているのだろうかと思つたものだ。不審に思いながらも調べてみると、キッドと黒羽快斗の身体情報が全て一致。キッド＝黒羽快斗を認めざるを得ない事態となつた。

例えば、とある大型国際犯罪シンジケートの幹部構成員の全貌。通称『黒の組織』と呼ばれるその組織。そこで諜報活動しているNOCやら、幹部達の容姿の詳細やらを幾世あやめは世間話の中で伝えてきたのである。流石にこれは冗談だろうと考えたが、調査の結果、それは本当だと確信した。しかも、あの『先生』がその組織の幹部、ベルモットだったのである。幾世あやめの紹介で知り合い、犯罪のいろはを教えてもらったあの『先生』が。これには私も頭が痛くなる思いをしたものだ。

(あの女、一体何者だ)

知れば知るほど、幾世あやめの矛盾が浮かびあがってくる。先程も述べたように、彼女は凡人だ。凡庸な女性だ。例え、復讐を志し、人を殺していようと、驚くくらいに普通だつた。能力も、雰囲気も、幾世あやめを構成する全てが。だからこそ、『気持ち悪い』と思つたのだ。彼女が本来ならば入手できないような情報を知っていることが。また、秀でた能力もないのにここまで犯罪を犯せていることも気持ち悪いと思う要因の一つだつた。彼女は今の今まで自分という存在を誰にも気が付かれずに完全犯罪を成功させている。普通の、どこにもいるような女性が！これが気持ち悪いと言わずに何と言うというのだ。その上、幾世あやめとくれば、トリックの詳細を聞いても、「偶然こうなつた」としか言わないのだ。こんな偶然あつてたまるか！余計に気味が悪く、気持ち悪い。

どうあがいても、どうやっても、あの『幾世あやめ』にできるはずがない。

できるはずがないのに、できてしまつていふという『矛盾』。  
(美しくない。シンメトリーじゃない。矛盾している人間など)

私、森谷帝二はシンメトリーが好きだ。シンメトリーこそが私の美学。それ故、シンメトリー以外は認められない。左右対称でなけれ

ば、それは『美』ではないのだ。だからこそ、幾世あやめは『美しくない』。悪ならば、純粋な悪であるべきだ。誰も知りえないような情報を知っている人間は、天才であるべきだ。怪物じみた犯罪を犯す者は、本物の怪物であるべきだ。なんて、なんて、『幾世あやめ』は不気味で、薄気味悪く、美しくないのだろう。

初めて幾世あやめに抱いた強い感情は『嫌悪』だった。

それからというもの、私は幾世あやめを注意深く観察するようになったのである。幾世あやめの本質を知るために、私ができることから何だつてやってみせた。彼女が私を『モリアーティ教授』と呼び、その役を演じろと言うならば、演じてみせた。幾世あやめが『弱者を集め、駒にする組織』を作った時だつて、組織の顔役になつてやった。全ては、彼女を油断させ、あの女の中身をさらけ出すために。

(それなのにまだ私は彼女の本質を理解できていない)

それどころか、幾世あやめが何故、私を『モリアーティ教授』と扱うのかも未だに理解できていなかった。彼女を探るために不必要に幾世あやめを持ち上げて、「私はモリアーティ教授には向いていない。貴方こそがモリアーティだ」などと言ったこともあるが、これといった反応を得ることはできなかったのである。まあ、その程度で分かつてしまうのなら、おもしろくはないのだが。

「このままでは駄目だ。幾世あやめの本質を知るためには、もっと別の方法が必要……」

だからこそ、私はあの時、幾世あやめを危機的状況に陥らせた。あの時——幾世あやめが目の前にいる場面で、ベルモットに拳銃を突きつけてやったのだ。

まあ、実を言うと、別の方法で幾世あやめを追い詰めようとしていたのだが、偶然にも彼女はベルモットが取引場所として選んだ公衆便所へ入ってくれたのである。この好機を逃がしてはならないと思つた。結果、私は幾世あやめに気を取られているベルモットへ拳銃を突きつけることに成功した。

(さあ、どうする？ 幾世あやめ)

私がベルモットに拳銃を突きつけたとなれば、『先生』は必ず幾世あ

やめを排除しようとするだろう。なんせ、私と幾世あやめは常に一緒にいるおかげでベルモットからは同一グループとして扱われている。それ故に私、森谷帝二がベルモットへ拳銃を突きつけることは『幾世あやめはベルモットに敵対している』と言っているのも同然になるのだ。まあ、一応、『ベルモットと交渉しにきた』という体をとつてはいるが、ベルモットも交渉などとは思っていないだろう。

私がベルモットに拳銃を向けた時、幾世あやめは目を見開く。慌てて否定しようとする彼女を遮り、後に引けなくなるよう私はベルモットに対して『交渉にしきたんですよ』と言った。それを聞いた幾世あやめは何度か口を開き、そして次の瞬間、

—— 『笑った』。

いつも通りの凡庸で、普通で、平凡な笑みで。日常の中で友人に無茶振りをされた時に浮かべる、困ったような笑みだったのだ。その笑みを見て、何故だか分からないが自分の手が震えた。

(なん、なんだ、こいつは、この、女は、)

幾世あやめがベルモットと交渉する声が遠くに聞こえる。急速に身体が冷えていった。その感覚に戸惑いながら、私は一つだけ自覚せざるを得なかった。

私は今、幾世あやめに恐怖したのだということ。

あり得ない。あり得るはずがない。この私が、日本有数の名門大学の教授まで務めた私が、あの平凡な『幾世あやめ』なんぞを恐れたことなど。なんの取り柄もなく、技術も凡庸である、彼女などに。

だが、私の拳銃を持っていない方の手が小刻みに揺れてしまっている。なんとか震えを止めようとするが、全く止まらなかった。それが『森谷帝二は幾世あやめを恐れている』という幻想を現実にしてしまう。ベルモットと幾世あやめには分からないよう、私は小さく唇を噛みしめた。

(……私は、森谷帝二は、幾世あやめという凡人が怖いのか)

幾世あやめは未知の人間だ。どれほど彼女を観察しようとも、彼女の本質が理解できない。彼女が掴んでいる情報の出所が分からない。幾世あやめがどうやって世間をだし抜けているのか分からない。未

知は恐怖だ。理解できないというのは恐ろしい。理解できないというのは怖い。幾世あやめはまるで実態の掴めない幽霊のようだ。恐ろしい。怖ろしい。おそろしい。私、森谷帝二という男は数多に存在する人間の中でも賢い部類に入ると自覚している。その私が幾世あやめを一片たりとも理解できないその事実がどうしようもなく恐ろしかった。

(兎にも角にも、震えを抑えなくては)

私はベルモットと幾世あやめに気が付かれないようにグツと手力をいれる。そうやって、どうにかして手の震えを抑え込んだ頃、彼女たちの対談は終わりを見せ始めていた。どうにも幾世あやめがベルモットを傘下に収めることに成功したらしい。凡庸な幾世あやめならできないはずのその光景に、私の顔がひきつってしまったものだ。なんとか私はその場を取り繕い、逃げるようにしてその場を後にした。

——ここで私に転機が訪れる。

慌てて自宅に戻った時、あることが思い浮かんだのだ。

「幾世あやめを殺そう」

私が誰かに後れを取るなどあってはならない。幾世あやめを殺せば、私が恐怖心を抱く人間は工藤新一以外にいなくなる。勿論、工藤新一も殺す算段だが、幾世あやめを早めに処理した方がいいだろう。理由は簡単だ。幾世あやめが凡人だからだ。私が凡人なんぞに負けているなんて、できるだけ他の人間に知られたくない。

だから。

だから、私はジャック・ザ・リッパーに依頼したのだ。

まだ幾世あやめが出会ったことすらない切り裂きジャックに対して『工藤新一を追い詰める』と言ったのである。

幾世あやめは工藤新一にやけに執着している。基本的に復讐相手にしか興味を抱かない彼女が、だ。いや、執着というよりも殺意に近いか。彼女は工藤新一を『ホームズ』と呼び、常々彼を殺したがっていた。優しげな瞳を細め、「邪魔だなあ」と言っていたのだ。

幾世あやめが復讐とは違う殺意を向ける工藤新一。その彼が危機

的狀況に陥れば？ きつと彼女はウキウキとその場面を見守るだろう。まるで子供がオモチャに夢中になるように。なんなら幾世あやめはその隙を突き、自らの手で工藤新一を殺そうとするかもしれない。

そこを狙えばいい。

人が一番無防備になる瞬間とは、獲物を狩る瞬間なのだから。

(それなのに、)

逆に、私が狩られてしまった。

結果、私は幾世あやめに頭を踏みつけられる事態に陥っている。

(一体どうやって?)

確実に幾世あやめを殺せると思った。私が幾世あやめに拳銃を突きつけた瞬間、勝利を確信した。なのに何故、私は幾世あやめに敗北している？ これでは私はただの道化ではないか。舞台上で幾世あやめに操られるだけのドールではないか！ 一体、いつ、どこで気がつかれたというのだ？ 屈辱でギリつと歯を噛み締めた瞬間、ハツと気がつく。

(——まさか、初めから?)

嫌な妄想だった。

もしかしたら、もしかしたら、幾世あやめは初めから私の行動を予測していたのではないか。私が工藤新一に敗北し、幾世あやめの手駒となり、私がジャック・ザ・リッパーに彼女を殺すように依頼した——この一連の流れが全て幾世あやめによるものだったとしたら？

(ありえない！)

凡庸な幾世あやめにできるわけがない。彼女と今の今までに共にいた私だ。だからこそ、彼女の凡庸さを理解している。知っている。幾世あやめに私をだし抜けるはずがない。もしそんなことができれば、そんなことができるというのなら、幾世あやめは、凡人なんてものじゃない。ましてや、天才でもない。

怪物だ。

その事実を否定するためにチラリと視線を幾世あやめに動かす。幾世あやめはいつも通りの笑みを浮かべていた。平凡で、優しげで、虫一つ殺したことの無いような顔。私、森谷帝二をだし抜けるような雰囲気など、一片たりともまとつてはいなかった。いつも通りのその笑顔が何故か工藤新一、いや、江戸川コナンの笑みとダブる。それに目を見開く。

「は、」

私は幾世あやめに二つの感情を抱いている。『嫌悪』と『恐怖』だ。私は矛盾している幾世あやめが気持ち悪いと思っっている。凡庸なのに非凡なことをしでかしている彼女を嫌悪しているのだ。それと同時に、彼女の矛盾に恐怖も抱いている。私が幾世あやめに抱く感情はその二つしかなかった。なかつたはずだ。

(なのに今、私は、美しいと。)

幾世あやめを美しいと思った。

ブワツと視界が開ける。これはまるで、著名な建築家が手がけた建築物を見たときのような感覚。久方ぶりに味わったその感覚に胸が震えた。

——私、森谷帝二はシンメトリーが好きだ。

シンメトリーこそ私の美学。シンメトリーこそ正義。シンメトリー以外は認められない。だから私は若い頃に手がけたアシンメトリーの建築物を爆破した。美しくないから。アシンメトリーは美しくないから。なのに、私は矛盾だらけの幾世あやめを！ 今！ 美しいと思ったのだ！ その現実を理解して、口は歪み、身体が震えた。「は、はは、はっ、キヒツ、ヒツヒツヒツ」

歪な笑い声が喉から零れ落ちる。キヒツキヒツと悪魔のような声が絶え間なく続いた。私は幾世あやめに頭を踏みつけられながら、胸を押さえる。溢れんばかりの感情を制御するかのよう。ああ、何故ならば、おかしくておかしくて仕方がなかつたのだ。今、零れ落ちた感情だけで、これまで培ってきた私の美学が全て壊れてしまったのだ。

から。おそろしいことに、信じられないことに、私は幾世あやめを美しいと思ってしまった。そして、同時にこうも思ってしまったのだ。アシンメトリーの可能性を見てみたいと。

私を感じたことのない未知の美を知りたいと、そう思ったのだ。

人としての探究心が恐怖をぶち壊し、私の前へ現実として形を成す。その感情の変化に私の頭がついていけなかった。だが、一つだけ私は幾世あやめに言える。震える唇を私は開いた。

「私は、」

「？」

「貴方の物語を、見たい」

口にした言葉が私の想いを確固たるものにする。何も考えずに発した言葉。それが自分の本心だと言うことに気がつくのは早かった。

（ああ、そうだ。私は彼女の舞台を見てみたい。アシンメトリーの可能性を知りたい）

だから、私は幾世あやめの駒になる。

彼女の手掛けるモリアーティ教授になるのだ。

役者はそろそろ揃うだろう。モリアーティ、ホームズ、ルパン、その他多数。大勢の役者を操り、彼女はどんな舞台を魅せてくれるのか。矛盾を抱えた幾世あやめの物語を見てみたい。彼女の『美』を。だから、私はモリアーティを演じ続ける。例え、私が本物のモリアーティではなくとも。

（貴女が舞台上上がる、その日まで）

幾世あやめが舞台上に登場する瞬間を想像して笑みを深める。ああ、どうしてこうも彼女は舞台が似合わないんだろう。死臭を引き連れ、人々の怨念をアクセサリーとして着飾っているというのに。想像上の幾世あやめも驚くくらい凡庸で平凡だったのだ。だが、私はこれでいいと思った。

これこそが、『幾世あやめ』なのだ。

死が全く似合わない、しかし、死に一番近い者こそ『幾世あやめ』であるのだから。

森谷帝二はにつこりと笑みを浮かべた。来るべき未来を想像して。

## 其の十五： 「炎上」

「ハアツ、ハアツ、なんとか逃げ切ったか……。早く、早く、風見さんへ、ハアツ、お伝えしなくては……」

名も無き一人の公安警官——俺は車内で荒い息を繰り返した。額から流れ落ちる大量の汗を拭わずに震える左手で懐から携帯電話を取り出す。その瞬間、フツと意識が飛びそうになるも、右腕に走った痛みにより強制的に現実へ戻される。腕に視線を向けると血に染まったスーツの袖が目に入った。それを見て思わず舌打ちする。

(クツソ、こんなミスをしてしまうなんて……)

今回の任務がここまで危険だとは思ってもみなかった。本当に何の冗談なのだろう。公安での初仕事で命を落としかけているなんて。途中まではただの『裏社会と関わりのある風俗店の調査』でしかなかったはずだ。なのに、どうしてこんなことになっている？ 確かに、まあ、他の部署とは違い、公安の任務は常に危険が伴うものにはある。この程度、本来なら当たり前のことなのだろう。だが、今回の任務は新人の俺にはあまりにも荷が重すぎるのだ。おかしい。おかしすぎる。これはもつとベテランの方が担う仕事だろうが！

(あの風俗店、まさかここまでどつぷりと裏社会に突っ込んでいるとはな……。『関わりがありそう』なんてレベルじゃねえ、真っ黒もいいところだ)

どうして公安はこのレベルに達するまでに気がつかなかったんだ。今回調査した風俗店周辺には定期的に警察による調査が入っていたはずである。確か……。前回の調査は二週間前。まさかたった二週間で真っ黒に染まったというのか。裏社会における重要な仲介役を担うまでに成長したとでもいうのか。いや、そんなはずはない。そのような事例は聞いたことも見たこともない。

だが、だが、もしも。

もしも、『誰か』が本当にたった二週間で東都米花町周辺の裏社会を仕切ったというのならば、それは——それは。

世紀の怪物の誕生だ。

嫌な考えが脳裏によぎり、背筋がゾクリと震えた。直ぐに俺は頭を振ってその迷妄を外へ追いやる。待て、それは決まったことではない。無駄な思考をするな。風俗店の裏が取れなかったのは単に警察側の調査不足だったのかもしれない。そうだ、きっとそうに違いない。だから、この思考を止めろ。今、考えるべきなのは冷静な判断を失う妄想ではない。如何にして生き残り、この情報を公安へ持ち帰るかだ。先程のことを考えるのは後でもできる。追手をなんとか撒いたとはいえ、いつ発見されるかわからないのが現在の状況。迷いは死に直結する。

(早々にこの場から離れ、上司の風見さんへ報告。それが俺の仕事だ)  
俺は静かに車を発進させ、出来る限りセーフティハウスのある場所まで猛スピードで走らせた。血がにじむ右手でハンドルを切りながら左手で携帯を操作し始める。『マトは黒だった』という意味の暗号を打ち、送信ボタンを押そうと指を上げた——瞬間だった。背後から男の声が聞こえてきたのは。

「やあ、こんばんは、公安警官殿？」

一瞬の思考の停止。音も、匂いも、視界も、時も、全てを置き去りにして自分の周りが歩みを止める。この時、初めて息ができなくなるという体験をした。冷水を頭から被ったかのように全身が冷えていく。周囲に置き去りにされる中、俺は眼球だけを必死に動かした。視線をバックミラーに向けると目に映ったのは五十代くらいの男。その男には見覚えがあった。

「お前は…確かあの風俗店の客…？ 何故、ここに」

「また会えて嬉しいよ」

ニンマリと笑う男を見て、自分の右手が微かに震えるのが分かった。自分でも笑ってしまうほどに動揺している。だが、仮にも俺は公安警察。無様だろうが何だろうが、状況を打破しようと必死に頭を回転させた。

（この男は『有栖川』という名前の会社員。調査結果では白で、何の関わりもない一般客——だったはず）

まさかこいつが全ての黒幕だったとでも言うのだろうか。仮にも公安警察である俺が徹底的に調べ上げ、『白』だと判決を下した人物が。そんな……あり得ない。あり得るはずがない。だが、有栖川という男に背後を取られている事実が俺の幻想を現実にした。

（俺は……ここで死ぬ、のか）

恐らく俺はこの場で殺されるのだろう。既に背後が取られている今、逃げ場は最早ない。しかし、やるべき事は成した。たった今、風見さんへあの風俗店が黒であるというメールをこっそり送ったのだから。また、黒幕の有栖川のこともこの車に備えつけられている盗聴器により、公安へ伝えられることだろう。つまり、俺はなんの憂いもなく死ぬことが出来るのだ。そう考え、自分の顔に自然と笑みが浮かぶ。震えは止まり、真っ直ぐと後ろの男をバックミラー越しに見つけた。

「お前が何を考えているかは分からないが、」

「——『俺の勝ちだ』とでもいいだけだね。これは何か分かるかな？」

「は、」

『有栖川』という男の手を見て、息を呑む。奴の手には携帯電話と盗聴器があった。俺は限界まで瞳を見開かせ、次の瞬間、バツと左腕に視線を向ける。隠し持っていた携帯を見て、まさかと呟いた。

「この携帯は……偽物……？」

ドツと冷や汗が流れた。再び襲いかかる緊張感。それと同時に胸を占める疑問。一体、いつ、どこで、誰が、俺の携帯を。何故、何故、どうして。魔法でも使ったとでもいうのか。あり得ないことの連続で脳がパンクする。だが、これだけは分かった。

俺はこの男の手の上で踊り狂わされていただけなのだ。

全ては無に帰した。左手から携帯が滑り落ちる。諦めて車を停車させようとブレーキを踏んで——俺はギョツとした。

「と、止まらない……?!」

「おや、私の手で直々に殺されたかったですか？ それは残念。できませんねえ」

「な、」

「貴方はここで何も成せず、公安としても死ねずに、ただの無能として消え逝く。哀れな貴方に一つだけ教えて差し上げましょう。」

——我が名はジェームズ・モリアーティ!! 非力で無力な警察よ！ 精々吠えるがいい！」

己を『ジェームズ・モリアーティ』と称した有栖川という男は高らかに笑った。邪悪で恐ろしい笑い声が車内に響き渡る。次の刹那、モリアーティは車から飛び出して、隣で並走していた別の車に乗り移った。それを啞然と見送る。奴の車が俺から離れて行く様子を見ながら数秒間ぼかんとしていたが、ハツと現実に戻った。

(なに、を、呆然としているんだ俺は！ モリアーティとかいうふざけた野郎がいなくなったんだ！ 俺も車内から飛び出せ！)

時速は既に百は超え、どんどんと加速していった。今、この速度の車から飛び出せば高確率で死ぬだろう。だが、このままこいつに乗っていけばもうすぐ谷底に落ちる。ちなみに、現在地は山道であり、あと少しでカーブに差し掛かってしまう状況だ。車から飛び出するか、谷底へ落ちるかと聞かれて、後者を選ぶ馬鹿はいない。

そう考えて、俺は慌ててドアを開けようとするも、開かなかった。細工されてやがる。素早く諦めてモリアーティとやらが出て行った後部座席のドアから飛び出そうとした瞬間だった。ドクンと心臓が跳ねたのだ。それと同時に目の前が赤で彩られる。

「…血？ 何故、今、吐血を…」

突然の胸の痛みと共に口から吐き出された血。車の座席に飛び散った赤色を見て、再び目を見開いた。そして、直ぐに理解する。自分とはとつくの昔に毒を飲まされていたのだと。既に俺の死は確定していた。本来ならあの男は俺と会話する必要などなかったのだ。ただ見ていれば俺は勝手に死んだのだから。だが、俺を、いや、公安警察を完膚なきまでに貶めるためにあの茶番を『敢えて』行っただろう。公安警察の誇りを、尊厳を、鼻で笑う為に。

その事実気がついた時、沸騰するかのように顔がカツと赤くなる。拳を血が滲むほど握り、喉が潰れるまで叫んだ。

「おのれ、ジエームズ・モリアアア、アアア、アティイイイイ!!」

俺の叫び声は誰にも届くことなく、車と共に谷底へ消えていった。

・  
・  
・

私、幾世あやめは今、佐藤刑事にお姫様抱っこをされている。

何を言っているのか分からないと思うが、当事者であるはずの私も今の状況をいまいち理解していない。どうして佐藤刑事に、しかも、女性にお姫様抱っこされているのだろうか…。そして、何故、佐藤刑事はこうも軽々と成人女性を抱き上げて爆走できているのか…。コナンは女性陣があまりにも強すぎて真面目に笑えない。

私が遠い目をしていると、佐藤刑事と並んで走っていた毛利蘭が心配そうにこちらを見てくる。彼女の手の中には灰原哀がぐったりとした様子で抱え込まれていた。

「佐藤刑事、大丈夫ですか?! そろそろ哀ちゃんと幾世さんを交換しますっ。」

「それでも私は刑事だから鍛えてるから幾世さんくらいへっちゃらよ! ありがとうね、蘭ちゃん」

「さ、佐藤刑事…本当にすみません…すみません…」

「幾世さん気にしないで。刑事として当然のことをしているだけよ」  
「皆さん、前を向いて走ってください! 足を取られてしまいますよ!」

「有栖川さんの言う通りだよ。気をつけて、蘭姉ちゃん、佐藤刑事!」  
毛利蘭と佐藤刑事が強すぎる会話を交わす中、横からコナンと有栖川——私の上司役として演技している森谷帝二さんが注意する。その注意の仕方は少々キツめだった。通常なら『そんな言い方はないだろう』と眉を顰めていただろう。だが、コナン達の口調が強くなるの

も無理はなかった。なんせ今、私達は――…

燃え盛る豪華客船の中を走っているのだから。

本当に現実逃避したい。どうしていつもいつもこうなんだ。コナン、毛利蘭、佐藤刑事、森谷帝二さん、気絶済みの灰原哀、並びに協力者兼部下モブ計六名と一緒に走るの超辛い。頼むから凡ゆるところで建物を爆発させないでくれ。今回は特に酷くないか？ 私の生命の危機じゃないか？ 何で船が簡単に燃えるんだよ。安全設計は何処へ消えたんだよ。はーはーこれも全てコナンのせいだ。内心で溜息を吐くと、先程の爆破により負傷した自分の足に痛みが走る。それを見て更に深い溜息を吐いた。

（まさか爆破で足を怪我するとはな…。コナンとくれば復讐の邪魔だけではなく、私の身体に傷をつけるなんて…）

あいつ本当になんなの?! 怖いんだけど!! こんなこと憧れのコナンには言いたくないけど、マジで怖い!! 恐怖しか覚えない!! はあ、もうやだあ…。しかもさあ、この足が原因で佐藤刑事にプリンセスホールドされる羽目になってるしさあ…。コナン…。もうやめて…私のライフはゼロよ…。

（森谷帝二さんに『楽しいショーを観に行きませんか』って勧められたからって、豪華客船になんてくるんじゃないやなかった。豪華客船とかフラグの塊じゃん。馬鹿か私は!）

死ぬほど後悔しながら私は内心で号泣する。森谷帝二さんが豪華客船のチケットを持ってきた時、何故、私は断らなかったのか。普段なら絶対に拒否していたんだけどなあ…。あの時の私はコナンへのストレスがマツハすぎて泥酔しちゃってたからね…。軽くオツケーしてしまつたよなあ…。

次の日、素面に戻って「豪華客船とかコナンフラグでは？」と確かに考えはしたさ。だが、その時は森谷帝二さんとの約束を反故にする方が怖くてできなかった…。あの人、約束破られるとガチギレしてくるからな。マジ怖いからな…。結果、私は豪華客船に乗ることになっ

たのだ。そして、船の中に入った瞬間、自分の目が死んだ。

「地獄かこは」

当然のように船にいるコナン、毛利親子、鈴木園子、阿笠博士、灰原哀。加えて、怪盗キツドの予告状により警備に駆り出されている警視庁捜査一課の目暮警部、高木刑事、佐藤刑事、千葉刑事。それだけでも頭が痛いのに公安勢の安室、風見まで視界に入ってくる。そこへトドメを刺すかのようにこれまた変装済みのベルモットがいた。

（え？ 何これ映画?? それともスペシャル仕様??）

こんな回あったか……? やばい、思い出せない…。この世界は今、漫画ではなく現実だ。故に原作にはない豪華仕様があってもおかしくはない。だが、だがな? 私がいるときだけはキャラクターのバーゲンセールはやめてくれ…! もっと出し惜しみしろよ!!

悪夢、『ミステリートレイン』の再来に頭を思わず抱えた。先生がまさかのベルモットだと判明した時と似たようなメンツなのは何故。この場から直ぐに立ち去りたい。しかし、既に船は出港しており、辺りには海原が広がっている。逃げ場がねえ。海へ身投げしろとでも言うのか。あんまりな現実に泣きそうになる。その時、私の隣にいた『幾世あやめ』の上司役『有栖川』を演じている森谷帝二さんがニタリと笑った。彼は私の耳元で囁くように声を発する。

「舞台は整いました。ショーを楽しんでください」

どうやって楽しめと?!?!

楽しむというよりも命の危機しか感じないんですがそれは……。えっ、ちよ、まつ、待つて、本当に待つて。この混沌を極めているメンバーはもしやお前が集めたのか。そうなのか。私、幾世あやめはそんなの微塵も望んでないんだけど。何でこんな絶望しか期待できない舞台を整えたんだ貴様?! しかも、どうやって集めた?! 怖い。マジで森谷帝二さんの手腕が怖い。ああもう、本当に何を考えているんだ…。

（前から理解不能だったけど、ピンヒールで森谷帝二さんを踏んでからヤバさに磨きがかかってないか…?!）

それともアレか? 二週間程前に風俗店を紹介したからか? マ

ジで？ やっぱリアルで森谷帝二さんの性格が更に歪んだの？

だってさあ、匿名質問サイトで『ピンヒールで踏まれて喜ぶ部下をどう扱えばいいか』と聞いたら、『SMクラブに連れて行け』って言われたんだよ！ ピンヒール事件のせいで思考停止状態だった私は「連れて行った…ほうがいいの…？」となって、奴を風俗店へ放り込んじゃったよ!! そうか、それが全ての間違いか…。うん、そうだよな…。仮にも女の私が部下をSMクラブに押し込むなんて何やってんだ…。これが普通の会社とかならセクハラで捕まるぞ、私が。

もう森谷帝二さんに近づきたくない。頭の回転早すぎるし、何考えているのか分からないし、ドMだし、意味不明すぎ。私の半径1メートル以内に入って欲しくない。マジで怖い。酷いことを言っているのは理解しているけど、仕方ないと思う。怖い。

(も、森谷帝二さんと離れよう)

今回、私の付き添いとして森谷帝二さん以外に我々の部下役を担ってくれているモブ男君がいる。彼に森谷帝二さんを押付けて逃亡しよう。そうしよう。これ以上この男と一緒にいると恐怖で頭がどうにかなりそうだ。

そう思っ、森谷帝二さんから離れたのが運の尽き。

逃げた先になんと安室透がいたのだ。

やつつつつべー男その二とまさかの廊下で遭遇。思わず真顔になり、どうしたものかと胃を押さえた。この豪華客船で安室透との遭遇なんて何かしらのフラグとしか思えない。できることなら『自意識過剰乙!』で終わって欲しいが、私のやらかしまくっている経歴がそれで終わらせてくれなかった。私、結構人を殺してるからな…。クズでごめん…。

(色々考えても仕方がない。うん、逃げるか!)

安室透は私にまだ気が付いていない。今ならまだ間に合う。慌てて踵を返そうとした——その瞬間だった。安室透から耳を疑うワードが飛び出してきたのは。

「——ジェームズ・モリアーティ、だと？」

フアツ?!

何故、安室透が『ジエームズ・モリアーティ』を口にしてるんだ。私達に彼が気がついたとでも……マジで？ えっ、本当に無理。死にそう。いやいやいやいや落ち着け落ち着け、幾世あやめ。これはストレスによる幻聴じゃないか……？豪華客船に乗ったと思えば絶望のオンパレードだもんな。幻聴が聞こえてもおかしくはない。だが、経験からしてこれは幻聴じゃないんだろうなあ……。幾世あやめ、知ってる。いつも『いやいやまさかそんなことあるわけない』と思ったことと全てそんな事あったもん。現実是非情である。

(でも、待てよ。安室透の『ジエームズ・モリアーティ』は本当に私達のことを指しているのか?)

ここはコナン世界。コナンがホームズと称されているこの世界では『シャーロック・ホームズ』関係のワードが多い。安室透が口にしたモリアーティも隠語か何かの可能性はあるのでは？ だって私、公安警察に対してこれと言って何かした記憶ないし。

……もしや以前にあつた切り裂きジャック事件でのジャック・ザ・リップーによるモリアーティ発言のせいかな？ 警察でのジャックの扱いは恐らく超危険人物指定になってるはずだ。そのせいで公安がモリアーティを調べ出した……？ だが、原作から想定するに、安室透の管轄は黒の組織関係だ。重要任務に就いている安室透を別の任務に回すだろうか……？

(訳がわからないよ。頼むから安室透、お前は黒の組織へ集中していてくれ！ こっちは来るな!!)

心からの叫びだった。

安室透や赤井秀一には是非とも黒の組織に集中してほしいものだ。あの二人が活動すればするほどコナンの興味も私から薄れてくれるからな。一石二鳥だ。ついこの間まで安室透と赤井秀一メインの『緋色シリーズ』の回が来ていたおかげで、コナンとの遭遇率が格段に落ちていたというのに。なーんで、終わっちゃうかなあ……。

(……って、それは今考えることじゃないな。早々にここから離脱しよう。危険だ)

私は抜き足差し足忍び足でその場から離脱した。なんとか安心できるところまで離れた後、ホッと息を吐く。不意に空を見てみると既に暗くなりはじめていた。寿命が縮む安室透との遭遇及びに森谷帝二さんから逃亡で結構な時間が経過してしまっていたらしい。そろそろパーティが始まる時刻だ。全くもって行きたくないが、一応、一般人『幾世あやめ』の仕事としてここに来ていたため、参加せざるを得ない。結果、泣く泣く私はパーティ会場へと向かった。

その数時間後、パーティに参加したことを私は死ぬほど後悔する羽目になる。

パーティ開始と共に登場する怪盗キッド。

盗み出される宝石と目暮警部の怒声。

騒ぎに紛れて当然のように起こる殺人事件。

解決に奮闘するコナン達。

真犯人に辿りついた途端に爆発し始める船内。

逃げ惑う人々。

気がつけば本陣と分断され、コナンと一緒にいる私。

そして、何故かコナンを庇う羽目になり、足を負傷して佐藤刑事にお姫様抱っこをされる私。

———こうして冒頭に至るわけである。

コナン作品の様式美がふんだんに盛り込まれた事件だったよ……。今回の事件の規模は最早映画レベル。イン○タ映えならぬ映画映えを狙った華々しい爆発の数々に真面目に死ぬかと思いましたが。でも、まだ私達は燃え盛る豪華客船の中にいるので危機は脱していない。これから見せ場を作るために何かしらの危険がありそうので破茶滅茶に怖いです。

本日何度目か分からぬ遠い目をした時、ガタンつと船が盛大に揺れた。あまりの揺れにその場にいたコナン、灰原哀を抱える毛利蘭、佐藤刑事、森谷帝二さん、協力者兼部下モブ男の計五名がたたらを踏む。振動が収まるまで待っていると、次の瞬間、天上から金属が軋む音が

聞こえてきた。ハッと全員が上を見た刹那、天上から鉄筋が落ちてくるのではないか。

(ほんぎゃあ?! 死ぬ!! 鉄筋に押し潰されて死ぬ!!)

死を直感した私は足を負傷しているのにも関わらず、佐藤刑事の腕から飛び出して身をよじる。ズサーッと床を滑り落ちたと同時に盛大な音を立てて鉄筋が地面へ落ちた。あつつぶねーっ!! ガラガツシャーンツと言う音を聞いた後、私は上半身を起こす。崩れ落ちた鉄筋を見ると、廊下を完全に封鎖してしまっていた。その通れなくなった道の向こう側から佐藤刑事、灰原哀を抱えた毛利蘭がいる。毛利蘭は慌てて鉄筋に近寄り、そして、諦めたように呟いた。

「駄目、通れない…」

「蘭ちゃん、そこはまた崩れるかもしれないわ! 離れて! ……コナン君、幾世さん、有栖川さん、定仙さん、お互い別のルートから脱出しましょう」

「…そうですね、また会いましょう」

「蘭姉ちゃん気をつけてね!」

「コナン君も!」

別ルートで脱出することに私からも文句はない。だが、私の所属するメンバーが問題だ。どうして! コナンが! いるんだ! ヒロインの蘭姉ちゃんと灰原哀のところへ行けよ!! こっちくんない!! ……ああ、本当に頭が痛い…。でも、私側に『有栖川』として暗躍する森谷帝二さんと、協力者の『定仙(じょうせん)』さんがいるからまだマシなのかな。正直、森谷帝二さんが何をやらかすのか分からなくて怖いけど。…アレ、これマシなのか……? 不安しか感じないメンツじゃないかコレ……??

私があればこれ考えていると、協力者兼部下の定仙さんが私をおんぶする。彼は「本当は刑事さんじゃなく男の俺が背負うべきでしたね。佐藤刑事には断られちゃいましたけど」と苦笑いしながら言った。定仙さんの優しさがつらい。そんな私と定仙さんの会話を見たコナン君は『よし!』というように頷く。そして、彼は目を鋭くさせつつ、口を開いた。

「急ぐう!!」

コナン、私、森谷帝二さん、協力者の定仙さんという四名は脱出に向けて走り出す。嫌な予感がすると思っても引き返すことはできない。燃え盛る豪華客船を歩くしかないのだ。

(タイムスリップして過去の自分を殴りてえ…)

胃を押さえながら、私、幾世あやめは切実にそう思った。

## 其の十六：「幻想は現実のものとなる」

一連の『首』に関する事件の真犯人。

全ての黒幕が——判明した。

影の首謀者は有栖川。

又の名を『森谷帝二』。

俺、江戸川コナンは『もりやていじ』という記号を噛みしめるように小さく口にした。ドクドクと心臓が強く波打ち、微かに手が震える。武者震い、というやつなのだろう。己の感情を抑えるために胸のシャツを握り、息を吐き出す。チラリと横に視線を動かすと有栖川と森谷帝二が常人ぶった表情でそこにいた。奴を見た瞬間、俺は眉をひそめる。

(今すぐにもこの場で森谷帝二を取っ捕まえてえ)

しかし、残念ながら『今』は出来なかった。何故ならば現在、俺は、いや、俺達は燃え盛る船の中を走っているからだ。共に出口に向かつて足を動かしているのは森谷帝二、幾世さん、幾世さんの部下の定仙さん、計3名だ。幾世さんは怪我により定仙さんに背負われているので実際に走ってはいないが、逃亡メンバーの一人である。

このような最悪な状況に陥っている理由はただ一つ。今回、豪華客船で起こった殺人事件の犯人が船を爆破したからだ。しかも、その犯人がこの船の船長だというのだから笑えない。的確に、迅速に、寸分の狂いなく、犯人は豪華客船を爆破したのである。俺はただこの船へ宝石を盗みに入るキッドを捕まえるため、蘭達と共に豪華客船へ来ただけだというのに、何故こうなってしまうのか。いや、それは一先ず置いておこう。考えるのは有栖川こと森谷帝二のことだ。

(ここで森谷帝二に真実を突きつける、か？ いや、それをすれば奴が何をするか分からねえ……。下手をすれば幾世さんと、彼女の部下の定仙さんに危害が及ぶ。それどころか俺が死ぬかもしれない)

周りでは凡ゆる物が燃え、金属が軋む音がする——危険極まりない状態である。いつ何処かが崩れ落ちたり、海水が入ってきたりしてもおかしくないのが現状だ。現に、鉄筋の落下により先程まで一緒に逃

げていた蘭、灰原、佐藤刑事達と分断されてしまっている。こんな場所  
所で森谷帝二の本性を露わにすれば奴が何をしでかすのか分かった  
ものではない。無関係の幾世さんや定仙さんを巻き込んでしまう可  
能性がある。

(クソオツ！ ようやく、ようやく、『モリアーティ』に辿り着けたと  
いうのに！ ここでこいつを逃せば、次に捕まえられるのはいつにな  
るのか！)

今回、俺は幸運だった。自分だけでは決して辿り着けぬであろう  
『真実』を手に入れることが出来たのだ。幾重にも張り巡らされた蜘  
蛛の糸一つ一つを周りの人々の手を借りて解いていき、蜘蛛の眼前ま  
で迫ることに成功したのである。

業火の中、思い出すのは『きっかけ』。

俺が森谷帝二という真実を掴めたきっかけだった。

・  
・  
・

——— 全ての始まりはキッドから渡されたトランプだ。

『西のあまねく照らされた水は川へ流れることだろう。鏡の川に気を  
つけろ』

トランプの裏に書かれた意味深な文字。それを見て俺は首を傾げ  
たものだ。しかも、京都産抹茶のアイスと一緒にそれを渡されたのだ  
から余計意味が分からなかった。俺個人宛であろうトランプを食い  
入るようにつめ、うんうんと頭を唸らせる。

「盗みに関する暗号か…？ だが、何故、俺に？」

キッドは既に予告状を宝石の所持者に送っていた。通常ならそれ  
で終わるはずが、何故か今回は俺、江戸川コナンにもこのトランプが  
届いている。それも、俺以外が気がつかないような細工までしている  
ときだ。

(これはぜってえ何かあるな)

キッドは切り裂きジャックに協力していた前科がある。奴は犯罪者ではあるが、人道に反する行いは決してしない人間だ。きつとあいつに何かがあつた。だからこそ、キッドは俺へこのトランプを送つたに違いない。

そう睨んで俺は必死にこのトランプの暗号解読に勤しんだ。その必死さは俺の様子を見た灰原が呆れる程である。しかし、腹立たしいことに幾ら考えても今回のキッドの盗み、切り裂きジャックの件、トランプの暗号の三つが結びつかなかつたのだ。一体、この三つは何が関係するのか…。気がつけばキッドが盗みに入る時間で、思わず地団駄を踏んだものである。

その後、キッドは予告通りに登場。華麗に宝石をひつ捕らえていった。だが、仮にも俺は探偵だ。トランプ以外の予告状は解読済み。奴が逃げそうな場所もいくつかピックアップしている。凡ゆる策を練り、実行した結果、なんとか奴を追いかけることに成功。誰もいない船の甲板で俺はキッドと対面した。バサリと翻るキッドの純白のマントを見ながら、俺は吠える。

「キッド！ あのトランプは何だ?!」

「はて、何のことやら」

「何故、惚ける?!」

「全くもって私には理解できませんね。でも、一つ申し上げましょう。名探偵、いや、『ホームズ』——真実を暴け」

キッドの目はいつになく真剣だった。それに一瞬、戸惑いを覚える。「お前に何があつたんだ」と口を開こうとするも、出来なかつた。何故なら、次の瞬間、キッドが自分の視界から消えたからだ。それにギョツと目を見開き、ワナワナと震えた。

「あつ、あのヤローツ！ 俺が動揺した隙について逃げやがった…!!」  
間拔けな己の失態にギリギリと歯を鳴らす。まさか逃げるのが目的であんな言葉を発したのか…? そんな考えが一度だけ浮かんだが、直ぐに首を振つてなかつたことにした。あの目は本物だった。何度も奴と戦つてきた俺だからこそ分かる。

——キッドは俺に暴いて欲しい謎があるのだと。

奴ですら難解な謎。探偵である俺に託すほどの事件。そのことに気がついて、俺はペロリと舌を舐めた。ドクドクと活発に血液が循環していくのが分かる。知らず知らずの内に俺は笑みを浮かべた。

「その謎、俺が解いてやる」

俺は再びトランプの謎の解明に力を尽くした————かつたんだが、そうもいかなかった。豪華客船内で殺人事件が起きたからだ。しかも、またもや『首』に関する巧妙なトリックが使われた事件だったのである。恐らく、これもまた『一連の首事件』の一つなのだろう。この『一連の首事件』の真犯人、モリアーティと関わりのある切り裂きジャックに協力していたキッド。その彼が盗みに入った瞬間に『一連の首事件』が起きた。

(偶然にしては出来過ぎている。キッドは何を訴えているんだ…?)

必死に頭を動かす。だが、まだ真実へはたどり着けそうにない。パズルを解くピースが何か、何か、足りないのだ。事件により人が少なくなつた甲板で俺はぐしゃぐしゃと髪をかき混ぜる。イラつきながらも今回の事件について再び考えようとした————その時だった。ガチャリと背中に何かを突きつけられたのだ。

(なっ、誰だ?!)

この感触は————拳銃。人が溢れている甲板で一体誰がこんなことを…。今、俺がいる場所は豪華客船。著名人や各国の重鎮などが乗船することも多いため、一般人の拳銃の持ち込みはまず許可されていない。俺の背後にいる人物は余程ばれない自信があるのか、それとも別の伝手があるのか。誰だか分からないが、強敵には違いなかった。慌ててふり向こうとすると、背後から停止の声がかかる。その声には覚えがあつた。ギョツと俺は目を見開く。背後にいる人物は俺の動揺を知って知らずか静かに言葉を発した。

「振り向かないで、『ホームズ』」

この声は————ベルモット?! どうしてこいつがここにいるんだ?! 驚きのあまり動揺で「ベルモツ…!!」と彼女の名前を途中まで言ってしまう。それを聞いたベルモットが焦ることなく俺の言葉を遮った。

「シイー…駄目よ、ホームズ。その名を口にしては」

「……何が目的だ。まさか、」

「今回はシェリーではないわ。貴方に助言を、と思ってね」

助言だと？ ベルモットが？

その言葉を聞いた瞬間、自分の中の警戒レベルが一気に引き上げられる。目が鋭くなり、緊張した面持ちになった。

（『助言』という名の脅しか、はたまた別の理由があるのか）

ベルモットは油断ならない女だ。秘密をアクセサリとして着飾り、嘘という名の化粧を施し、人々の悪意で輝く女。また、本物と見間違え変装技術と秀でたコミュニケーション能力により、まるで魔法のように人間を操ることもできる人物。それがベルモット。彼女の『助言』は俺を惑わすための言葉という可能性の方が非常に高かった。この女の言葉を聞いてはいけない。そう考えて、直ぐに対策を取ろうとするも、既に遅かった。ベルモットは妖艶な声色で言葉を紡ぎだす。

「鏡の国の7811は貴方をその国へ誘おうとしているわ。気をつけなさい」

「気をつけろ」だと？ キッドの暗号文にも『西のあまねく照らされた水は川へ流れることだろう。鏡の川に気をつけろ』と書かれており、俺に注意を促す文章だった。『何』に気をつけろというんだ。キッドもベルモットも『何』を見ているんだ…？ キッドからの暗号は奴の反応から見て、今回の盗みに関係しているという線は消えた。『何か』

—— 先程も述べたように、恐らく、切り裂きジャック関係であるはず。もしやベルモットとキッドが述べているものは同じものなのか。それとも全く別のものなのか。

（駄目だ、判断材料が少ないが故に結論を出すことができない）

再びぐしゃぐしゃと頭を掻きむしりたい気分になる。ここまで追い詰められているのは久方ぶりだった。腹立たしいことに何も分かっていない状況だが、これだけは言える。キッドはともかく、ベルモットの言葉を信じるべきではない。だが、俺の脳は瞬時に彼女の言葉の意味を解読し始めようとしていた。

(…つて、俺は今拳銃を突き付けられてるんだぞ?! そつちを先に対処しろよ、俺!)

探偵の性というのは怖い。命が懸かっている状況でも思考を始めてしまうのだから。俺はハツとなり、ベルモットの方へ意識を向けようとした。だが、その先には既にもう誰もいないことに気が付く。慌てて後ろへ振り向くと、自分の背後には甲板を歩いている一般客しかいなかった。それを見て俺は思わず自分の膝を叩く。子供の身体がその強い打撃に悲鳴を上げた。

「キッドも、ベルモットも、一体何だつて言うんだ…。色々ありすぎてごちゃごちゃになってやがる…! くそ、くそ、くそッ!! これじゃあキッドの暗号も解けねえし、モリアーティにも近づけねえ…!」

「——ホオー…『モリアーティ』ね。コナン君、僕にもそれについて詳しく聞かせてくれるかな」

その声に一瞬ピシリと固まる。だが、聞いたことある声色に固まった身体を緩めた。隣に視線を向けるとそこにいたのは金髪に褐色肌の男。見慣れた顔に俺は驚いて目をパチパチとさせた。

「安室さん…?!」

「やあ、コナン君。奇遇だね」

安室さんはニコニコと笑みを浮かべながらこちらへ近づいてくる。それを見て俺は困惑した表情を浮かべた。

(どうして安室さんがここに…?)

先程ベルモットと遭遇したことから、もしや彼は組織の仕事で来たのか。そうであれば灰原がヤバイ。早々にこの場から離脱して灰原を隠す必要がある。それとも公安の仕事なのか。どちらかなのかは判断がつかねえな…。ジツと安室さんを見つめると、彼は顎に手を添え、考えるように言葉を発する。

「うーん、それには深い理由があつてね。ああ、それよりも僕の部屋でゲームでもしないかい? とつても面白いゲームなんだ」

「…へえ? …ボク、そのゲームしたーいなあ!!」

安室さんは再び気味が悪いくらいニツコリと笑った。それに対して俺も子供らしい笑顔を見せる。なるほど、そう来たか。ここで話せない情報、ね。

(さて、鬼が出るか蛇が出るか)

心の中で目を光らせ、探偵らしい笑みを浮かべた。

・  
・  
・

「死んだ公安捜査官が最期に『ジェームズ・モリアーティ』と叫んでいた、だつて…?」

「ああ、それも喉が潰れるんじゃないかってくらい必死な声でね」

「他には、他には何かないの?!」

「残念ながら何もないんだ。分かっているのはこの捜査官が最後に調査していたのは某風俗店だということと、盗聴器に残ったこの『ジェームズ・モリアーティ』の言葉だけ」

安室さんはパソコンを操作しつつも淡々と答えていく。彼の様子を見ながら俺が「捜査官の死因は?」と聞いてみると、続けて安室さんは「山道を走行中、車ごと谷に落ちて墜落死だ。幸い、車は爆発することはなかったが、著しく車体は凹み、死体の損傷も激しいとか。特に首の傷がひどい」と言った。その言葉を聞いて、俺は椅子の上で胡座をかき、腕を組む。

(まただ。また『モリアーティ』が登場した)

最近、俺は『モリアーティ』という言葉ばかりをよく聞いている。今、安室さんが口にしたモリアーティだけではなく、初めて『一連の首事件』の真犯人に気がついた時、イギリスの新聞に書かれていた『モリアーティ』の文字。それに加えて、ジャック・ザ・リッパーもまたモリアーティという言葉が口になっていた。どうしてこんなにも悪役であるモリアーティばかりが俺の前に現れる? 偶然の産物で終わることが出来ないくらい、ここ最近、『モリアーティ』というワードが

何度も出てきていた。普通ならば主人公であるホームズが出てきそうな、も、の、を——

——ホームズ？

脳裏にビリビリツと電流が走る。不意に俺は目を見開かせた。『ホームズ』のワードに何か引っかけを覚えからだ。何故俺は今、ホームズという単語に違和感を抱いた？ 世間から俺が平成のホームズと、そう呼ばれているからか。だから、気になったのか…？ いや、それにしても理由は弱い。先程も誰かに『ホームズ』と呼ばれたような…。スツと口元に指を近づけ、身を屈めた。

(呼ばれた『ような』じゃない。確かに呼ばれた)

他でもない、キッドとベルモットに！

しかも、キッドに至っては態々言い直していた程だ。「名探偵、いや、『ホームズ』—— 真実を暴け」と意味ありげに言っていたのである。ベルモットに関してはキッドとは違い、自然にホームズと口にしてはいた。だが、奴は俺のことを前までは『クールガイ』などと呼んでいたはず。何故、今日に限ってキッドと口裏を合わせたように俺をホームズと称したんだ。そして、どうして今、安室さんの口から宿敵『モリアーティ』の名前が出た……？

(安室さんの『モリアーティ』は別件のように思える。だが…)

そこまで考えて、俺はハッと閃いた。次の瞬間、以前に遭遇したジャック・ザ・リッパーの言葉を唐突に思い出す。キッドと共にいた切り裂きジャックの発言が脳裏に過つたのだ。『モリアーティが動いている』『開幕ベルは既に鳴った！ ホームズ、君の喜劇を楽しみにしている！』——彼の言葉がとある推測へ俺を辿り着かせる。

(もしも、このキッドとベルモットの暗号、公安監査官の事件が——  
——全て『一連の首事件』に繋がりとしたら？)

公安捜査官の死因は墜落死だ。だが、首に著しく損傷があると安室さんは言っていた。ただの墜落死で首のみにそこまでの傷が出来るだろうか。あの安室さんが『特に首の傷がひどい』と言ったのだから、余程特徴的か、もしくは目に入る損傷だったに違いない。また『首』だ。また、首に関する事件である。一連の首事件と同じだ！

そう思った刹那、自分の背筋がゾクリと震えた。自然と己の顔に笑みが生かんで行くのが分かる。ドクドクと心臓が激しく動き、脂汗が額に滲んだ。ギョツと胸の服を握り、震える身体を無理矢理押さえつける。

（落ち着け。もしもこの推理が合っているなら、キッドとベルモットの暗号の意味、そして、公安警察官を殺した犯人は…もしや…）

溢れんばかりの衝動をため息を吐くことにより緩和させる。少し落ち着いてきた。気持ちや和らいだ俺は直ぐに携帯を取り出し、マップを開いた。そして京都のある地点を見て、笑みを深める。そんな俺の突然の動きが怪訝に思ったのだろう。安室さんは眉をひそめながら「コナン君？」と首を傾げた。その時、俺はバツと顔を安室さんへ向ける。

「安室さん！ 森谷帝二の写真ってある?!」

「は？ 森谷帝二？ ……確か元東都大学建築学科教授で、連続爆破事件の犯人だったかな。もう既に捕まっている彼がどうかしたのかい」

「犯人かもしれないんだ」

「何?」

「公安捜査官を殺害した犯人かもしれないんだよ!」

俺の発言を聞いた安室さんは目を見開かせ、「何だつて…?」と呟いた。そして、直ぐ眉を寄せる。彼は俺の目を真っ直ぐに見据えながら「根拠は」と冷静に言った。安室さんの言葉の後に俺はすかさずポケットからキッドのトランプを取り出す。『西のあまねく照らされた水は川へ流れることだろう。鏡の川に気をつけろ』と書かれたそれを安室さんへ突きつけた。

「つい先ほどキッドから秘密裏にこのメモをもらった。京都産抹茶アイスと一緒にね」

「それで?」

「このトランプは幾世あやめさんの上司である『有栖川』さんに気をつけろと言っているんだ」

「どうしてその文から有栖川さんに繋がる…?」

「安室さん、この携帯のマップ見て」

俺は安室さんに自分の携帯を渡す。そこには京都のマップが表示されていた。彼はその画面を真剣な表情で見つめる。数分そうしていたかと思うと安室さんは声を上げた。

「キッドの『西のあまねく照らされた水』は京都の広沢池のことか！

日本三沢の一つの！」

「安室さんも分かったみたいだね」

安室さんが手を叩いたのを見て、俺は頷く。広沢池は京都右京区に存在している池で、別名『遍照池』とも呼ばれている。京都での『西』は右京とも呼び、キッドの『西のあまねく照らされた水』の『西』とは右京区のことを指すと俺は推測。この推測で右京区にある『あまねく照らされた水』が何処かと考えると、遍照池こと広沢池に繋がるというわけだ。広沢池の別名である遍照池の『遍照』の意味とは『あまねく照らすこと。広く照り渡ること』なのだから。

「キッドの『西のあまねく照らされた水は川へ流れることだろう。鏡の川に気をつけろ』の前半部分が広沢池だとすれば、その池から流れた水が合流する川は…」

「そう——有栖川だ」

俺がその言葉を口にすると安室さんは口角を上げる。彼は俺と同じ『探偵』の目をしていた。安室さんの目の奥には轟々と燃え盛る火が灯っており、それをみて思わずこちらも口元を緩める。やっぱりそうこなくっちゃな。安室さんは公安だが、どちらかといえば探偵らしく見える。こうやって謎解きを共にするのは俺と同じ思考をする探偵に限るものだ。俺がそう考えていると、安室さんは直ぐに無表情に戻り、俺に向き合ってきた。

『有栖川に気をつけろ』とキッドは伝えようとしている、そう言いたいんだね？ でも、『西のあまねく照らされた水は川へ流れることだろう。鏡の川に気をつけろ』の『鏡』の部分はどう説明する？」

「ここ出てくるのがベルモットの言葉、『鏡の国の7811は貴方をその国へ誘おうとしているわ。気をつけなさい』さ」

俺が不敵に笑うと、安室さんが「コナン君、ベルモットと接触した

のか?!」と驚いた顔をする。それと同時に「ベルモットの言葉を信じるのかい?」と難しそうな表情も浮かべた。安室さんのいう意味は分かる。だが、信じざるを得なかった。キツドのこのトランプの暗号とベルモットの暗号が切つても切れぬ繋がりを持っていたからだ。

「キツドの『鏡』はベルモットの暗号と繋げるための言葉だと推測している。その上で『鏡の国』と言って思い出すのは『鏡の国のアリス』。『不思議の国のアリス』の続編であり、ルイス・キャロルの児童小説だ」「『ありすがわ』と『アリス』——偶然では片付けられないほどに一致している…。更には二人とも最後に同じ『気をつけろ』の言葉」

「しかも、キツドもベルモットも僕を『ホームズ』と呼んでいたんだ。まるで口裏を合わせたように。普段、そんな名前で僕のことを呼ばないのよね」

「成る程。…それで、ベルモットの『鏡の国の7811は貴方をその国へ誘おうとしているわ』の『7811』だが、まさか…」

安室さんは口元に指をそえ、目を鋭くさせる。獲物を狩る獣のような眼差しで俺を見据えた。俺はそれを見て、口角を上げる。胸ポケットから取り出したメモにペンでサラサラと『7811』と書いた。その紙を安室さんへ掲げる。何故だか震えが止まらなかった。

「7811を崩して書いてみると、とあるローマ字が浮かび上がる。その文字は——

——『TEIJI』。そう、森谷帝二の『ていじ』がね!!」

俺、江戸川コナンの脳裏に森谷帝二の後ろ姿が過る。四十代後半から五十代前半ほどの英国紳士風の男の幻影がこちら側に顔だけを向け、ニヤリと笑った。俺はその幻影に向かって手を伸ばし、グツと握りつぶすように拳を握る。次の瞬間、現実世界に戻り、空虚を掴んだ自分の手が視界に入った。それを見てハラハラドキドキとした感情が胸の内から沸き起こる。

(ようやくだ。ようやく、幻想が現実近づいてきた!)

あんなにも遠かった後ろ姿が今、ようやく見えてきた。ただの幻影

が形を持って俺の前へと現れてくれたのだ。このチャンスは逃してはいけない。モリアーティを、森谷帝二を逃してはいけない。これ以上、犯罪を起こさせてたまるものか。罪なき人々を死なせてたまるものか。

(待つてろよ。必ず、必ず、俺が捕まえる)

そう決意して小さく息を吐き出した。気持ちを落ち着かせ、俺は安室さんに再び向き合う。こちらがあれこれ考えている間に結構な時間が経過していたらしい。彼は公安のツテで森谷帝二さんの写真を既に用意してくれていた。安室さん曰く「森谷帝二は元東京都大の教授であり、著名な建築家だったのにも関わらず、写真や動画がなくなっていた。綺麗さっぱりね。探してくれた知り合いが『普通の奴なら探すのを諦めてた』とまで言われたよ」とのことだ。

それを俺は受け取り、灰原に森谷帝二と有栖川が同一人物かどうかの調査を依頼。灰原は「これだから工藤君は…。突然いなくなったと思えばまた事件？ それに、森谷帝二は今、牢屋の中じゃないの？」と愚痴りながらも照合をしてくれた。

結果は——黒。

森谷帝二と有栖川は同一人物だと判明したのだ。

真実はもう目の前に近づいている。そのことに胸を高鳴らせながら、冷静な俺は首を傾げていた。

まるで、誘導されているようだ。

そう思っただけでも歩みは止められない。そうさ、逆に考えよう、誘導されているというのなら大歓迎だ。幾重にも張り巡らされている蜘蛛の糸に飛び込み、こちらが絡みとってやる。

「やあ、」

——待つている、モリアーティ。